

若し或は平和扶翼を知らず、港外碇泊の軍艦が、何等の防禦準備を爲さざりしと謂はんか、ノールウキクライが、反對の證明を如何せん、同紙はツエザレウキチの損傷に就き説を爲して曰く、戦艦ツエザレウキチは、グリゴロウキチ大佐の指揮の下に、暗礁に近く、第二列各艦の後に其位置を取り、全艦隊は汽力を蓄へ、速射砲を装填し、若し水雷攻撃に會することある場合には、何時にても之を撃退すべき命令を受け居りたりと雖も、此夜々襲を受くべきことは、何人も思ひ及はざりし所なり。ツエザレウキチ艦長は、午後十一時三十分、水雷艇攻撃に對し、防禦すべきの信號に接し、二分時を出てさるに方り、已に速射砲の射撃は開始され、僅かに船室を出つれば、二隻の日本驅逐艦の馳走し來りたる瞬間、明かに水雷の艦尾に向ひ來るを見たる一抄時、轟然たる爆音は起りたり、其艦は乍ら右方に傾き、少時くにして反て左方に傾き、十八度に達したり、抜錨命令は傳へられたるも、敵驅逐艦の撃退せられたる後なるを以て已みたり、尙ほ日本驅逐艦はツエザレウキチに二回の攻撃を行ひたるも、一回は右舷に沿ひ、他の一回は左舷に沿ひて通過したり。此時ツエザレウキチは沖合に出てんとせしも、舵機損傷の爲め、單に機關力に依り、艦隊の間を通過し、港内

に向ひ轉回したるとき、老鐵山方面より馳走し來る敵驅逐艦を認め、之に對し、速射砲を猛撃して、之を撃退したりしが、水雷を見ることなかりしといふ。而して恰も其場所即ち港口の岸邊に已に戦艦レトウイザンの毀傷せられあるを見、之を迂回せんとして、攔岸し、尋て大潮を利用し、曳入れられたりと。此夜全く準備する所なせしといふ能はざるを如何せんや、而れども其の備へざりしは警戒に缺點ありしに外ならずと謂ふべきなり。又露の同盟國たる佛國新聞中、此夜襲の功績をして低減せしめんと試みたる論者少からず、ラ、ブ、レ、ビ、ノ、リ、ツ、ク、の如きは説を爲して曰く、予輩は露國公報及諸種の情報を總合して推定を下し、露國艦隊襲撃に於ける、日本艦隊の位置は、最も便宜なるを知れり。日本艦隊は風濤の爲めに、其隊形を保持するの困難に遭遇せざりしなり、何となれば、二月八日日没後、芝罘を發し、其艦隊を後援としたる驅逐艦隊が、百十吉米六十海里の迂回航進を爲し、穩波に遊弋して旅順港外に達したればなり。此地位の好良なるに依り、又露國探海燈は其目標と爲り、千八百九十五年に於ける、威海衛攻撃に於ける、攔岸の不幸に會せざりしなり。此地位に在るに反し、其發射したる水雷は、少くも十八個なるべきに、其結果

第二編 本紀 第三章 本紀 日本攻勢展開 海上戦 制海權把握
A—旅順口に對する日本海軍の運動
其一 二月八日正午旅順の夜襲

成績不良にして、不思議にも過少なりし其原因は、調整の不完なりしに歸着すべきは争ふべからず。此過少なる結果の程度は、損傷艦の若干修繕期間戦闘参加力を殺きたりと雖も、水雷は舷側に接して爆發し、艦底を破壊して破孔を作ると數米突水線下の非装甲部の細區畫は、能く其被害程度を滅殺し、即時に沈没せざる場合あり、ツエザレウキチ及レトウイザンの二隻は、即ち損傷を受けたる三時間後に於て海汀に乘上げたるを以て之を證すべしと云へるか如きは是れなり。然るに英國新聞の論調に徴するに専門的なるエンデニヤリングの如きは、恰も之を反駁して餘りある所の論説を掲げたり。曰く、予輩の今や期待したる關係の破裂に由て、第一の教訓を得たり、教訓とは何ぞ、他なし、偉大なる水雷攻撃の効力は是れなり。世人の讀過せし諸報は、簡單にして盡さざる所なりと雖も、其得べき大體の教訓は明かならざるにあらず。日本の艇隊は、一の損害を受くることなく、襲撃の目的を果したり。其奏功は、直ちに戦争全局の勝敗を分つの價值あるや測るべからざるなり。唯此一面の成功を以て、水雷攻撃の效果を見ることの過重なるべき危険は、之を避けざるべからず。元來、水雷艇が水雷を發射する、主なる任務は、奇襲に存す、奇襲に

會したる艦船其之に乗ぜらるゝの警戒に、間隙缺點ありしを證するものなり。海軍戦史上、水雷攻撃の效果は主として敵の備へざるに乘じ、不意の奇襲に依て奏功せらるゝものなり。露國公報には、事實に反するものあるを認めざるを得ず。公報に依れば、日本水雷艇の接近し來るや、我諸艦は機會を失ふことなく砲火を集注したりと、之を情報に徴するに、奇襲當時、三四日間内には、敵襲を受くるの虞あるを豫期せられたることなく、露の艦船及砲臺も、尙ほ燈火を點し、爆發三回に及べりと。此通信者(ニューヨーク、ヘラルド)が一商船に在りて、其翌日に在るも尙ほ演習なりと想定せし事實に照合するときは、公報の所報は甚だ信ぜべからざるものあるを見る也。此論者は、重きを奇襲に置き、日本水雷艇隊の奇襲は、露艦隊の不意に出るを立證したるものにして、水雷の價值を過重するは危険なりと雖も、其奏功に付ては、或は戦争全局の勝敗を制するも測るべからずと云へり。又現に、主戦艦の三隻をして、數月間、修繕を要せざるべからざる重傷を負はしめたる効果を、不發水雷ありとの一事と擱座するまでに三時間を要したるとの理由に依り、滅殺せんとするが如きは、一笑に附すべきものなり。エンデニヤリング記者は、更に歩を進めて

曰く、旅順口襲撃の一舉は、一個の動かすべからざる推斷を下さしめたり、警敏熱烈なる日本海軍々人が、彼の遲漫なる敵を襲撃したる効果は、必らず其人及性格に由るものにして、此性格は實に近世科學の發達より成れる、驚くべき一切武器の原動力なり。敵艦の一隻を撃破し、之をして廢物たらしむるを得ば、戰爭初期に於ける其大なる結果を發現したるものにして、此數隻の露國艦隊の損傷艦は、戰闘に堪へざるものなりとせば、正に日本の勝利にして、假令其修理を受け、其戰闘力の若干を恢復するものとするも、短時日の爲し得べき事業にあらず、唯一個を有する旅順口の船渠が、大工事を行ふの力なき以上、其戰闘力を恢復するの作業は、已往の事に屬すと、是れ豈に佛紙の所論を論破して餘りあるにあらずや。犀利精到なる、ロンドン、タイムス軍事評論家は、露國艦隊の豫備計畫を推斷し、其推斷に値へするの綿密と用愼とを以て、露人に望むは重きに失しりと云ひ、港外に碇陣するは、一の挑戰試問にして之に應じたる日本は、敏達なる答解を加へ、其名譽と其位置を至高の度に進め、現存せる最優海軍と同地位を占め、而かも其邁往敢爲の雄蹟は、他の之に超越すると能はざるに至らざらしめたりと云へり。之を要するに、一方の交戦國にし

て、敵開始の劈頭に於て、一撃敵を破るを得ば、爾後其位置は常に優勢に立つを得べし、日本艦隊の水雷攻撃は、正に此優勢を占むべき打撃を加へたるものなり。然るに世上往々、淺薄なる非難冷語を遣ふし、東郷提督及其幕僚麾下將士の施したる巧妙なる戰略、敢爲なる戰術より、得來りたる聲譽を、毀傷せんとするものあり。然りと雖も、歴史は公平なり、歴史の主義は不偏不黨なり、此成效を認むるものは、此公平なる歴史ありて、世上の賸々者流の非難を容れざるなり。其成功とは何ぞや、開戦の初期に於て、日露兩國の艦隊勢力は、殆んど伯仲の間に在りたるものなるを、此一撃は數週日の間、其損傷艦をして外海に出ること能はざるまで劣勢に歸せしめ、同時に當時東航合勢の爲め、航途に在りしツキレニヤス艦隊の航進を中止し、歸航するの已むを得ざらしめられたればなり。旅順に於けるスタルク提督は、ツキレニヤス提督の赴援に策應すること能はず、又單獨出動を敢行するの力なかりしなり。是れ偶々、旅順に於ける、太平洋艦隊の被むりたる、損傷の大なるを知るに足るべし、東郷提督は、此一撃に依りて、第一に旅順艦隊を撃破し、紅海に於ける露の赴援艦隊の航進を中止せしめ、同時に、海上の死命を制し、之れが主人公となりたるのみならず

第二編 本紀 第三章 本紀—日本攻勢展開 A—旅順口に對する日本海軍の運動
海上戰—制海權把握 其—二月八日正午旅順の夜襲

ず、第二に於て、旅順に於けるスタルク提督と、浦鹽に於けるフォン、スタケルベルグ提督と、紅海に於ける、ウキレニヤス提督との三艦隊間に介立したり。而して此効果は是れ一の水雷夜襲の致すところなり、翌日に於ける砲撃の効果は姑らく論ぜず、二月八日の一打撃は優に戦局を一變し、制海權は其把握する所となり、軍隊の輸送は安全に行はるゝを得たるを見る可きなり。

尙ほ余輩は此に英國海軍論者が、露國海軍將校が、當夜々會に歡を貪り在りし状況に痛切なる批評を下したるを附記せんとす。曰く、有名な水雷奇襲の決行せられたる八日の夜はスタルク中將婦人の夜會あり、艦隊將校上陸して其宴に會し、歡正に極まれるの時、又他の將校は劇場にありて、日露戦争の脚本よりなれる演劇を觀、露軍の勝利を狂呼しつゝありしの時、第一の痛撃は其艦船に降りたり。高級將校皆其艦内にあらざりしは、和戰危機一髮の際に於ける舉動として、何等の迂濶ぞや。開戦劈頭の砲聲を聴くの時、方り、露國太平洋艦隊司令長官は、悠然として陸上に宴を張り、其艦隊を港外に放置して、敵の夜襲に委せしが如き失計は天下後世の嚴戒となすべきものたり。彼の虚設なる關東報紙の言説に惑ひ、此の危機に頻

しつゝありしを知る能はざりしとせば、提督の舉措は毫も怪むに足らざるなり。思ふに提督は、港内の水深限りあり、彎曲狹隘なるが故に、部下の勞を省き、其轉移を行はざりしに由るとせんか、此れ其危険を悟らざるものなり。假令一步を譲りて、危機切迫の状態を知るあらしむるも、此を輕視したるの責は免る可からず、爲に此の失計損害を來したるものなりと。將怯に、士懦に、將怠り、士漫る、蓋し提督の失計はそれ怠れるに起れるものか。讀者は、當さに夜襲の結果を了知したるべし、今は一方に於ける、瓜生艦隊の仁川に於ける動作如何を見ざるべからず。

其二 仁川の海戦

地理上、韓半島上陸に向て爲すべき作戰に於て、其東南岸に於ける日本軍の上陸地點は、仁川に於てせしと、日清戦役に之を見たり。而して今や、日本軍は復こゝに上陸せんとし、第四戦隊之を護衛して、仁川に向へり。是より先き、仁川港には我千代田艦ありて、前年十二月中旬以降、警備の任務を執りつゝありたり。戦機日に切迫するのに方り、露國軍艦二隻も、亦碇泊し、其一隻は新式武装のワリヤイグにして、素

より千代田の敵にあらず、加ふるに、千代田の位置は、埠頭との距離二海里に過ぎ、通信の不便あるのみならず、其艦體は露艦に暴露し、頗る危険なる位置に在り。僅かに鎗地を英艦側に轉じて、危険の度を減することを得たりと雖も、同時に敵状を知るに不便を來せり、二月七日夜、千代田艦は、密かに夜陰に乗じて出港し、八日午前東郷本隊より、分派せられたる瓜生艦隊に合したり。此日在京城露國公使は、日本の行動に疑懼を抱き、砲艦コレットをして警報を旅順に致めしめんとせり、已にして瓜生艦隊は、千代田を先頭とし、淺間以下高千穂浪速、明石、須磨等六隻及運送船、舳艫相啣み、午後五時、仁川、八尾島外に到る、即ち水雷艇隊を以て相備へ、千代田、明石、高千穂、新高は相警して運送船を護衛したり。而るに敵艦コレットは、我千代田、高千穂の間に向て進み來りたるを以て、水雷艇隊は之に向て運動し、淺間亦其進路を轉じ、嚴として敵艦に當るの姿勢に出でしか故に、彼其爲すべからざるを知り、引返してワリヤグ艦附近に停止したり。此夜規律整然たる上陸は行はれたり、劍影星光相映じ、軍容森々、士氣凜々、已に先づ露軍を呑む。翌九日午前六時、運送船は其任務を了へて出港し、午前七時、瓜生艦隊司令官は、露艦に向ひ、午後四時を以て仁川を引

揚ぐべきを命じ、同時に列國軍艦に向ひ、出港を要求したり。露艦の運命は今や切迫せり、正午前に至り、コレット先づ動き、ワリヤグ之に次ぎ、港外に至るに及び、ワリヤグ先頭に進み、コレット之に隨ひ、戰鬪旗を掲げて八尾島沖に進行し來れり、已にして彈響は空氣に一種の波動を興へ、其海波を掀し、地軸を撼し來る者は、淺間の八吋砲なり、ワリヤグ其六吋砲を以て之に應じ、相距ると、近きは四千メートル、遠きは六千メートルにして、淺間の巨砲先づワリヤグの艦橋を粉砕し、腹部に大破を興へたり、コレットは、千代田と砲火を交換しつゝありしが、又損傷を被り、ワリヤグは其最後手段として、突進し來りしも、我艦縱横操縱の妙は、彼れをして其目的を爲さしめず、敵艦終に相次で敗退し、港内に入り、將卒皆艦を棄て、逃る、其死傷者は、佛、英、伊等の艦内に收容する所となり、運送船、ズンガリーに逃れたるものは、更に陸上に逃れたり。既にして、零時五十九分、ワリヤグの艦部より出火し、午後六時敵コレットの火薬庫に火して自爆し、ワリヤグは亦爆聲の下に其運命を共にし、運送船、ズンガリー亦自爆に殉ず。砲火を交ふる約五十分、露艦二隻は敗退して此運命を致せり。茲に附言すべきは、捕虜たるべき將士を、如何に處分せしやの問題

これなり。此問題は、他日外交史上に詳細記述し、論評を下すべきが故に、こゝには其結果を記するを以て足れりとす。即ち其結果として、捕虜たるべき艦員は、本交戦中、清國上海以北の地に至るべからず、又戦闘行為に加はるべからざることを宣誓せしめたる上、上海に送還したるに止まれり。蓋し此際に於ける、在京城露國公使が米國公使に向ひ、露國兵員の生存者を、非戦闘員と爲し、仁川碇泊の米國運送船にて芝罘又は上海に送らんことを希ふと請ひ、又佛國代理公使が、我公使に向ひ、國際の慣例及佛國海軍の現行法に依れば、軍艦の艦長は其艦内に收容したる戦闘者が再び戦闘行為に加はらざる様、勸告するの責任あり。若し戦闘者を、第三國の官憲に引渡すの必要ありたるときは、艦長は豫め各他國官憲より、艦長自身が、有すると同様の責任を守るを確め、其保證を受け取らざる間は、各戦闘者を引渡すことなし、故にバスカル號に收容したる露國海軍々人は、同艦長の保證を得るにあらざれば、第三國の官憲に引渡すことなしと、知照したるに出でたるものなり。唯予輩は讀者が、若し本史後編の範圍内に於て、佛國の中立態度を論評するの一段に逢着したるとき、此バスカル艦一件を想起するを、必要とする所以を記し置かんとするの

み。

仁川海戦が戦場如何なる教訓を與へたるやの問題は、此海戦記事の重要事たり又此海戦が如何に、第三國の眼に映したるやを知ると同時に、自ら此海戦の講評を構成するものなればなり。二月十二日、ジャバン、メールは論じて曰く、「世上未だ瓜生海軍少將の率ゆる艦隊の編制に關し、定説あらずと雖も、海戦の事實より推定を下せば、此交戦に参加したる艦隊は、五隻より成れるが如し。即ち一等巡洋艦淺間其他新高、浪速、千代田、須磨艦名の推定は誤まれりなるべし。露國軍艦の、此優勢に敵する能はざりしや明かなりと雖も、予輩の疑問とすべきは、假令此戦闘の時間、僅少なるにもせよ、コレイツの八吋速射砲或はワリヤーグの六吋速射砲の如き武器が、日本軍艦に向ひ、些の損傷を與ふる能はざりしことこれなり。」と云ひ、又其十八日の紙上に於ては、「コレヤ、レツニューより轉載せる注意すべき四個の要點を掲げたり。今此精銳なる武器が、何等の効力を奏せざりしを第一説とし、茲に五個の要點を見るべし。

一、ワリヤーグ及コレイツの艦砲は何等の損傷を其敵艦に與へず(第四項参照)

二、ワリヤグ、コレイツ二艦の港外に突進したるは、逃走の企畫に出でたるものなり。其理由は、此突進の舉動は、勇壯なるものとして、多く世人の稱賛を博し得たりと雖も、此場合に於ける二艦は、決して此勇壯に値へせず、勝算なきを知りつゝも突進したるにあらざればなり。日本海軍の戦闘實力は、當時未だ彼等の理解せざる所にして、其會て顯はしたる武勇は、支那人に對せしものにして、歐洲兵に對したるにあらざるか故に、彼等は常に日本艦隊を蹴破して、容易に旅順に航走し得べきものとし、即ち逃走を豫期して出戦したるものなればなり。

三、若し一步を譲りて、ワリヤグ、コレイツ二艦の舉動を以て、勇壯なりとせば、日本艦隊の之に對せし抗敵働作は、一の任侠たらんとす。其理由は、日本艦隊の隻數は、確然之を定むる能はずと雖も、多くも六隻を出でず、少くも五隻を下らず、而して露艦に對戦せしは、僅かに其二隻に過ぎざるなり。兵法原則として、其力を集合するの度大なる才、其効果も亦大なるを得べきは、何人も之を知る、而かも日本艦隊司令官が、其優勢を用ひず、僅かに其二隻をして對戦せしめたるに過ぎざるは、一の任侠と謂はざるべからず、若し敵艦二隻の中、其一隻が逃走するを得たる場合には、日

本艦隊たるもの、如何なる批評を以て、迎へらるべきか、此危険を顧みず、少數艦を以て、敵に對せしは、任侠と云ふの外なきなりしと謂ふべき理論を生ず。

四、此海戦は軍艦の決闘なり、其の理由は、淺間艦の砲撃威力大にして、ワリヤグは到底、其有効射程内に入る能はざりしとの説あれども、其六吋砲十二門を以て、淺間の八吋砲四門、六吋砲十四門を有するに對する、其差のみを以て、論ずべからざるなり。千代田の備砲力は、四吋なるを以て、ワリヤグの六吋砲にして、淺間に有効なる勢力を現はす能はざりしと雖も、同時に千代田の四吋七砲も、亦ワリヤグに達する能はざる道理なり。故に此海戦は、一艦對艦隊にあらざり、單艦對單艦の決闘なり。戦闘四十五分に亘り、其間に於て十二門の六吋砲は、一弾だも淺間に達せざりしは何ぞや、コレイツと雖も、八吋砲二門六吋砲一門を備ふるが故に、決して除外すべきものにあらざり、ワリヤグ、コレイツ二艦の砲撃を合すれば、八吋砲二門六吋砲十三門となるが故に、淺間の八吋砲四門、六吋砲十四門に對抗するは、其懸隔大なるにあらず、而かも一の酬ふる能はざりしは何ぞや。

五、露の二艦は、中立侵犯を恐れて、十分なる戦闘を交へざりしとの説は、理由をな

さず中立港たるの性質は、二月八日午後四時を以て消滅したればなり。何となれば、日本艦隊が運送船を護衛し、軍隊は正に此時を以て上陸したればなり。之を實見し、在りたる二艦が之を知らざるの理申なきなり。

六、英國海軍論者の所論に依れば、此戦に就て注意すべき一事は、第一の發砲者は日本艦隊にあらずして、露國艦隊なり、之を難すれば即ち曰く、是れ偶然の出來のみと、是れ詭辯にして、取るに足らざるなり、凡そ戦争に於ては、假令其發砲が如何なる錯誤よりするも、如何なる未熟者の手よりするも、已に苟も他國の軍艦に砲撃を加へたる以上、其挑戰の第一射たること争ふべからざるなり。今や讀者は、轉じて東郷本隊が他方に於ける状況如何を知らざるべからず。

其三 九日旅順口外の海戦

九日は是れ敵露國海軍が大舉朝鮮海岸に向て、出動せんとせし當日なりき。而かも八日正子奇襲日本海軍の先制する所となり、今は全く其防禦の位置に立たざるを得ず。此日午前五時、日本第二戰隊中の司令艦たる千歳艦より無線電信を以て

「敵の主力は港外にあり、昨夜我驅逐隊より數隻を撃沈せられたるが如し、敵の二艦は傾斜殆んど沈没せんとするの状あり。」との通知に接し、猶ほ同艦坐乗の出羽司令官より、攻撃の好時機なり。」との旨、報知あり、同七時二十五分に至り、又千歳艦より、更に「近寄れ」との信號ありしに付き、多分敵艦出て來りしならんとて、未だ正式の命令はあらざれど、各艦の戦士は、既に戦闘の部署に就きたり。蓋し昨八日、日本艦隊が驅逐隊と別れし所は、旅順より東南七十哩の所にして、即ち仁川航路の外側に在り、此に於て左り十六點針路を變換して航進し、更に山東の岬角に向て進み、再び其進路を變換し、我驅逐艇隊の攻撃の時には、威海衛を去る百三十哩の沖に在りし、而して其九日の午前三時頃は、芝罘沖に對し、又針路を變換して北に向ひ、同日午前八時には、旅順の西南に達し、更に大連灣に向つて進行を始めたなり、同十時三十分、千歳艦より信號あり七千五百メートルに近付きたれど、彼れ未だ發砲せず、煤煙を揚げ居るもの五隻に過ぎず、大に勢力なし、今より攻撃せば有効ならんと。此時左舷に方つて、一隻の商船北に向つて走るを見る、即ち其甲板の上には、多數の人在りて、船尾には、日章旗を掲ぐ、我艦亦た軍艦旗の新らしく、且つ大なるものを揚げ居りし

に依り、彼等は之を認めて萬歳を絶叫せしならん知るべし。是れ旅大、ダルクニ一等を引揚げし、我避難民なりしことを。(三月九日午前六時五百名の我避難民を收容してダルクニより芝罘に向ふ英國汽船福州號なり)此時東郷司令長官は、甲板に在りて千歳艦に向ひ傾きたる敵艦は如何なる型ちの艦なるやと問ひしに、バルラダ型にして他の艦は不明なりとの答へに、更に他の艦とは戦闘艦か、巡洋艦かと尋ねしに、戦闘艦及巡洋艦なりと答へ、猶ほ千歳艦より今より直ちに砲撃の必要を認むとの建議的信號を爲せり、然れども、我旗艦は未だ之を許さず、旅順の港口を通過して、大連灣の方面に向ひ、同十時五十分右方十點針に路を變へ、單縦陣に正して進行し、適かに香霧を隔て、旅順の砲臺を望む。黄金山砲臺始め、海面諸砲臺は、巍然として海を壓し、其優強なる備砲は、巨口徑を横へ、日本艦隊にして若し其遠大なる射程に入り來らば、何時にても一撃の下に掃退せんとの意氣あり。又其艦隊に在りては、昨夜正子の一撃大に其膽を冷したりと雖ども、其艦隊は尙ほ嚴たるものあり、戦闘艦ベト、コッポ、ウスタは、旗艦旗を橋頭に翻へし、艦長大佐ヤコブレフは、油断なく、其部下を督し、司令長官中將スタルク之に座乗し、戦闘艦セバストポリには艦

長大佐チメル、スホシエフあり、同ホルタワは、艦長大佐ウスベンスキーあり、同ベンスウエー下は、支隊艦隊旗艦として司令官少將ウフトムスキー之に乗込み、艦長大佐ボイスマンは、其下に在り、同ボベータは、艦長大佐ザツアリヨンスイあり、又二等巡洋艦デアアナには、艦長大佐ザレスキーあり、以上の諸艦は、前夜水雷の爲め、擱岸せし、戦闘艦ツエザレウキツチ、同レトウイザン、及一等巡洋艦バルラダの三隻を中心として、旗艦の手足となり、一等巡洋艦バーヤンは、艦長大佐ウキレン之を督して、我艦隊と露國艦隊との間に、其位置を取り、同アスコリッドは、艦長大佐グラムマチフあり、二等巡洋艦ボヤリンは、艦長大佐サルイチェフあり、共にリユウチン角前に艦列を布き、而して二等巡洋艦ノロウイクは、艦長中佐エツセン之を督して、老鐵山の方に在り、且つ其水雷驅逐隊は、第一、第二の兩隊より成り、ウニマードテルニ(艦長シ)ウブスツヌイ(同カール)ボエウオイ(同セロフ)メズスツラヌイ(同チムメ)ベズボシチヤイ、ズヌイ(同キユ)ウヌシテルヌイ(同ボグ)ラジアシユチ(同ツフ)レシテルヌイ(同コルネ)シルヌイ(同ホドロ)ステレグシチ(同クワリエフ)ストロジエウオイ(同キツ)ズメーリ(同シユ)セルヂチ(同クワリエフ)等の十五隻にして、其内第一艦隊は、大佐マツセツキツチ

第二編 本紀 第三章 本紀 日本攻勢開展 A 旅順口に對する日本海軍の運動 三七一
海上戦 制海權把握 其三 九日旅順口外の海戦

之が司令官となり、第二艦隊は中佐キンドル之が司令に任じ、艦隊の右方十鐘乃至十五鐘の地位に陣地を占め敵艦の接近し来るに乘じ、突撃すべき命令を受け、而して彼等は夜襲に、ツエザレンツキチの舵機を打摧かれたるを以て、機關を使用して其艦隊を動かさんとせし時、即ち午前八時頃、我第三艦隊の四艦老鐵山の方向より敵艦陣地の傍側を通過して、南東に進航せしを見て、露艦の一部は、無作法に揚錨し、岸に沿ふて第三艦隊の跡を逐ひしが、以爲らく、我艦隊を追撃の爲め誘出するものならんと頓に怖れを懷きて引返したり。此時露國の巡洋艦二隻は、猶も其跡を逐ふものゝ如く、尾して同方向に馳せ来る者の如し。我三艦隊は、之を見て直ちに戦闘開始を令し、舵針を轉じ敵艦に向つて進みしに、敵艦は我を誘はんとし、一巡洋艦は勿慌として逃げ去り、他の一隻も直ちに舳艫を轉じ、其後部より二三の發砲をなし、大速力にて逃げ歸れり、第三艦隊は、敵艦を誘出せんとするが如く、動作せしも敵の艦隊は、更に出で來らざるに由り、我本艦隊に向つて進行せり。而して敵艦隊は、其偵察の爲め巡洋艦ポヤリオンを派遣せり、時に、午前十時三十五分也。而して不秩

序なる陣形を爲したる敵艦隊は、我第三艦隊の搜索せし時は、彼の夜襲に狼狽して、未だ錨を抜がざる模様なりしが、我艦隊總攻撃の時は、既に半ば錨を揚げ、對戰の準備を令せしものゝ如し、而かも其數隻の鋭艦の港口に破壊し、居るものを中心として、左右に並列せし各艦は、少しも見るべきの陣形を爲さず、一撃直ちに殲滅し得べく見へたり、之に反し、我艦隊は隊伍を紊さず、順次律に應じて敵艦に近づき、同十一時四十五分、東郷司令長官は全艦隊に向て、總攻撃の令を傳へ、勝敗の決は此一戦にあり、各員努力せよとの信號を下し、直に旗艦三笠に戦闘旗を翻へし、各艦亦之に倣ふ。此時旗艦三笠に於ては、一同午餐の爲め艦内に下り、司令長官を始め、幕僚皆士官室に集まり、食卓に對ひ、盃を舉げんとせし時、俄然一發の砲聲は耳を貫きたり、此發砲は果して、何者の所爲なるか、之れ即ち先きに大連灣に赴き、旅順の方面に引返し、更に偵察の爲めに來りしポヤリンの放ちしものなり、我戦士は、一同此砲聲を聞き、等しく甲板に上り、東郷司令長官、島村參謀長は既に艦橋に在り、時零時八分なり。此時敵艦は此ポヤリンの發砲に次ぎ、漸次撃ち始めしも、我艦隊は之れに關せず、益々港口に向つて突進し、錨を換へて敵に右の舷側を示し、陣形を成して進む、此時艦

三十四

旗一たび搖き打方始めの喇叭鳴り渡るや、七千二百メートルの所にて先づ三笠艦の
前部より十二吋の彈丸を放ちたり。白烟起ると見る間に其飛彈彼れが旗艦たる
ペトロパウロウスクの士官室と、上甲板の後部を破壊せり。是に於て我各艦砲
口を列べて連撃するの狀は、壯絶云ふ可からず。此の時敵艦ボヤリンより發せし
火彈我朝日艦上を掠めて三笠艦の右舷百メートルの海中に墮ち續ひて一彈風を
截つて我旗艦三笠に中つ、爲めに其艦橋に在りし松村大佐は微傷を受け、敵の快速
力巡洋艦突進し來り、四千メートルの近きに於て死力を出して亂撃せり。我各艦
は一齊に砲彈を雨注せしめたるに、彼れ亦た敗退せり。我水雷艇は火彈を浴びて、
巧みに黄金山の麓に忍び敵艦の隙を覗ひ港内に向つて逃走するものを撃破せん
とす、恰も好し、敵の巡洋艦デアナは、ノーウィックと共に我艦隊の猛烈なる攻撃に
辟易して港内に逃れ來るに會ひ、直ちに魚形水雷を發射して、之を惱ましたり。時
戰鬪益々激烈にして、敵の戦艦ホルタワとアスコロッドは大破損を爲せり。斯くて
敵艦隊は、到底抗戰の能力なきを自覺し、勢ひ谷まつて遂巡し、陣形漸く紊れて、砲火
益々勢ひを失ひ、遂に黄金山下に蹙し、猶ほ幾かに其發彈を繼續せり。我艦隊既に

其死命を制せしを以て、其機に乗じ、霧地に進んで之を殲滅せんと欲せしも、彼の黄
金山上より瞰射する砲彈は、比較的激烈なるを以て引揚げ、南方に向ひ進航せり。
彼れの損害は、敵の戦艦ホルタワは右舷に大傷を受け、一等巡洋艦デアナは水線
下に大傷を受け、其艦尾水中に没し、同アスコロッドは水線下の機關部を破られ、二等
巡洋艦ノーウィックは水線下に大傷を受けたり。又其他の艦體にも、皆多少の損傷
を被むらざるものなし。而して其の前夜の水雷の爲めに、戰鬪力を喪失せし戰鬪
艦ツエザレウイッチ、同じくレトウイザン、及び巡洋艦バルラダの三隻を合するときは、
總數十三隻の内、七隻と驅逐艦四隻は全く戰鬪力を奪はれ、其殘艦六隻も概ね多少
の損傷を受け、健全の者は幾か二隻に過ぎず、又其將卒戰士の死傷は、死者三十六名
にして、負傷者百二十名なりと。而して我艦隊の損傷は、艦手にノーウィック發射の
十二吋の彈丸命中して、艦部の士官室を破壊し、富士は其前部の烟筒を傷けられ、旗
艦三笠は敵彈甲板に當りて破片飛散したるも、皆輕微の損傷にして、此他の各艦も
多少の損害ありしと雖も、決して戰鬪力を失ふが如きことなく、又其死傷は、戦死者
三名、重傷者七名、輕傷三名也。而して兵曹以下の戦死者は、二名、重傷者は二十名、輕

傷者は二十五名なり。

九日午後に於ける露海軍の戦術の批評の多くは、日本艦隊の自ら滅亡を好むに非ざるよりは、成功の望みなきものたりとせり。英國軍事批評家は、當時旅順砲臺に於ける露軍の士氣の亢騰し、若し日本艦隊の來侵するあらば、一撃打盡するの觀ありしと雖も、是の如き戦術の下に、日本艦隊を殲滅せんとするは、彼艦隊が自ら好んで、其破滅を希望するに非ざれば爲し得べからざるとす。露國艦隊司令官は、其艦隊を以て砲臺の一部なりとし、其掩護の下に、潜み先制進戦の勇なかりしのみ。東郷提督は、其艦隊よりする砲火の射距離を示さずと雖も、敵砲臺が有する武力、即ち砲煩の射程が艦砲よりも遠大なることを知り、其之を背後とせる艦隊を攻撃するに際し、必ずや遠距離を撰みしと推定するに難からず。日露兩國海軍提督が、公報の戦術繼續時間に於ては一致せるも、茲に注意すべきことは、ア提督の報告には *dreadnought* と云ひ、佛電には *Le réiterant* と報せることこれなり。佛電の如く、日本海軍にして果して退却せしものとすれば、露艦隊の追撃を見ざるべからず、ア提督の所謂 *dreadnought* の正當なるは言を俟たず。東郷提督の報告には、露國艦隊は漸次港内に

向ひ逃入するもの、如く、午後一時戦闘を止めたりとあり、此報告の正確なるは事實なりとす。露國側の報告反て之を立證す、何となれば、水雷攻撃を受けたる殘艦中四隻は、水線下に打撃を受けたればなり。日本主力艦隊に加へたる損害は、輕微にして、毫も其戦闘力に關することなし、砲臺よりの砲煩の活動せしに徴すれば、日本艦隊が砲臺砲煩の射程内に進入せし事は、勿論なりとす、此強力砲臺が、其威力と艦隊とを以てして、而かも其自ら露自身に受けたる損傷の大にして、敵日本に與へたる損傷の輕微なるを見れば、二者砲術の巧拙は亦明らかなるにあらずや。ロンドン・タイムスは、日本艦隊が攻撃を反覆せざりし理由を推定して曰く、「九日に於ける戦闘の短時間を以て休止せしは、其原因露艦隊の計畫が、陸上砲臺火力の下に、日本艦隊を誘致せんが爲め、港口に退却したるものなること明かなるに依れり。東郷提督が、之を究追せざりしは、賢明なる判断に基ける正當なる所置なり」と。マリーネ・ランド・シャウは、正嚴なる断定を下して曰く、戦争の經過事實に徴して之を見るに、其經過は明かに、日本が其精細緻密なる考算と、正確適實なる準備とに依り、大膽なる動作を以て、其計畫を決行したることを證す。日本が敵の制域に進攻上

陸すべき至要の目的を貫かんとして、勁敏快悍なる襲撃を以て一舉能く其海上輸送の危険を排除したり。露國艦隊は其精銳を挫折せられ港内に潜蟄する其間に於て日本は何等の危険の虞なく、其軍艦を韓半島に進め、其大半は已に其勢力の下に在り、之より生ずる日本の動作は、潜伏せる主力艦隊を殲滅するに努むべきは勿論にして、依て以て極東海面の制海權を把握すべきなり。此日本海軍の成功に反し、露國海軍の動作に關し、甚だ怪しむべき二個の問題あり、其一是露國艦隊は常に細心留意して警戒を忽かせにすべからざる筈なるに、而かも水雷襲撃を被りたることこれなり。其二是露國艦隊は其主力を分ち、一は旅順に他は浦鹽に二分しありしことこれなり。此二分戰略は、如何なる理由願慮に基きしか、或は港狀の如何に依りしか、著者曰く此港狀の如何に依るかの問題の一端として、英國フリーマン・トル大將の論文中に云へるあり、一九〇四年二月十八日、エドモントリイ、曰く、予は未だ内港の水結せしを聞かざるなり、唯其防波堤の築造は、偶々水結の理由となりたるのみ事實に於て、其常に發航準備を整へ置かざるべからず、然るに彼等は之を怠り、遂に彼等は襲撃の好目標となりたればなりと。』又は艦隊の修理の爲めなりしか、此

二個の願慮は理由を爲さざるに似たり。必ず一定の戰略目的の然らしめたるものならん。果して之を以て、一定の戰畧目的に依りたるものとすれば、其一艦隊は日本艦隊を牽制するを主策とし、他の一艦隊は其地若くは連絡に、危害脅威を加ふるを主策とせしならん、浦鹽艦隊の出動が旅順襲撃を受けたる翌日なりしを以て之を推定するに難からず、此推定にして誤りなしとすれば、露國艦隊の取りたる戰略は、實に危険なりと云ふべく、自ら其殲滅を招くに近きものなりと謂ふべし。或は格段なる場合に於ては、策茲に出づるも不可なきが如しと雖も、其結果を見るにあらざれば、其當否を知るべからず。之を要するに、全艦隊其全力を擧げて、敵の主力に臨むを以て、之を撃滅するの目的を達すべき捷徑となすべきなり。茲に讀者と共に其欺罔、一笑に付するの外なき諸報及之より生ずる認斷に就き、附記せざるべからざるとあり。其甚しきもの一を、佛紙トンキンの所論と爲す。
(一) 九〇四年二月十四日、佛國新聞「フニール、デュト」彼は旅順第一回攻撃の即時に、日本軍上陸の計畫ありとし、説を爲して曰く、「連續的行動を決行するに方りては、必ず前後聯絡の缺陷を容るすべからず、昨電報告に接し、予輩は日本水雷艇隊と其主力艦

は、各其時を異にして行動せるに徴し、直ちに其聯絡の缺けあるやを疑へり、果然海上の聯絡を缺きたり、此聯絡の缺陥は、即ち兵力の分離と爲り、艦隊行動と上陸軍の行動とは連絡せず、各孤立の状態を生ず、爲めに上陸軍隊は、塵滅せられたり、一九〇〇年、清國擾亂に於ける太浩上陸と同一の筆法を以て旅順に上陸し得るものとせしや、勇氣のみを以て、此強力なる要塞を占取することを得るものとせしや、其詳細は實に報告に接受したる後に譲らざるべからざるも、開戦以來、仁川に於て二隻の敵艦を沈めたる日本軍の勝利は、今此重大なる損害に依り相償ふを得べきや、旅順上陸計畫に於て、戦術上の失敗は之に依て何等輕減するの理由を見ざるなり」と、豈に興味ある謬傳妄斷にあらずとせんや。又他の一謬見に曰く「我艦隊の將士は、此夜襲に依り、更に睡眠の時間を求むること能はず、日本艦隊の更に追撃し來るに會し、殆んど海岸に接着し、狹隘なる水面に於て、之に對戦せしは、隻手の自由を失ひ、他の隻手を以て闘争したるに齊しく、敵艦隊の爲めに攻撃に利益あることは勿論、我に致命損傷を加ふること全く容易なりしなり。加ふるに、若し晴天ならば、太陽の光線我將士の眼に照射し、我れの不利云ふべからず、即ち敵の有利なるは勿論なり

而るに其原因は不明なれども、此等の利益を利用せず、僅少の攻撃を以て引揚げたり。想ふに一方に於て、戦艦に於ては、何等の損害なかりしも、唯士氣の發展を障害せし事件の發生せしにはあらざるか、他方に於て、我勢力の侵凌すべからざることの一端を立證したるものと謂ふべしと。(一、九〇四年二月十六日、ニックスル)是等の謬斷は要するに日本海軍の働作を精覈するとなく、糊塗自ら慰めんとするものにして、豈に一笑に値ひせずとせんや。

凡そ不幸に遭遇せしとき、自家の不幸を感ずるの輕からんを欲するが爲め、直接の被害者自身すらも、事實よりは輕く其の感應を生ぜんことを勉むるは情の自然なり。彼れ露國が第一回の不幸に依りて、國內に於ける興奮的曲論の發起せしは無理ならぬ形勢なり、或は曰く、敵の不意の奇襲を以て、其功を收めんとして成らず、我れの士氣を沮奪せんとして、反て激昂せしめ、水雷攻撃の猛烈なるを感知せしめんとして、反て其無力なるを示し、夜襲の放彈と艦隊攻撃の硝烟とを以て、韓國及大陸に用ひんとする兵略を暴露したり、これに依て、旅順の攻撃は益峻烈を見ざるべからずと云ひ、尙進んで、日本にして其目的を達せんとせば、多くの驅逐艦を用ひ、多く

の方面より我に向て襲撃を加へざるべからず、然るに之を爲さざりしは明かに敵の恐るべきものにあらず、又敵は何等の効を奏せざりしものなるを知るべきなりと。(ワイルムスキークニエスニツク)九、焉を圍らん彼の艦隊勢力は此襲撃に依りて堂々として出動對戦の力なく、閉縮自ら處するに至りたるの事實は、日本の奏功を説明して餘りあるにあらずや。

其四、第二次旅順襲撃

先きに大連灣に向ひたる驅逐艦隊は空しく敵に會せず、遺憾海波と共に深かりしが、今や旅順に於ける、殘艦襲撃の命は、驅逐隊司令官長井中佐に下れり。將士皆骨鳴り肉動き、即ち朝霧速鳥蒼鷹、村雨の四艇を率ゐ、根據地を出發し、十日に至り、猛風天を捲き急雪潮を壓じ、艦體掀翻呎尺を辨せず、舷背凍て鐵の如く、耳聾ひ指墜ちんとす。各艇相逸せしも朝霧は十四日午前三時、速鳥は午前五時、各港外に達し、天未だ曙けず、敵艦の有無を偵察しつゝ進みし瞬時、蕪然たる敵砲は、風濤の中に響けり。二艇は敵艦尙ほ港外に在るを知り、勇躍奮進、之に接近し、其二隻に對し水雷を發射

するや、乍ちにして爆聲を聴き、其命中を認めて引き揚げたり、我艦一の損害なし。予輩は實に、彼のエンヂニヤリング記者が、加へたる論明を將て、全く水雷攻撃に對する我海軍の特能なるを見んとす、曰く、日本海軍々人は、水雷を用ふるに特殊なる性能を有す、普通人に在てすら、一事の責務を負ふに方り、自己の所信と此所信よりする決定とに依り、或は徇公の天分に依り、苟も其目的を達せんと欲せば、又生を顧みず、暴進直往するものなるか故に、日本海軍々人が、其特殊の性能に於て、水雷攻撃は最も適當なるを見るなり』と。加ふるに、一回は一回より危険なる

第二編 本紀 第三章 本紀—日本攻勢展開 A—旅順口に對する日本海軍の運動 其四—第二次旅順襲撃 三八三

日本公報に依れば(十六日午後十時大本營東部聯合艦隊司令官官發)二月十三日驅逐艦の一隊大風雪を冒して旅順口に向ふ途上各艦見失ひて相分離せしも司令艇速鳥及び朝霧のみ旅順口外に達し、朝霧は十四日午前三時港口を偵察し、盛んに陸岸砲臺及び哨艇の砲火を被りしに拘らず、黒煙を揚げ居る一軍艦に對し水雷を發射し且つ敵の哨艇を砲撃して無事歸來せり

速鳥は同日十四日午前五時旅順口外に達し、港口に近接し敵の二艦を暗中に發見すると同時に其砲火を受けたるも直ちに其の一艘に對し水雷を發射し其の爆發を確認して無事歸來せり、速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の効果は、暗夜のため之を知るに由なしと雖も少くも敵を益す戦慄せしむるの大功ありたるは疑ひ無しと認む(本驅逐隊司令官海軍中佐長井中佐、速鳥艦長は海軍少佐竹内次郎にして朝霧艦長は海軍少佐石川壽次郎なり)參加將校左の如し

- 中佐 石田 一 郎
- 同 長 井 群 吉
- 同 眞 野 岩 次 郎
- 司令艇艦長 中佐 矢 島 純 吉
- 同 少佐 櫻 井 吉 九

露京に發表せられたる所に依れば日本の十二時砲臺砲臺隊

に反し、一回は一回より大膽なり。ロンドン、ダイヤモンドは曰く、彼の明敏敢爲の動作を以て、日本驅逐艦の加へたる攻撃は第一回に比し、其危険の度の加はりたるものにして、第一回の襲撃を受けたる以來露國艦隊の警戒は、自ら尋常にあらざるべく、而かも速鳥朝霧の二艇は逃進して水雷を發射し、敵艦沈没の狀を着了して歸還せりと、其勇敢に依り受くる無形の反動は、日本軍の爲めに有利なるは勿論なると同時に、露軍の士氣の銷沈して其防禦力の衰憊し來れるを徴すべきなりと云へり。

其五 第一回旅順口閉塞—第三次旅順攻撃

二月八日、九日に亘り、其水雷奇襲と砲撃とは、敵艦を傷つけ其兵氣を阻喪せしめたるの力あるのみならず、十四日の襲撃更に其膽を奪ひたるに相違なしと雖も、其存

所屬のカザンに命中し少しく損傷を蒙らしめたるに過ぎずと然れども此報告は正確ならずロンドンダイヤモンドは曰く驅逐艦の十二吋砲を有するの理なきは何人も之を知るカザンの受けたる砲弾にして果して十二吋砲なりとせんか是れ自己の砲弾よりせられたるものなるべし唯疑ふべきは其の砲弾の効力は單に木製物を火燒せしと云ふに過ぎず十二吋砲にして若し眞にカザン甲板に破裂せんか直に其運命を定むべきものなるに單に其の効力の微弱なりしは十二吋砲彈たるに過ぎざるにあらざやと

狀は尙ほ輕んずべからざるものあり。是に於て、米西戦争に於けるサンチャゴの獨占的光榮の、壯烈無比なる閉塞行動は決行せられたり。

港口閉塞にして全からんか彼の浮動勢力は要塞に固着したる所謂要塞の一部たるに止まり、海上に於ける日本軍の輸送に一切の危険を斷滅するを得べきなり。而れども此事たる、之を言ふべくして、之を行ふは防備の森嚴なるだけ一層の至大困難なりとす。之を決行したるの跡、史家之を記するに方り、尙ほ筆頭脛氣動き、紙面火彈を浴るの感あり。先づ第一に閉塞の爲め用せらるべき船

第一次閉塞隊將士

- | | | | |
|--------|--------|-------|--------|
| 海軍中佐 | 有馬 眞橋 | 大機關士 | 山賀 代三 |
| 上等兵曹 | 上信 音藏 | 二等兵曹 | 内田 格之助 |
| 一等機關兵曹 | 大野 喜一郎 | 二等兵曹 | 林 紋平 |
| 二等兵曹 | 加藤 英藏 | 一等機關兵 | 田中 三九郎 |
| 三等兵曹 | 寺岡 虎市 | 一等機關兵 | 萬水 治郎松 |
| 一等機關兵 | 田中 豊太郎 | 同 | 飯田 眞吉 |
| 同 | 坂口 力松 | 同 | 高橋 進次 |
| 同 | 深山 長作 | 同 | 牟呂 梅一 |
| 三等機關兵 | 谷田 志摩生 | 三等機關兵 | 青木 勘助 |
| 計 | 十八人 | | |
-
- | | | | |
|--------|----------|-------|---------|
| 海軍少佐 | 廣瀬 武夫 | 大機關士 | 栗田 富太郎 |
| 一等兵曹 | 大沼 今朝次郎 | 二等兵曹 | 角久 間千蔵藏 |
| 二等機關兵曹 | 大山 鐵三郎 | 二等機關兵 | 塚本 助市 |
| 一等機關兵 | 三富 由太郎 | 一等機關兵 | 竹澤 彌七 |
| 同 | 上 高井 浩 | 同 | 日高 金左衛門 |
| 同 | 上 藤本 金太郎 | 二等機關兵 | 武野 敬二 |
| 二等機關兵 | 佐野 七郎 | 同 | 上 城戸 隆 |
| 三等機關兵 | 石井 銀次郎 | 三等機關兵 | 盛田 隆藏 |

第二編 本紀 第三章 本紀—日本海軍の運動 其五—第一回旅順口閉塞—第三次旅順攻撃 三八五

船を要し、同時に之に搭乗して其行動を遂行すべき決死の士を要し、次に之を擁護する働作を要す。是に於て、船舶としては天津丸(二、九四三噸)報國丸(二、七六六)仁川丸(二、三三一)武陽丸(一、一六三)武州丸(二、二四九)の五隻に選定せられ、決死隊として、中佐有馬良橋以下十八名は天津丸に、少佐廣瀬武夫以下十六名は報國丸に、大尉齋藤七五郎以下十五名は仁川丸に、大尉正木義太以下十三名は武陽丸に、中尉島崎保三以下十五名は武州丸に搭乗し、有馬中佐之が總指揮官たり。船そのものは無意識なりと雖も、此壯烈なる目途に供用され祖國の爲め、其身を捧げ笑

計十六人
仁川丸 乗組
海軍大尉 齋藤七五郎 大機關士 南澤安雄
一等兵曹 山田仲次郎 二等機關兵曹 増田平馬
一等機關兵 土屋勝次郎 一等機關兵 青木五郎
同 上 具原六郎 同 上 林政吉
二等水兵 安保助藏 二等機關兵 萩原健三
二等機關兵 伊豆音松 同 上 三島健六
同 上 宇野虎三 同 上 三村千馬
三等機關兵 藍原善七
計十五人
武陽丸 乗組
海軍大尉 正木義太 中機關士 大石親徳
一等兵曹 米良正藏 三等機關兵曹 榎原龜吉
三等機關兵曹 田尻藤八 一等水兵 新上卯太郎
一等機關兵 樋口吉次郎 一等機關兵 高橋勝衛
同 上 田尻利平 二等機關兵 吉田巳之次郎
二等機關兵 中田敬一郎 同 上 篠宮大夫
同 上 濱六松
計十三人
武州丸 乗組

て死地に赴くべき無前の勇士に操縦さる、亦光榮の極りなりと謂ふべし。決死を口にするものにして、之を行ふは真に難し、之を募るは決死ならざる者あるに似たれども、海風怒り星斗低るゝの所已に戦に臨みたるの將卒誰れか決死ならざるべき、されば之れが行に後れざらんことを恐れ、相競ひ相争ひ、或は血書行に加はらんことを請ひ、或は泣請咽願請て止まざるものあり、其數に洩れて行に加はらざるものゝ如き、遺憾想像するに餘りあり。此五隻の上に、一團の精神と爲り、血塊と爲り、其行動に出發す、行を送るもの、送らるゝもの、凍として又凄たり、天地語らず、鬼神慄む、日本武士精華の片影、此瞬時に存するを見るなり。
日本聯合艦隊は、其行動を二十日に開始し、天候不良の爲めに二十二日旅順口方面に進航し、二十四日午前二時、驅逐艇隊は、港外を搜索し、三時三十分各閉塞隊は、港口に向ひ幕進せり、敵の砲火猛烈を極め、爛々たる熱燈照射の勢亦峻鋭なり。閉塞各船

海軍中尉 島崎保三 少機關士 杉政人
一等兵曹 中川作太郎 二等機關兵曹 米田賢一
三等兵曹 赤松虎太郎 三等機關兵曹 水下志米吉
一等機關兵 上野岩次郎 一等機關兵 玉井虎之助
同 上 松元豊吉 同 上 加木至徳
同 上 長井右吉 同 上 上山金藏
同 上 莊喜藏 同 上 栗田謙太郎
四等機關兵 橋本圭二郎
計十五人

第二編 本紀第三章 本紀一日本攻勢展開 A—旅順口に對する日本海軍の運動 三八七
海上戦—制海權把握 其五—第一團旅順口閉塞—第三次旅順攻撃

は益々奮進し、天津丸は燈光照射の爲め、針路左方に偏し、老鐵山東海岸港口より約三海里に於て敵砲を蒙りて沈没し、武揚丸は其外方約四百米突に於て、自ら破壊沈没し、武州丸は敵砲の爲め其舵機を破壊せられ、饒頭山下に擱岸し、報國丸は港口に突進し、臺下に至りし時彼の擱岸せる、レトウイザンより猛射する砲火に依り、火災を起し舵機亦破れて擱岸沈没し、仁川丸も亦將に入らんとして、砲臺を距る南東約二米の位置に爆發沈没したり。本船の沈没を終るや、隊員梅原二等機關兵將に端艇を卸さんとする一刹那敵砲一過、雄魂去て返らず、此等壯烈なる行動も、其結果は未だ全く港口を閉塞する能はざりしは遺憾なりしと雖も、報國、仁川の二隻は、稍其の目的の一部を成したるものと見るを得べし、此行動中、水雷艇隊は閉塞隊員の收容に勉め、殆んど天明に達す。彼の報國丸の如き、有名なる廣瀬少佐の操縦に係れり。此役下士卒三名の輕傷を負ひたる外、全員無事に收容せらるゝを得たり。

日本公報に依れば、(二十七日午後二時三十分東京東郷聯合聯隊司令官報告) 聯合艦隊は去る二十日より豫定の行動を開始し、途上天候不良の爲め行動を一日順延したる後、二十二日より旅順口方面に進發し、驅逐隊は二十四日午前二時頃旅順口

したる後、午前七時水雷艇隊驅逐艇隊、巡洋艦隊は豫定の集合點に達し、巡洋艦隊は直に港外を偵察したり、敵艦尙ほ港外に在りしも、此時恰も老鐵山方面より、敵艦ノウキツク、驅逐艇五隻の港内に向ひ、駛走するを發見し、之を砲撃すること十五分時間、敵倉皇逃遁せり。此夜偵察報告に依れば、バヤーン、ノウキツク、及驅逐艇四五隻尙ほ港外に在り。是に於て、驅逐艇を三隊に分ち、其第一隊は鳩灣に向ひ、其第二隊は大連灣に向ひ、搜索を行ひしも、敵に會せず、其第三隊は旅順口外に到り、敵の砲火を冒し、之を襲撃せり。廿五日午前七時、巡洋艦隊、水雷艇隊と共に、

港外を搜索して、アムールの如き敵の一軍艦を襲撃せしも、其結果は明ならず、又同日午前三時三十分我忠勇なる旅順口閉塞隊は敵の強力なる四ヶ所の探海電燈を猛烈なる砲火を冒し、旅順口に猛進せしが、天津丸は敵の探海電燈の爲に少し針路を誤り、老鐵山の東海岸に坐礁し、武揚丸は其外約四百米突に自ら破壊沈没し、報國丸は進んで港口燈臺下に達して、船首を約北々西にして自ら坐礁し、一隻(武州丸ならんか)は其南東東二離半のところに是れ亦自ら破壊沈没したり、又他の一隻は(仁川丸ならんか)饒頭山下の海岸に坐礁せるもの、如し又勇敢なる我水雷艇隊は翌朝黎明迄港外に在り、敵の砲火を悉く收容し得たり、旅順口閉塞隊及水雷艇隊の此勇敢なる行爲は、能く帝國軍人の忠勇激烈を表明せるものにして、港口閉塞の目的は不幸にして完全に達する能はざりしと雖も、其無形の効力莫大なるものありと信ず、閉塞隊中報國丸の下士以下三名敵砲の爲に輕傷を被りしも、其他は皆無事なり、各水雷艇隊及驅逐艇隊にも一の損傷なしとあり、又(廿七日東京若電) 仁川丸、老鐵山、大尉報告) 旅順口閉塞艇五隻は廿四日午前四時頃老鐵山の南方より旅順口に向て航進せしに、先頭船天津丸は其針路左方に偏り、過ぎたるもの、如く港口より南約三海里なる陸岸近くに於て、擊破せられ自ら淺瀬に擱揚げたるが如し、是に於て後續の諸船は北東に針路を變じ、前過したるに敵の探海電燈々として我が航進

第三編 本紀 第三章 本紀 日本攻勢展開 A—旅順口に對する日本海軍の運動 三八九 其五—一回旅順口閉塞—第三次旅順攻撃

豫定集合點に會したり、午前九時、主力艦隊は威容堂々波を蹴り、港口外六海里沖に達し、敵艦バヤーン、アスコリッド、ノックの三艦尙ほ港外に在るを發見し、尙ほ港内の間接射撃の爲め、三艦を砲撃せり。敵は陸岸要塞砲煩と力を協はせ、防戦稍勉む、砲戰約二十分、三艦敗退を裝ひ、我を其十字砲火と、布設水雷面とに誘はんとせしも、我之れに陥らず、彼終に敗れて港内に入れり、我即ち砲撃を中止して引揚げたり。又主力艦隊と砲戰正に酣なるの時、他方に於ては巡洋艦隊は港口の南方を監視しありたり、恰も見らる、驅逐艦二隻、老鐵山の南方より港口に

を妨げ又猛烈なる敵の砲撃を被り、武州丸先づ其の舵機を撃たれ、巡洋の自由を失ひ天津丸を距ること遠からざる處に盛洲丸自ら被撃沈没す、次で武揚丸亦敵砲のため被害少なからず終に港口に達せずして沈没せり、此間に報國丸、仁川丸の二隻は猛進して幸ふじて港口に達し、報國丸は盛洲敵艦「レトウキヤン」の外方に於て又仁川丸は其東方に於て各自目標發射に點火して被撃を圍り、乗員一同視察を揚げ船の沈没せんとするを認めて、端舟に乘移れり、端舟に乘移るや直に味方の水雷艇に遭き付けたんとしたるも、敵の探海電燈は遠慮なく我前途を照し、敵の砲火愈々激烈なりければ已を得ず迂回進行して、終に味方の水雷艇に接近すること能はざりし、然るに日山時に至て風波加はりたるを以て少なからざる困難を嘗め、同日午後三時頃に至り漸く我艦隊と會合することを得たりとあり、又閉塞の結果に就ては(三日)着電東郷聯合艦隊司令長官報告、旅順口閉塞の結果に就て、其概要を報告したる處、其後閉塞隊指揮官有馬長備よりの報告に依れば、武揚丸は敵砲の爲め舵を破壊せられ、饒頭山下に擱岸し、廣瀬武夫の指揮せる報國丸は始んと港口に達したるとき其側に坐礁せる「レトウキヤン」より猛烈なる射撃を蒙り、同じく艦機を破壊せられ、且船首に火災を起し、遂に燈臺下に擱岸沈没せり、又密藤七郎の指揮せる仁川丸も港口に入らんとするとき燈臺より南東約二鏈半の位置にて沈船と思はるゝものに、抵觸し進行する能はずして其位置に燬沈沈没したる者な

入らんとするあり、我即ち轟然猛撃を加へたりしに、其一隻は倉皇港内に入れり、一隻は逃て鳩灣に走り、我が追撃々破する所となりたり。敵艦の自在に出入するを見れば、壯烈鬼神を泣かしめたる閉塞作業も、其奏効十分ならずしを知るべく、其遺憾想ふべしと雖も、彼をして出入時間に費やす所を加へしめたる、其功少ならずとせんや、加ふるに、其の翌に於ける間接射撃を行ふや、高照尺の大口徑砲の威力は、港内に於ける敵艦を震懾せしめたり、一彈又一彈、着弾正確、雲鳴り天裂け、彼の妄射亂撃に、騰龍を波上に弄すると、其の差のみ

第二編 本紀 第三章 本紀「日本攻勢展開 海上權「制海權把握

A「旅順口に對する日本海軍の運動 其三九一 其五「第一回旅順口閉塞「第三次旅順攻撃

り、右報國丸、仁川丸の二隻は完全に港口を閉塞せざるも、目的の一部は達し得たるものなり、仁川丸の閉塞隊員中二等機關兵榎原健三は沈没後端舟を即さんとす、際敵砲の爲め戦死せり、其他報國丸の下士卒三名輕傷したる外、閉塞隊員は皆無事に我水雷艇に收容されたりとあり、又敵方公報に依れば、二月廿四日午前二時四十五分日本の水雷艇隊は燃料を積載せる數隻の大汽船を港口に沈め、以て我の出入口を塞ぐの目的にて再び旅順を攻撃したり、右汽船の中一隻は虎尾半島附近に於て又一艘は老鐵山附近に於て我砲火の爲に破壊されたり、日本水雷艇に對し砲臺よりの砲撃は天明迄繼續したり、曉天四隻の日本汽船灣内に破壊せられ居るを發見せしが、此時八隻の日本水雷艇は海上に待受居たる日本本艦隊所在の方向に馳せ行くを見たり、破壊船の乗組員はボートに救助せられたり、其内若干は多分溺死せしなる可く、其他は日本水雷艇に收容せられたり、港口の通行は依然として自在なり、日本汽船一艘、灣内に燃焼しつゝあり、燬發物は灣内に浮漂せり、二個より成る日本の艦隊遠距離に見ゆ前に追撃の爲め派遣せられたる露國巡洋艦三隻は其目的を達せず之を呼返したり、露國側には何等の損害なしとあり、

日本公 依れば我艦隊は二十四日午前十時旅順口沖に達し、巡洋艦隊は直ちに港外を偵察して會ま敵の旗艦「ノック」

を以てするも、復已に大に甄別すべきも
のあるを見るべし。

其六 第四次旅順攻撃

彼の有名なるマカロフ提督は、三月六日
を以て旅順に着し、又キリール太公の到
着するありて、露軍の士氣大に振へり。
日本海軍は聞ふ迄もなく、旅順艦隊の手
足を拘禁して、之を其防禦に専らならし
めざるべからず、然れども壯烈なる閉塞
行動は、未だ全く敵を拘束する能はず、是
に於てか、三月十日驅逐艇隊の特殊なる機
械水雷の沈設作業を見る。有名なる舷
々相摩の活劇は、此時に於て波上の陸戰

及驅逐艇五隻が老鐵山の方より港内に入らんとするを發見し
之を砲撃せり二十四日夜我驅逐艇は三部に分れ其第一隊は揚
揚を第二隊は大連灣を捜索したるも敵を發見する能はざりし
又第三隊は旅順口港外にて敵の砲火の下に一回の砲撃を試み
たるも其効果は詳ならず廿五日午前九時我艦隊は再び旅順口
外に至り敵艦「マヤン」、「アスコルド」、「ノッキック」の三艦
港外に在るを見港内の間接射撃を兼ねて遠距離より敵の三艦
を砲撃せり敵は要害と協力して約二十分間砲撃せしが須臾に
して盡く港内に入り依つて我艦隊は砲撃を止め港外を去れ
り此砲撃は距離稍遠かりしを以て其敵艦に對する効果は大な
らざりし者と認む我艦隊又一の損害死傷なし敵の運動に依り
察するに彼は専ら我を要害の十字砲火と水雷敷設面に勝致
せんとする者、如し主力艦隊の砲戰中我巡洋艦隊は港口の南
方に於て敵を監視したるに老鐵山の南方より敵の驅逐艇二隻
の港口に入らんとするを發見し直に之を砲撃せしが其一隻は
旅順口内に逃去りしも他一隻は老鐵山迄追撃して終に之を擊
破せり此驅逐艇は四木燐突のものにして感測の北方に擱岸し
て我砲火の爲めに破壊せられたり
我巡洋艦隊の諸艦には別に損傷なし
三月十日奉天發アレンキンフより露都への公報に曰く旅順口
砲臺司令長官より左の報告に接せり午前一時水雷艇に似
たる艦船見ゆとの信號ありたるにより午前四時各砲臺より之

を現し萬世の下、瞑想尙ほ且つ龍岡虎搏
の状況を追憶せしむべきなり。而かも
之れか公報文辭の絶妙なる、眞個史筆の
上乘なりと謂ふべく、予輩は情報を取て
之を註解するの愚なるを知るものなり。
故に今公報の全文を以て、讀者と其興趣

に向つて砲火を開きたり、露國水雷艇は港口を出て午前四時
頃老鐵山の四方に於て交戦せり、若干時發砲したる後日本艦
隊は南方に向つて退却し露國水雷艇は午前六時旅順に歸れり
偵察の爲めに派遣したる水雷艇は約一時間の後に歸り日本艦
隊の接近を信號せり午前八時日本艦隊は露國巡洋艦及び砲臺
に向つて砲火を開きたり、此間始終十四隻より成る日本水雷
艇隊は老鐵山の背後に隠れ居たりとあり之に由て之を觀れば
敵の日本海軍の目的を看取する能はざりしを知るべし

を共にせんと欲す。所謂三月十日の公報に曰く、聯合艦隊は、豫定の如く行動して、
更に昨日旅順口の敵を攻撃せり。驅逐隊の二隊は、同日午前零時旅順口港外に
達し、港外を搜索して、敵なきを認め、天明迄港外に留まりて、乙驅逐隊は各所に特種
の機械水雷を沈置せしが、敵の要塞は之に對し、時々砲撃したるも、我驅逐隊は無事
其の目的を達するを得たり。然るに、午前四時三十分頃甲驅逐隊は老鐵山の南方
に於て約六隻より成る、敵の驅逐隊に會し、近距離に於て約三十分間激戦し、朝潮、霞
曉の三艦は、敵の諸艦と殆んど舷々相摩せんとするが如く接戦し、敵の三四艦に猛
烈なる砲火を加へたるを以て、敵は或は汽罐を破損し、或は火災を起し、或は悲鳴を

第二編 本紀 第三章 本紀 日本攻勢展開 海上權 制海權把握 A 旅順口に對する日本海軍の運動 其六 第四次旅順攻撃 三九三

揚げ多大の損害を負ふて敗走せり。我三艦も亦敵砲の爲め多少の損害を被り、死傷十五名内戦死下士卒七名、負傷霞の大機關士南澤安雄の外、下士卒七名ありたり。就中曉は汽罐の補助汽管を破壊せられ、一時漏汽したるが故に機關兵四名熱傷に依り戦死せり。但し各艦共に、戦闘航海に支障あらず。又乙驅逐隊は、午前七時港外を去らんとする際、偶々洋中より旅順口に入らんとする、敵の驅逐艦二隻を發見して、直に其前路を遮りて之を攻撃し、戦闘約一時間。多大の損害を加へたる後、其一隻を逸したるも、他の一隻ステレグーシチーを撃破し、敵の要塞砲火の下に於て、漣は之を捕獲し、曳船しつゝありしも、漏水甚だしく、且つ波浪高く、曳綱切斷せしを以て、捕虜兵四名を收容して、捕獲敵艦を放棄せり。其後午前十時十五分に至り、右のステレグーシチーは全く沈没せり。此戦闘に於て、乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず、漣、曙の二艦に戦死卒二名、負傷曙の少尉島祐吉下士卒三名ありたり。之より先き、敵艦ノーツキック及バヤーンは港外に出て來りて、我が乙驅逐隊に向ひ進航し來りしが、我が巡洋艦隊の港外に接近するを見て、港内に退却せり。我が主力艦隊及巡洋艦隊は、同日午前八時、旅順口沖に達し、巡洋艦隊は直ちに港口

正面に進み、我が驅逐隊を掩護し、次で主力艦隊も亦老鐵山附近に至り、午前十時より午後一時四十分迄、連續港口に對し、間接射撃を行へり、巡洋艦の一隊が港口正面より看的報告する所に依れば、其の彈着は、概して良好にして、其効果少からざりしものゝ如し。我が砲撃中、敵の要塞も時々應戦したるも、我が艦隊の諸艦一の損傷もなかりし。又巡洋艦の他の一隊は、大連灣外に至り、港口三山島に於ける、敵の建設物を砲撃破壊せり。又高砂、千早は、特に旅順口半島の西岸を索敵せしも、敵を見ず。前回の攻撃に於て、我が巡洋艦隊に撃破せられ、鳩灣に擱岸したる、敵の驅逐艦はウエシノーテリヌイにして、今や檣及び煙突の上部を、水面上に現はして沈没し居れり。我が各部隊は午後二時戦闘を止め、一旦豫定地點に集合したる後、引上げたり。驅逐艦の其作業、其猛戰、此の如く、敵の應戰激烈なる、彼が如し、又主力艦隊の間接射撃の効果として、巨砲船渠に落下し、製造廠を破壊し、艦船を傷け、死傷を生じたること少なからず。

其七 第五次——第六次旅順攻撃——第二回閉塞

三月十日に於ける、舷々相摩の激戦は、日本艦隊の勝利に歸し、其主力艦隊間接射撃の効果少なからざりしと雖も、戦局上の大勢に對し、未だ全く成功したるにあらず、日本海軍の攻撃を續行するは當然にして、尙ほ遠くバルチック海に於ける、露の海軍を其計算に置く以上、其近き一方を無能ならしめざるべからざるは勿論なり。又敵に於ても、間接射撃に對抗せん爲め、老鐵山頂に、六吋加農二門を据付け、また新たに正面に砲臺を築き、六吋加農砲若干門を据付け、又日本驅逐艦隊の侵入を防がん爲め、防材及沈船を施こし、自ら港口を狹窄する等、其他凡て防禦に専らなる施すべき手段は一として施さざるなきなり。

三月廿三日、日本驅逐艦隊は、其受けたる命令を遂行せん爲め、夜暗を冒し、港外に迫れり。零時十五分、敵其砲火を猛射し、曉に達す、午前七時半、二十三隻より成る、我艦隊は地平線に現はれ、其六隻は老鐵山角に沿ひ、東港に對し間接射撃を行ひたり。敵の損傷艦ツエザレウキツチ、ベレスウキツトの如きも、間接射撃を以て之に應へ、

出動し得べき戰艦、巡洋艦、驅逐艦は港外に出て、對抗し。午後二時に至り、敵側は一時と稱す、我艦隊は悠然として退却せり。蓋し是れ、旅順艦隊の大舉出動の第二回にして、我艦隊を誘致して、水雷敷設面に惹き寄せんとするの策たり。

三月廿七日は是れ如何なる日ぞ、日露戦史を讀むもの、第一に記憶すべき日なり。第一回閉塞の壯舉は、二月廿四日に於て決行せられ、而かも其効全からず、今や第二次の閉塞を決行す。是れ此三月廿七日なり。閉塞船としては、千代丸(一、七四六噸)有馬中佐之を指揮し、山賀大機關士以下十五名之れに搭じ、福井丸は(二、九四三)廣瀬中佐之れを指揮し、栗田大機關士以下十七名之れに搭じ、米山丸は(二、六九三)正木大尉之れを指揮し、島田中尉

第二次閉塞隊將士	
千代丸指揮官	海軍中佐 有馬 真橋
(初瀬)	大機關士 山賀 代三
(三笠)	二等兵曹 林 紋平
(盤手)	一等兵曹 下田 代納助
(淺間)	同 三上 勘次郎
(三笠)	一等機關兵曹 佐藤 末吉
(初瀬)	同 藤山 新吉
(同)	三等機關兵曹 久永 市之助
(三笠)	一等機關兵 阿部 忠次
(盤手)	同 奥村 又次郎
(千歳)	同 川瀬 信三郎
(盤手)	二等機關兵 有馬 精一
(千歳)	同 折戸 直二郎
(三笠)	同 山岡 忠一郎
(新高)	同 白井 興作

第二編 本紀 第三章 本紀 日本攻勢展開 A 海上戦 制海權把握

旅順口に對する日本海軍の運動 其七 第五次——第六次旅順攻撃 第二回閉塞

以下十四名之に搭し、彌彦丸は森中尉之を指揮し、小川大機關士以下十四名之に搭し、四隻の船舶六十六名の勇士、其の磅礴たる氣魄、今渤海風濤の上、旅順塞下の彈雨に向ひ、白雲以下十隻の驅逐艦、雁以下六隻の水雷艇隊の援護に依り、其壯絶の快舉を行へり。彼の森嚴莊重なる公報は示して曰く、聯合艦隊は、去二十六日再び旅順口に向ひ、同二十七日午前三時三十分、敵港閉塞を決行せり。四隻の閉塞隊は、驅逐隊及び水雷艇隊掩護の下に、旅順口港外に達し、敵の探海燈の照射を冒して、港口に直進し、約二海里に達するの頃、敵の發見する所となり、兩岸の要塞

三九八

(對島)	同	神谷榮三郎
(千早)	同	石井銀藏
福井丸指揮官	海軍中佐	廣瀬武夫
(敷島)	大機關士	栗田富太郎
(朝日)	兵曹長	杉野孫七
(敷島)	一等兵曹	飯本禮伸之進
(朝日)	二等信號兵曹	菅波政治
(吾妻)	一等水兵	平野一太郎
(敷島)	二等機關兵曹	松下軍吉
(朝日)	三等機關兵曹	平野松三郎
(同)	一等機關兵	坂井主計
(吾妻)	同	中條政惟
(同)	同	石井左市
(吾妻)	同	小林吉太郎
(同)	二等機關兵	塚本達郎
(吾妻)	二等機關兵	香澤皆藏
(吾妻)	同	小池幸三郎
(吾妻)	同	山本半三
(朝日)	同	楠 殿藏
(敷島)	同	井島小治郎
(龍田)	同	海軍大尉 正木義太
米山丸指揮官	中尉	島田初藏

及び哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず、四隻相次て港口水道に闖入し、第一の千代丸は、黄金山の西側に於て、海岸より約半鏈の處に、投錨爆沈し、第二の福井丸は、千代丸の左側を過ぎて、少しく前方に進み、投錨せんとする時、敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し、次て其位置に爆發沈没し、第三の彌彦丸も、福井丸左側に出で、投錨爆沈せり、第四の米山丸は、稍後れて港口に達し、敵の一驅逐艦の艦尾と衝突し乍ら、既に沈没せる千代丸と、福井丸との間を通過し、水道の中央に投錨せしとき、敵の魚形水雷一發を受け、爆發し、惰力の爲め左岸に近く、船首を左

三九九

(高砂)	二等兵曹	鹽谷巳之資
(常盤)	二等信號兵曹	二名 那 一
(富士)	三等兵曹	赤松虎太郎
(常盤)	二等機關兵曹	鈴木太郎右衛門
(富士)	一等機關兵	土屋五郎吉
(同)	同	河野幸次郎
(常盤)	同	津淵平太郎
(同)	同	温品逸三
(高砂)	同	後藤茂美
(富士)	同	福島熊喜
(富士)	二等機關兵	中村儀三郎
(同)	同	羽賀力藏
(同)	同	林 豊三
彌彦丸指揮官	海軍中尉	森 初次
(浪速)	大機關士	小川英雄
(八島)	一等兵曹	村上卯吉
(初瀬)	一等水兵	徳田宗一郎
(山雲)	二等水兵	杉本三藏
(初瀬)	三等機關兵曹	岡野熊太郎
(八島)	同	伊藤三次
(初瀬)	一等機關兵	小出山太郎
(山雲)	同	本下初藏

第二編 本紀 第三章 本紀 日本政勢展開 A 旅順口に對する日本海軍の運動 其七 第五次 第六次 旅順攻撃 第二回附表 三九九

にして横に沈没せり。敵の猛烈なる砲火の下に於て、斯の如く閉塞船が勇敢沈着、其任務を遂行したるは、事業として間然する所なく、實に賞讃するに餘りあり。唯遺憾なるは、彌彦丸と米山丸との間に

(淺間)	同	小四萬吉
(八島)	同	瀬崎榮三
(同)	二等機關兵	富田六治耶
(山雲)	同	古賀繁雄
(淺間)	同	平松興太郎
(吉野)	同	近水水吉

四〇〇

尙ほ空隙を存し、完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす。此壯烈なる閉塞の再舉は前回之に従事したる勇士の切願を容れ、將校及び機關士は主として、前回の者をして之に任せしめ、下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり。閉塞隊員中戦死者中佐廣瀬武夫、兵曹杉野孫七、外士卒二名、重傷中尉島田初藏、輕傷大尉正木義太、大機關士栗田富太郎、外士卒六名にして、其他は悉く無事、我水雷艇隊驅逐隊に收容されたり。戦死者中福井丸の廣瀬中佐及び杉野兵曹長の最後は、頗る壯烈にして、同船の投錨せんとするや、杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲め、船艙に下りし時、敵の魚形水雷命中したるを以て、遂に戦死せるもの、如く、廣瀬中佐は乗員を端舟に移らしめ、杉野兵曹長の見當らざる爲め、自ら三たび船内を搜索

したるも、船體次第に沈没、海水上甲板に達せるを以て、止むを得ず端艇に下り、本船を離れ、敵砲の下を退却せる際、一巨砲中佐の頭部を撃ち、中佐の體は一片の肉塊を艇内に殘して、海中に墜落したるものなり。中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず、其最後に於ても萬世不滅の好鑑を殘せるものと謂つべし。閉塞隊員の掩護收容に就ては、直接其任に當りし水雷艇隊、最も其力を盡し、天明過ぐる迄敵の砲火に曝露して其任務を遂行せり。就中蒼鷹、燕の二艇は、閉塞船隊を護衛して、港口より約一海里に達し、敵の驅逐艦一隻と會戦し、多大の損害を加へ、敵は汽鍋を破裂されたるもの、如く、盛に蒸氣を吹かしつゝ、退却せり。閉塞隊の端艇の港外に退却する時、目撃する所によれば、敵艦と認むべきもの、黄金山下に於て、全く進退自由を失ひたるもの、如くなりしと云ふ。我水雷艇隊は、天明過ぐる迄、熾なる敵の砲火を蒙りしに拘はらず、寸毫も損傷なし。閉塞隊員の收容は、千代丸及び彌彦丸の乗員は、燕に、米山丸乗員は、端舟三隻に、分乗して、鵠雁に收容され、福井丸の乗員は、霞に收容されたり。満船の士、孰れか優劣あらんや、其壯烈は一團の壯烈なり、而れども其壯烈中の最な

第二編 本紀 第三章 本紀—日本海軍の運動
海上戦—制海權把握
A—旅順口に對する日本海軍の運動
其七—第五次—第六次—旅順攻
撃—第二回閉塞

四〇一

るものは、彼の廣瀬中佐の最後なり、彼れが猛膽沈着、火彈雨の如きの下、船の正に大旋渦中に沈まんとするに當り、三たび其一部下を船艙に求め、其時間を計るに精細なる、其船に残れる部下を尋ねるの情と、其已に端艇に移れる部下とを危地より脱せしむる爲め、最後時間の計量を誤まらざる、其已に杉野兵曹の求むべからざるの時、短艇に飛移るの際、潮光彈閃、中佐の英姿と相映じ、神乎人乎、森乎として又凜然たり、時に敵彈一過、英魂去て歸らず、空しく二錢銅貨大の肉彈を留む。蓋し福井九は、其船首に水雷を受け、杉野兵曹恰も此時を以て點火任務を取りつゝ、ありし爲め、粉塵せられたるものなり。

閉塞成蹟如何を見るに、第一次に於けるよりも良好なるは勿論なり、千代丸、福井丸は先きに露國側に於て沈設せられたる、ハルビン、ハイラル二隻と共に、黄金山下に沈没し、爲めに港口の右側は著しく狭窄せられ、唯彌彦、米山二隻の間、空隙を

三月廿七日附マカロフ司令長官の發したる公報に依れば、午前二時四隻の日本大汽船及び之に次ぐ六隻の水雷艇は、我探照燈に依て發見せられ、我は之に向つて發砲したり、右の内三隻の汽船は港口より右方に退却して擱岸し、一隻は左方に進航し、是亦通航路より離れて沈没したり、我が水雷艇一隻は日本水雷艇六隻と戦ひ、機關士一名、水兵六名之に死し、艦長クリニチー大尉及び水兵十二名負傷せり、黎明日本の巡洋艦及び駆逐艦見えたるを以て提督は日本艦隊に當らんが爲め出港せり、日本艦隊の計畫は失敗に終り、港口は通航尚ほ自由なりとあり、又マカロ

存し、一は電氣礁下に、他は虎尾礁下に沈没せり。

第二次閉塞事業の實行せらるゝや、デーリー、デングラフ之を評して曰く、日本の斷行したる第二次閉塞は、將に來らんとする陸軍々隊の輸送行動に連絡すべきものたるや、想像するに堪えたり。又第一回閉塞事業に對して、露國軍の示したる排除行動に對し、尋て來るべき行動を防止せんが爲めに斷行せられたるが如し。勿論東郷提督は、敵と會戦して一舉して雌雄を決すべきは其好む所なるべしと雖も、要は敵勢力をして増強せしめざるにあり。秋季に至れば、波羅的艦隊は東航し來りて、日本艦隊を威嚇すべく、之が必要に應せん爲め、ポロチノ、インペラトール、アレキサンドル三世及クニアヂスウオ

フ司令長官の露國皇帝に奏せし旅順口發公報に依れば、三月二十七日午前二時頃敵は港口閉塞の爲め六隻の水雷艇に掩護せしめ、四隻の汽船を港口に進航せしが、我軍は直に其接近を發見し、砲臺砲艦ガール井にオートクズメイ之に向ひ砲撃し、水雷艇一隻は右方に擱岸し、他の二隻の汽船又之に次しが三隻共港口の右方に擱岸し、残り一隻は通航路の一方に沈没せり、シールニーは日本艦隊六隻と激戦中、我軍の戦死七名、負傷十三名を出せり、港口は依然として通航全く自由也、拂曉日本艦隊及び巡洋艦隊は右方に見えたるを以て、我艦隊は之に當らん爲に出港せし、敵は戦艦を嫌忌して退却せり、敵の砲火により機關部に損害を受け、黄金山附近に坐せし驅逐艇シールニーは當夜引卸されて港内に入れり。

一、ロフ諸艦に追加するに、アリヨールを以てせざるべからず。若し東郷提督にし

第二編 本紀 第三章 本紀 日本攻勢展開 A 旅順口に對する日本海軍の運動 其七 第五次 第六次 旅順攻撃 海上戦 制海權把握 其七 第五次 第六次 旅順攻撃 第二回閉塞 四〇三

て封鎖を行ひ、陸軍を隊が旅順を攻陥せば、旅順艦隊は自ら東郷提督の手中に在りて、波羅艦隊を迎へ、之と會戦する難事にあらざるなり。此閉塞事業の失敗を重ねたるは、其計畫に對し、何等の非難を加ふべきなきのみならず、初期に比すれば、作業の困難なる上に、露軍に於ける之に對應する行動即ち其警戒を増し、經驗を得たるに由れるなり。即ち其經驗の結果として、其艦隊を以て對應し、驅逐艦シールニハ敵の先頭船に水雷を發射し、敵の事業を躊躇せしめたり。而れども予輩の見る所に依れば、日本の失敗は、他にあるにあらず、船舶の愛惜に依る儉約に歸するものなり。何となれば、其閉塞作業は、之を行ふ極めて迅速なるを尙ぶが故に、速力の優越なる新式船を要し、殊に其船に熟識したる機關員を用ひざるべからず。若し日本にして、初回作業に於て惜む所なく、新式船を用ひ、其目的を達するを得しならば、爾餘の船舶は運送船として、其種類を問はず、輸送の任務に就くを得べきなり。第二次作業に對して、速力十八海里を有する新型船二隻を用ふるも、後からざりしなり。唯マカロフ提督の報告に疑ふべき點あり、報告に稱す、シールニ一艇長は、砲火を冒し、敵が突進し來るべきを恐れ、水雷一射、船首を破壊し、敵船爲めに右方に轉

回し、後續の二隻は之に従ひ、皆共に港口右岸に擱岸し、第四の敵船は其右方通路の側に沈没すと、而れども其先頭船の水雷を以て破壊せられ、其轉回に伴ふて、第二第三も之に跟隨せりと云ふは、甚だ疑ふべき報道なりと謂はざるべからず。又露京通信に據れば、當時日本の艦隊四十餘隻、鎮南浦に在り、露國水雷艇が敵の旅順夜襲に報復すべき最好時機なりと謂はざるべからず、此時に至るまで、日本艦隊の錨泊地に就ては、何等の聞知する所なかりし上に、恰も清國沿岸海面濃霧多く、日本艦隊其行動に不便を感ぜしは、勿論なるべければ、露國水雷艇の乗すべきは、正に此時機にありしなり。比較的劣弱なる海軍國は、其水雷艇を用ふる困難なりとは云へ、一方には日本の運送船も、亦敵の水雷艇あるに依り、行動の目的を殺がれつゝあるなり。若し日本人をして露國の側に立たしめば、此好機を逸するが如きことなかるべしと。稍的評なりと謂ふ可し。

其八 第七次——第八次旅順攻撃

三月二十七日、第二次閉塞の決行、敵艦の状況如何、其閉塞は尙ほ未だ完全ならず、敵

第二編

本紀 第三章

本紀—日本攻勢展開

A—旅順口に對する日本海軍の運動

四〇五

艦の手足は未だ之を拘束する能はず、日本艦隊は今や閉塞隊員を收容せる、水雷艇隊を掩護しつつありしが敵は之を望見して、戦闘の目的を有するものとなし、戦艦セバストポリ及びペルスウェートの二隻を除き、他は皆出港して砲臺下に集合したりしも、日本艦隊は固より戦闘の目的にあらざるが故に、漸次引揚げ去れり。此時に於ける二艦の出動せざる理由は特に記し置かざるべからざるなり、即ちペルスウェートは今や出動せんとして、錨を抜けり、艦首を轉ぜんとして、誤て其衝角を以てセバストポリノ艦側に衝突せり。之れが爲め、一は其艦側に非常なる損傷を生じ、他は其衝角を損ぜり。是れ二艦の出動する能はざりし理山なり。翌二十九日は旅順租借記念日に方り、日本艦隊大舉して攻撃を行ふべしとの風評傳はり、砲臺及艦船皆其警戒を怠らざりしが、日本艦隊終に來らず、翌三十日はボリス大公旅順に着し、士氣更に振ひ要塞の防備も恰も此頃及び整頓したるが如し。而るに此日、水雷敷設船アムールは、我が閉塞船に衝突して損傷を生じ、著しく傾斜したるを引返へせり、全體に於て、敵艦隊は二隻の損傷と、水雷敷設船の不幸を見たりと雖も、マカロフ着任以來の士氣は毫も阻害せられたるを見ざりしなり。

四月十二日夕刻、マカロフ中將は驅逐艇隊に對し、「情報に據れば、敵艦隊は廟島列島附近に遊弋しつつあるものゝ如し、驅逐隊は之を搜索し、水雷攻撃を加ふべし」と命令したるを以て、八隻の驅逐艇は出港せり。而れども此夜濃霧暗濶咫尺を辨せず、恰も夜半、我第四第五驅逐隊第十四水雷艇隊及蛟龍丸は、探照射燈の下に、其機敏と膽勇とを振ひ、港外に水雷敷設作業を行ひたり。又第二驅逐隊は特別の任務を帯び、十三日黎明、鮮生角南東海面を巡邏しありし際、敵の驅逐艇を發見し、之を攻撃したり、敵の僚艇は全速力を以て逃避しつつ、驅逐艇ストラシヌイ敵の重圍に陥りたりと信號せり。是れに於てマカロフ提督は、之れが救助をバイロンに命じ、バイロンは即時出動し、遙かに前方を見渡せば、今やストラシヌイは、四隻の日本驅逐艇に圍まれ、苦戰奮闘しつつあり。已にして機關破れ、舵機損し、將さに沈没せんとす、而かも尙ほ屈せず、マニエフ大尉なるものゝ如きは、最後の瞬間に於て、尙ほ機關砲の照準を爲しつつ沈没せり。バイロンの接近し來ると同時に、我が驅逐艇は退却せり、是に於てバイロンは、救助艇に對し、沈没艦の乗員を收容せんとする眞際、日本の第三戰隊は、猛然として殺到し、バイロンも亦重圍に陥らんとするの形勢となりし。

を以て、マカロフ提督は自ら旗艦ペトロ
パウロスクに坐乗し、ボルタワ、デイヤナ
を率ひて出港し、力を盡して對戦せしも、
濃氣を破りて優勢なる我一戦隊の猛進
し来るに會し、露艦隊は且つ戦ひ且つ退
き、更にアスコリツド、ノウキツク、ペレス
ウエード、セバストポリを参加せしめ、陣
形を整へ針路を變じ、今や正に其變じた
る針路を取らんとする一刹那、蕪然たる
響は其旗艦の舷底に起り、轉瞬の間、第二
の爆聲と共に、黒烟全艦を包み、僅かに二
分時を出てずして沈没せり。是れ蓋し、
前夜日本驅逐隊援護の下、蚊龍丸が危険
を冒して水雷を沈設したる水面に航進

日本公報に依れば(十六日午後五時若東那聯合艦隊司令長官
報告)聯合艦隊は去る十一日より豫定の如く行動し更に旅順
口の敵に對して第七、八次の攻撃を爲せり第四驅逐隊、第五驅
逐隊、第十四水雷艦隊及び蚊龍丸は十二日夜半旅順口港外に至
り敵の探照を行して港口に近づき計置の通り港外の各所に機
械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり又特別の任務を有せる
第二驅逐隊は十三日黎明港外鮮生角の南東を巡遊せる時東方
より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻
を發見し直に其前路を遮りて之を攻撃し約十分間戦闘の後之
を撃沈せり又同時頃四方老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐
艦一隻を發見し轉じて之を攻撃せしが距離遠くして遂に之を
港内に逸せり此戦闘に於ける第二驅逐隊の損傷は輕微にして
唯「雷」の卒二名輕傷せるのみ撃沈せる敵艦の溺死者は敵艦
「マヤーン」の近づく來りしため之を救助するの暇なかりし
第三戰隊は午前八時港外に退して第二驅逐隊を援護し且つ敵
情を偵察せり午前九時頃敵艦「マヤーン」我に向ひ突進し來り
遠距離より砲撃を開始せしを以て徐々に應戦して之を撃退せ
り幾もなく敵艦「ノウキツク」、「アスコリツド」、「ゲアナ」、「マ
トロパウロウスク」、「ホヘーダ」、「ホルター」等「マヤーン」
と合し攻勢を取り反撃し來り第三戰隊は之に應戦しつゝ敵を
南東方向約十五海里に誘致せり此時沖合約三十海里方向に

せしに由れり。旗艦には實に敵海軍の
主腦たるマカロフ提督ありしなり、今や
雄姿去て復た還らず、深智能くマ將軍の
帷幄たる參謀幕僚以下三十一名下士卒
六百名之に戦死し、僅かに救けられたる
もの、キリール太公、艦長ヤニコレフ大佐、
以下將校六名、下士卒七十三名に出でず。
此日午後一時以後の戦況は、公報之を詳
かにす曰く、當日午後一時、艦隊は旅順港
外を去り、豫定地點に集合して、洋中に假
泊し、更に準備を整へて、十四日午後四時
より、再び旅順口に向ひ發動せり。第二
驅逐艦、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷
艦隊は、翌十五日午前三時、前後相次で旅

りて濃氣の内に隠れたる第一戰隊は第三戰隊の無線電信に接
し直ちに急進して敵艦隊に迫りしが敵は艦首を轉じて港内に
向ひ背進せしを以て尙益す迫窮して之を港前に壓迫せるとき
先頭に占位せる「ペトロパウロウスク」と見えたる敵艦一隻前
夜沈没したる我機械水雷に掛り爆發轟沈するを見る時に午前
十時三十二分なり
敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し尙ほ外に一敵
艦の進退自由を失ひたるの疑ありしも敵艦隊混雜の爲め其艦
型を識別する能はざりし
其後敵の殘艦は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲撃しつゝ、
漸次に港内に入り正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり
此戦闘の初期砲戦に於て第三戰隊は一の損傷なく敵の損害も
亦少許なるべく第一戰隊の砲戦距離に近づかさざりしとあり
露國公報に依れば(十四日)戦闘艦及巡洋艦は日本艦隊の一部
を攻撃する目的を以て海上に航進したるに、日本艦隊の勢力
三十隻までに増加したるを見て我が艦隊は錨地點に引返した
り、戦闘艦「ペトロパウロウスク」は沈没水雷に掛り沈没し
マカロフ中將は同艦と共に戦死したるが如し、キリール太公負
傷せられたるも幸ひに免かるゝを得たり艦隊は港内に入り日
本艦隊は老鐵山沖に在りと云ひ又(十四日)戦闘の當夜出港し
たる水雷驅逐艦「ペストラシナイ」は所屬艦隊と分離せられ、

順港外に達し豫定計畫の如く再び其任務を遂行せり。午前七時第三戦隊も港外に現はれ敵情を偵察せしが港外に敵影なく港内寂然たり。又第一戦隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機械水雷三個を発見し、一々之を砲撃爆沈し、午前十時より春日日進を老鐵山の西方に分派し、約二時間港内に對し間接射撃を行はしめたり。敵の要塞及港内の敵艦も時々之に應戦せしが、兩艦共に損傷あらず、此の兩艦は此の日を以て敵に對し其初彈を發射せしが、其射撃の効果は相應に之れありしが如く、老鐵山西の新造砲臺を沈黙せしめたり。午後

且日本水雷艇隊の包圍する所となりて破壊せられ乗員中五名のみ救助せられたり露國艦隊が戰闘位置に就きたる瞬間に於て「ボヘエダ」は右舷裝甲部の中央に魚形水雷を受けたり、但し同艦は死傷者なく歸港するを得たりと云ひ又(十五日)二隊より編成せられる十四隻の日本艦隊は四月十五日午前九時より正午迄老鐵山の岬角より旅順の砲臺及び市街を交互に砲撃し百八十五個の砲彈を發射したり「ボヘエダ」其他の軍艦は陸上の砲臺と共に之に應戦したり陸上に於て數名の兵卒及支那人負傷したるの外露國軍艦及び市街は些の損害を受けずと云ふも此損害云々は正確ならざる如し又軍艦「ヘトロマウロウスタ」號沈没の原因を調査せしに右は正に日本の沈没せし水雷に觸れたるものにて敵は我艦隊の旅順口外に於ける常用の航路を知り豫め此處に水雷を沈没したるものなり而して艦首の機關及び艦艙の下に水雷爆發の結果に就き本艦及び我技術官の認定する所に於ては敵の水雷の爲め直に艦内水雷の船火藥及び十二時砲の裝彈積發し此瞬間に於て火藥庫及び汽笛とも同時に破裂し二分時の後艦は火災に包圍せられたるまゝ沈没したるものと云ひ又十四日旅順口司令官の報告によれば十三日夜水雷艇隊巡航中「ベストラッシュ」は濃霧のため孤立となり、敵水雷艇の砲撃する所となりて沈没し水兵五名のみ救助せらる又戰闘艦「ボヘエダ」は右舷中央に魚形水雷命中し大損害を蒙りたれども辛うじて單獨に入港したり兵員死

一時三十分艦隊は交戦を止め歸航せり。一世の海軍戦術家たるマカロフ提督の此日の戦略は露軍の爲めに痛惜すべきところたり而して此の戦死の厄は不可避的のものなりしや戦術上に可避的の方策なかりしや否や。四月十八日のデーリーグラフキックは其紙上にCB生なる名を以て之を論じて曰く此役に於て第一に注目すべき一事は四月十二日マカロフ提督の統率の下にセバストポリの出勤を見ざるここれなり。此事實は即ちセバストポリが他の一艦と衝突し損傷を生じたるを證するものなればなり。僚艦の衝突は戦時に於て至大災厄たるものにして其原因の何れにあ

傷なし數日前旅順口港内に於て戰闘艦「セバストポリ」と「ホルタム」と衝突し「ホルタム」は損害少からずといへりとあり又四月十五日午前六時敵の艦隊は一旦沖合の水平線に顯はれたるが程無く其形を隱せり午前九時頃に至り二十三隻より成立せる敵の艦隊は老鐵山の方より再び顯はれ旅順口に迫らんとし沿岸の砲臺に向ひ砲火を開く特に其火力を老鐵山半島の砲臺に集中せり我艦隊は旅順口の内鋪地に在りて絶えず敵の砲火に對し燃んに應砲し頗る効驗ありたるが如し敵は午後一時まで砲撃を繼續せしが我に何の損害も與へざりしなり唯白玉山の麓に置きたる彈丸の偶然破裂せし爲め清國人七名其場に即死し兵卒十二名清國人三名負傷す

十二日以来十五日までの旅順攻撃に参加せる軍艦は三笠、初瀬、敷島、朝日、八島、富士、淺間、常盤、高砂、笠置、千歳、吉野、日進、春日等にて驅逐艦は電、雷、曙、龍、春雨、速島、朝霧、村雲、夕霧、陽炎、不知火等、又水雷艇は隼(艇長大尉桑島有三)鷗(大尉吉川安平)千鳥(少佐櫻井吉丸)真鶴(大尉飯田延太郎)雁(大尉坂本重國)若鷹(少佐矢島純吉)鷗(大尉原田松次郎)燕(大尉正野義雄)等なり蛟龍丸には小田式器械水雷の發明者中佐小田喜代蔵等乗込み行けり

りやは、多くの論究を要せず。常に其將校の未熟なるか、又は就役日淺きに依らずんばならず。露國海軍の訓練を施すや、一年に僅かに三個月なるを以て、其訓練の不熟なる亦怪しむに足らざるなり。マカロフ提督も、必ずや常に此缺陷に憂慮せし所ある可く、是れ實にマカロフ提督をして下級將校の執るべき職務の爲めに、其哨艦に移乗せしめたる所以にして、若し彼れにして下僚の技倆に信任すること、東郷提督の如くならしめば、猶ほ東郷大將が未だ會て其下僚の職域に入らんが爲め、其乗艦を去りたることなきが如く、決して哨艦に移乗するの必要なるべきなり。四月十一日夜陰大雨を冒し、日本海軍が敢行せる攻撃は間然する所なく、其水雷艇は敵の驅逐艦に備ふるが爲め、其驅逐隊掩護の下に、水雷敷設動作を取り、マカロフ提督が常に歸航の水路を測り、これに其水雷を敷設したり、此夜雨脚簇々、探海燈の光力も透徹せず、日本水雷艇の働作を照知すること能はざりしなり。斯くてペトロポロウスクは、其水雷の厄に會し、艦員共に水底に没したり、願ふにマカロフ提督は、其出動に際し、其統率せるバヤーン、アスコルド、デイヤナ、ノーウキックの先頭として、老朽艦一隻を要せざるべからず。其先頭船は、其軸部兩側に梁材を張り、機械

水雷の三十呎以内に在るものを爆破するを要す、提督の此策を取らざりしは遺憾なりと謂ふべし。水雷爆發實況は、一個の日本機械水雷其旗艦の右舷に爆發し、次で内部亦爆發して火災を起し、火災は延て爆發又爆發と爲り、即ち沈没したるものたるや疑ふべからず。本来ペトロポロウスクの構造は、英國の如く二重底ならず、従て敷設水雷の破壊力に對して抵抗力の劣弱なるを見りしなり。

勇敢なるマカロフ提督の死は、露國の爲めに一大打撃たり、提督は開戦以來、露軍の被むりたる損害其有形と無形とを併せ、之を恢復し、以て太平洋艦隊の威力を回起せんとし、計畫滿腔旅順に到着して、尙に一閱月、其熱心と才能とは、能く従來の沈衰を挽起し、士氣爲めに振ひ、防備爲めに大に整ひ、若し此不幸に遭遇することなかりしならば、任務の遂行今や大に見るべきありしならん。露國は其最大なる戰術家を要望する時機に於て、提督の死を見るは、露國の損失として、其至大なるや勿論なり、旗艦の沈没、提督の戰死、露國が之より受くべき、有形無形の損害は、延て日本が將に大進攻を實行せんとするに當り、之に大妨害を加へんとするも、今は全く行ふべからざるべし。

ロンドンタイムスは四月十一日より十四日に亘りたる此日本海軍の活動に付き、重きをベトロポロウスタの沈没に置き、從て其沈没せしめたる効力を彼の十二日夜水雷敷設作業の功に歸すべきを論じて曰く、日本海軍の今日迄實現したる海軍戰術中其最巧なるを釋ぬれば、恐くは十二日夜に於ける水雷敷設作業を推さざるべからず。装甲せざる船舶に、危険物を満載し、敵の白電燈下に、其船體を暴露するが如き成功の機會極めて稀少なる危険を冒し、港口一裡内に縱横活動し水雷を敷設するの難事は、想像するに餘りあり。日本驅逐艇の敏捷なる危険水面に其船體を操縦し、蛟龍丸を掩護し、蛟龍丸は此掩護の下に、亦敏捷なる働作を遂行せり。蓋し此危険を冒したる後、露國艦隊は、日本艦隊の誘致運動に依り出動し、其沈没區域水雷面を横行して事なきを見たる際に於ける失望は、想見するに堪えたるも、此失望は瞬間に變じ、敵艦隊は歸路其陷奪たる水雷に罹りたる爲め、其失望は十分の満足と爲りたるならん。露國側の詳報未だ予輩の手中に歸せずと雖も、此旗艦の沈没、ボビエタの大損傷は、敵艦隊を震懾せしめ、倉皇逃退、海面を亂射しつゝ、旗艦と同一の運命に會せざらんことを欲したるは明かなり。而れども此倉皇逃退の結果

果は、日本艦隊をして其計畫を成さしめざりしものなり。誘致艦隊の任務は露國艦隊を東南方に誘ふにあり、其歸路を遮斷するは、主力艦隊の任務なりしと雖も、其逃退の爲め、主力艦隊の目的を達することを得ざりしを以てなり。唯八日夜襲以後の成功として、之を第二に置くは至當なるべし。と云ひ、露國艦艇の無能を評して曰く、日本艦隊が砲臺の砲火距離内に彷徨し、冷然として横行するは、是れ敵砲臺の威力を輕視し、敵水雷の能力を蔑視するものにして、而かも其船艦の無事にして損害を受けざるは、偶々輕侮冷蔑を被むるの價値ありと謂ふべし。蛟龍丸が十二日夜に於ける作業の遂行は、一面よりは露の驅逐艇の能力を表明す、何となれば、已に予輩の聞き得たる露の水雷艇の損失を控除するも、尙ほ其十八隻を有せざるべからず、而して其時間を要するの長く、其位置は一裡を出でざる眼前に敵の作業を妨害したるものあらざればなり、タイムスは一步進めをて曰く、如何に海戰史中を尋釋するも、其代價を支拂ふの微少なる此の如き、而かも其麻得したる得利の大半を見ざるなり、一は其一隻をも失ふとなく、他は殆んど其全艦を殄滅せられたるに齊し。予輩は露國海軍の境遇に同情を表すると同時に、日本の成功を認めざる

べからず、而かも其成功は剛強にのみ依りたるにあらず、全く其堅忍強耐の致すところ、に歸せざるべからず。東郷提督豈に露國海軍と雌雄を港外に決するを欲せざらんや、決戦は實に東郷提督の欲する所たるに相違なしと雖も、能く其將來に要すべき必要に鑑み、其奮勃したる雄心を克制し、冷靜なる自制心に依りて、其決戦の勇奮を抑へ、全く制海權を把握し得たる成功を稱せざるべからず。然れども露國軍艦にして、尙ほ浮動するものある限り、之を以て全く最後の成功を斷言すべからざるなり、殘存勢力が有する迫害力は、決して之を無視すべからざればなりと。

其九 第三次旅順口閉塞

敵の旗艦沈没し、主腦たるマカロフ中將の戦死は、痛く敵軍の士氣を阻喪せしめたるべしと雖も、タイムス所論の如く、其殘片より來る迫害は、日本軍の未だ安んずべからざる所なり。是に於て更に壯烈なる第三次閉塞は、決行せられたり。敵は第一次よりは第二次に、其警戒を加へ、今又旗艦の沈没を見たる後なれば、其細心警戒の度の更に加はりたるは勿論なるべし、此時に於て、之を決行する、其壯烈の狀、凄慘

の極、到底筆の記し舌の語る所にあらず。白電燈火の下、海濤澎湃の上、火彈血雨、天裂け地震よの邊、一死以て事を遂ぐるの外、他念なき決死隊員が、猛然突進するの狀、寧ろ之を語るの舌なく、之を記するの筆なきを當然なりとす。其閉塞船としては、遠江丸(一九五三)は本田少佐之を指揮し、森中尉以下十七名之に搭し、佐倉丸(二九七八)は太沽砲臺先登者として有名なる白石少佐之を指揮し、高橋大尉以下十九名之に搭し、愛國丸(一七八一)は犬塚大尉之を指揮し、内田大尉以下二十三名之に搭し、江戸丸は(一七二四)は高柳少佐之を指揮し、永田中尉以下十七名之に搭し、三河丸は(一九六七)は匝瑳大尉之を指揮し、大西中尉以下十七名之に搭し、小樽丸(二五四七)は野村少佐之を指揮し、笠原大尉以下十六名之に搭し、朝顔丸(二四六四)は向少佐之を指揮し、糸山中尉以下十七名之に搭し、相模丸(一九二六)は湯淺少佐之を指揮し、山本大尉以下二十三名之に搭し、八隻の船、一百四十七の勇士、實に此行動に當れり。

第三次閉塞隊將士

- 遠江丸 乗組 一八
- ▲少佐本田親民(輕傷) ▲中尉森永尹(生存) ▲大機關士竹内三千三(生存) ▲三等兵曹藤下淺次郎(不明) ▲三等機關兵曹野田京三郎(不明) ▲二等水兵中村市郎兵衛(同) ▲三等機關兵曹宮田兵馬(輕傷) ▲三等機關兵曹片山辰次郎(同) ▲二等水兵坂上宗次郎(同) ▲一等機關兵曹田藤吉(同) ▲三等機關兵曹井忠七(同) ▲二等信號兵曹田中太郎吉(重傷) ▲二等兵曹中田源次郎

公報を讀過するも、尙ほ砲轟き血進るの感あり。曰く「聯合艦隊は豫定の如く行動し、五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を決行せり。閉塞船隊及之を掩護せる赤城艦長海軍中佐藤本秀四郎、鳥海艦長代理海軍中佐岩村圀次郎、第二驅逐隊司令海軍中佐土屋光金、第四驅逐隊司令海軍中佐長井群吉、第五驅逐隊司令海軍中佐眞野巖次郎、第九艇隊司令海軍中佐矢島純吉、第十艇隊司令海軍少佐大瀨道助、第十四艇隊鶴真鶴を欠ぎ、第六十七號艇第七十號艇を加ふ司令少佐櫻井吉丸は、二日夕刻艦隊と分れ豫定航路を旅順口に向ひ前進せしが、

- (生存) ▲一等機關兵福田(同) ▲一等機關兵佐々木龜太郎(同) ▲二等機關兵曹内山登一(同) ▲二等機關兵竹内寅藏(同) ▲三等機關兵水村千吉(同)
- 佐倉丸 乘組 二〇
- ▲少佐白石霞江(不明) ▲大尉高橋靜(不明) ▲機關少監寺島貞太郎(同) ▲三等機關兵大谷補尾(戰死) ▲二等兵曹重重吉(不明) ▲二等兵曹佐野善次郎(同) ▲三等兵曹吉井好藏(同) ▲一等水兵大塚榮三(同) ▲三等機關兵三木高平(同)
- 三河丸 乘組 一八
- ▲大尉西澤胤次(生存) ▲中尉大西真輔(同) ▲中機關士豊田稔(生存) ▲四等機關兵蛭谷虎次郎(戰死) ▲一等水兵八百屋才吉(重傷) ▲二等機關兵鈴木幸次郎(重傷) ▲一等兵曹北端龜吉(輕傷) ▲一等水兵後藤太一(輕傷) ▲二等機關兵曹岡野米治(同) ▲二等機關兵奥山玉吉(同) ▲二等信號兵曹辰巳健松(生存) ▲二等機關兵曹伊勢田榮助(同) ▲三等常備兵曹中村元治(同) ▲一等機關兵鈴木多吉(同) ▲一等水兵羽原九左衛門(同) ▲一等機關兵松原新太郎(同) ▲一等機關兵田中平八(同) ▲二等機關兵鈴木常吉(同)
- 小樽丸 乘組 一七
- ▲少佐野村勉(不明) ▲大尉笠原三郎(同) ▲機關少監岩瀬正(同) ▲二等兵曹高橋庄吉(同) ▲二等兵曹佐藤政助(同) ▲二等信號兵中野耕作(同) ▲三等機關兵曹三吉忠吉(同) ▲二等水兵

不幸にして午後十一時頃より、南東の強風俄かに起り、波濤高く、爲めに閉塞船隊は離散し、相失ふに至れり。閉塞船隊總指揮官海軍中佐林三子雄は、船隊の集會到底見込なきを認め、閉塞事業中止の令を下せしむ。其信號通達せず、午前二時頃迄、通信に盡力せる間に、船隊は相前後して旅順口沖に達せり。然るに三河丸指揮官海軍大尉西澤胤次は、港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て、前續船已に港口に向て突進せるものと思考し、直に港口に向て邁進し、佐倉丸指揮官白石霞江と思はしきもの之に續く、敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發

- 寺田永作(同) ▲二等水兵中野甚太郎(同) ▲一等機關兵能登原多三郎(同) ▲一等機關兵好永五郎(同) ▲一等機關兵龜井梅吉(同) ▲一等機關兵影山鹿之助(同) ▲一等機關兵前島貞之助(同) ▲二等機關兵松島清太郎(同) ▲二等機關兵米谷貞(同) ▲二等機關兵根本秀雄(同)
- 朝顔丸 乘組 一八
- ▲少佐向菊太郎(不明) ▲中尉米山貞次(不明) ▲機關少監清水雄免(同) ▲二等兵曹伊藤周助(同) ▲一等水兵笠方善市(同) ▲二等水兵平田源一(同) ▲二等水兵谷原梅太郎(同) ▲同龜谷善太郎(同) ▲上等機關兵曹田中清之助(同) ▲三等機關兵曹源田岩熊(同) ▲一等機關兵阿部源吉(同) ▲二等機關兵三野品藏(同) ▲同近藤東一(同) ▲同平賀長藏(同) ▲一等水兵三宮竹馬(同) ▲上等機關兵曹大野藤吉(同) ▲一等機關兵曹渡治平(同) ▲一等機關兵町田福三郎(同) ▲三等機關兵林岩吉(同) ▲同田中富五郎(同) ▲同上原岩吉(同) ▲同秋定秋次郎(同) ▲同青山與太郎(同) ▲一等機關兵末永新八(同) ▲二等機關兵稻葉總作(同) ▲二等機關兵石井儀一(同)
- 愛國丸 乘組 二四
- ▲大尉大塚太郎(生存) ▲大尉内田弘(不明) ▲大機關士青木好次(不明) ▲一等水兵長澤四郎(輕傷) ▲一等水兵平松友三郎(輕傷) ▲一等機關兵佐々野勘太夫(同) ▲二等機關兵杉山肥藏(同) ▲上等兵曹田崎榮次郎(不明) ▲二等水兵岩本慶助(同)

火し、強力なる探照と猛烈なる砲火を以て、之に防禦せしむ。三河丸は港口防材の一部を破りて、奥深く水道に闖入し、中央の好位置に投錨爆沈し、佐倉丸と思はしきもの、港口尖岩の附近に投錨沈没す。之に次で、遠江丸(指揮官海軍少佐本田親民)江戸丸(指揮官高柳直夫)小樽丸(指揮官野村勉)相模丸(指揮官湯淺竹次郎)愛國丸(指揮官海軍大尉犬塚太郎)朝顔丸(指揮官向菊太郎)も相次で港口に向ひ猛進す。此時敵の防禦砲火、猛烈を極め、其敷設水雷は前後左右に爆發し、閉塞隊員の戦死負傷するもの最も多かりしが、遠江丸は港口防材に衝突し、船首を東にし、殆んど港口

▲一等水兵吉國等(同) ▲二等水兵平出清治(同) ▲二等機關兵曹安留治兵衛(同) ▲三等機關兵曹長谷川常五郎(同) ▲一等水兵野口榮三(生存) ▲一等機關兵高石幸作(同) ▲一等機關兵藤野直次郎(同) ▲二等水兵藤車管平(同) ▲二等水兵中村尚一(同) ▲二等機關兵曾田修一(同) ▲二等機關兵新宅清太郎(同) ▲二等機關兵深尾秀男(同) ▲三等機關兵錦織卓一(同) ▲一等兵曹大野權六(同) ▲二等兵曹星出千代藏(同)

江戸丸 乗組 一八

▲少佐高柳直夫(戦死) ▲中尉永田武次郎(生存) ▲中機關士與倉守之助(同) ▲一等機關兵武田彌七郎(戦死) ▲一等機關兵松隈梅次郎(重傷) ▲三等兵松岡平藏(輕傷) ▲一等機關兵彌米市(輕傷) ▲一等機關兵曾近藤寅吉(生存) ▲二等信濃兵曹大津留秋太郎(同) ▲三等機關兵曾吉永長藏(同) ▲一等機關兵有川健吉(同) ▲二等機關兵齋藤庄三郎(同) ▲二等兵曹中村三代藏(同) ▲二等水兵安流常右衛門(同) ▲二等水兵山本光藏(同) ▲二等機關兵神村寸吉(同) ▲二等機關兵光岡貞(同) ▲二等機關兵龜山彌吉(同) ▲二等機關兵前田秀松(同) ▲同手島藏(同) ▲同安部直(同)

相模丸 乗組 二四

▲少佐湯淺竹次郎(不明) ▲大尉山本親之同 ▲機關少尉矢野研一(同) ▲二等機關兵上金山幸吉(戦死) ▲上等兵曹入見仲藏(不明) ▲上等兵曹菊池竹次郎(同) ▲同今野喜英助(同) ▲二等兵曹若石善三郎(同) ▲二等兵曹曾田國治(同) ▲同河野精藏(同) ▲三等兵曹田尾幸藏(同) ▲三等兵曹島口一(同) ▲一等水兵森金作(同) ▲二等水兵銚源藏(同) ▲上等機關兵曾佐野廣太(同) ▲二等機關兵曾野又次郎(同) ▲二等機關兵曾四重和徳(同) ▲一等機關兵多田佐太郎(同) ▲二等機關兵財部善藏 ▲同中川勘次郎(同) ▲同牧野真造(同) ▲同富村幸助(同) ▲三等機關兵竹内夏次(同)

の半部を閉塞して、其位置に爆沈し、江戸丸は港口に達し、將に投錨せんとする際、高柳指揮官は腹部を射られて戦死し、指揮官附海軍中尉長田武次郎直ちに之に代り、投錨を命じ、次で爆沈せり、小樽丸相模丸と思はしきものも、亦港口に入て爆沈せるもの、如く、又愛國丸は港口より約五鏈の所に於て敷設水雷に罹り、瞬時に沈没し、指揮官附内田弘同機關長青木好次以下八名行衛不明となれり、朝顔丸と思はしきものは、舵機を損したるもの、如く、港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり。右八隻の閉塞船の中、五隻は港口に入て爆沈せしを以て、港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し、充分閉塞せられたるものと認む。今次の閉塞事業は、天候の異變と、敵の防備増大したりとに依り、前二回のものに比し、頗る慘烈を極め、戦死負傷は甚だ多く、特に小樽丸、相模丸、佐倉丸、朝顔丸、四隻の閉塞隊員は、一も收容する能はず、其最後の勇行さへ、之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も、其忠烈の事績は長く帝國の史乘に特記すべきもの

第二編 本紀 第三章 本紀 日本攻勢展開 A 旅順口に對する日本海軍の運動 四二一
海上戰 制海權把握 其九 第三次旅順口閉鎖

なりと信ず閉塞隊員の收容に従事したる各水雷艇隊及驅逐隊は翌朝まで風濤を闘ひ敵に抗して能く其任務を盡し、特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容して此難事中第七十七號艇長海軍中尉平眞雄は敵彈に汽管を破られ負傷卒三名を出だし、一時敵前に於て進退自由を失ひしが其僚艇第七十號艇長海軍大尉森本義寛は之を救助して曳行せり又蒼鷹司令兼艇長海軍中佐矢島純吉も敵彈に左舷機を傷けられ、卒一名戦死し、準にては下士一名戦死せり、其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし。』

第三閉塞の決行、此の如くにして成り、漸

露國公報曰く

五月二日敵は又港口閉鎖の目的を以て攻撃を繰返せしも撃退せられたり始め水雷艇五隻は午前一時海岸附近に現れ我砲臺及び軍艦の砲火の爲め退却したり同一時四十五分多數水雷艇援護の下に第一の敵船は現れ次で數隻の敵船續出し東方及東南より孰れも港口を指して進航せり我艦「ナトフツマイ、ギリヤツク、クレミヤスチー」及び海岸砲臺は之を砲撃し退却せしめたり

通計八隻の船は我砲臺、魚形水雷及び沈没水雷の爲め撃沈せられたり尙砲臺指揮官及び「ギリヤツク」艇長の報告する所に於ては午前四時過二隻の日本水雷艇破せられたりと云ふ

次で我は砲火を止め唯地平線に見ゆる敵の水雷艇に向て時々發砲したるのみ敵の火船は孰れも連射砲を備へずは絶えず發砲したり

敵三十名を收容したりしが内に二名の重傷士官ありたり港口の検査と溺死者の收容とは風波の爲め妨礙せられたり我露國側には「ホーカイ」號乗込水兵一名の外死傷なし

く閉塞の目的を達したり。

東郷提督の第三次閉塞報告を讀過して海戰史上其偉を求めんが、モビル灣要塞攻撃に於ける、米提督アラガットの雄蹟と、ゴッペンハーゲン港丁抹艦隊を殲滅したる英將ネルソンの偉勳と二あるのみ。彼アラガットは其艦隊を率いて、敵の水雷沈置面を疾驅し、冷然として曰く、水雷何者ぞ、四點鐘せよ、前進せよと、旗艦之が先導となり力戰遂に捷てり、彼ネルソンは丁抹要塞の前に、司令長官より退却の信號を受くるや、我れ隻眼を有す時々盲人たるの權あり、我豈に中途にして戦を停むるものならんやと云ひ、其眼鏡を盲する所の眼に加え、我れ信號を視ず、接戦の信號を其橋頭に釘着せよと、今第三次閉塞の行動を取れる八隻は、雲垂れ潮跳り、疾風猛雨海を捲くの時、指揮官は其成功を危み、中止の信號を掲揚せしも、各船之に従はず、猛然突進、敷設水雷面を駛驅し、其二隻は水雷に罹りしも、六隻は其目的地に達し自爆して沈没せり、彼ホブソン大尉の壯舉サンチャゴの役も、其雄を争ふ能はざるべく、壯烈の最なるものとして、史乘に不滅の光榮を留めん。

ロンドン、タイムズ記者は曰く、日本公報に依れば、敷設水雷、海岸砲臺、發射水雷に畏

怖する所なく、港口に蔭進したる八隻の老朽船一万七千噸の中、其三隻を除き、他は其目的地點に達し沈没するを得、其二隻は防材を突破し、航路の中央に達するを得たり。水雷艇以上のものは最早出入すべからずと云ふ、既に然るを得たりとせば、是れ大兵の上陸作業に至便安全を増加したるものと云ふべく、之に依て貔子窩の占領に次ぐに、金州及び復州に於てせらるるならん、此閉塞船に搭乗せる將士の意氣の壯烈なる、海戦史上に存する一切の美事に比肩する事を得べし、此の一事を以てするも日本海軍が、海軍の最良なるもの、斑に處するを得べきを證するものなり。要するに、今や日本軍の滿洲進攻の行動は大に進行しつゝあるを知るべきものなりと云へり。

B 浦鹽方面に於ける日露海軍の行動

其一 浦鹽艦隊の行動

日本水雷艇が旅順口に襲撃を決行したる八日頃より、浦鹽艦隊は既に出動の準備をなし、十一日午前十時には、白神崎附近の海面に現はれ、(高雄艦長報告)二月十一日

夜十一時六分、其午後一時、晝の日沖に於て汽船全勝丸、奈古浦丸、二隻を砲撃し、奈古浦丸は撃沈せられたり、(十二日午前零時三十五分、要塞發參謀總長宛斯くて、浦鹽艦隊は二月十五日浦鹽に歸航せり。(七日以上海上に行動する事を禁ぜられ居りたればなり)

蓋し是等浦鹽艦隊の行動の當否は、本史の論ずべき必要を見ず、唯其行動が戰略上如何なる必要に出でたるかを論ぜば足れりとす。タイムス記者は曰く、若し夫れ是等の四隻浦鹽に於ける四隻の露の巡洋艦の巡洋艦にして、其の操縦宜しきを得ば、日本が其不便を感ずべきもの尠ならずと雖も、日本艦隊の遮斷に會ふ事を免がれんと欲せば、一たび浦鹽を去らば再び之に據ることを斷念せざるべからず、日本艦隊は唯其の歸路を要撃すれば足ればなり。若し或は、更に根據地若干距離に存在し、其の根據地に給炭船の必要に應ずるを得ざるあらば、障壁なき大洋の海面に於て、其の行動は持続的たる事を得べしと雖も、海上貿易を破壊し、私船に對する戰爭を目的とせる行動を持続するに止まらば、日本の之に對應する極めて容易なるべきのみと唯茲に一の考究すべき問題は、浦鹽艦隊が何等旅順艦隊に策應する

所なきや否やの問題なり、旅順艦隊は二月九日を以て、出動すべき豫定なりと稱す而して浦鹽艦隊の出動準備が、八、九兩日間に在りとせば、其の間連絡なしと云ふべからず、後來八月十日の海戦の如き、實際は旅順艦隊の逸出に策應したるものなることに對照せば、思索すべきものなき能はざるなり、假令五月二十日、ラスト、アジヤ、ロイド二〇號紙上に浦鹽前司令官スタケルベルグ少將が、ルスの新聞記者に語りたる談話の一節に、日本艦隊が旅順口を襲撃したるアレキシーフ總督の電報に接せしは、二月十一日なりと云ふと雖も、是時既に同司令官は指揮權を握り居らず、ライチェンスタイン大佐の手中に在りと云ひ、且つ前年十二月、艦隊の塗色を戦時の定色に塗換すべしとの命を受け居たりと云ふ一節を考ふるに、二月十一日にアレキシーフ總督より電報を受けたりと云ふは、此電報の接受はいかにも其日なるべきやを計らずと雖も、其の以前準備の豫令を受け依て以て十一日に出動したるものなるべく、又同司令官は十一日午後三時出動したりと云ふも、同日の午後二時、已に奈古浦丸撃沈の事あり故に予輩は全然同司令官の談話を否認するものなり。

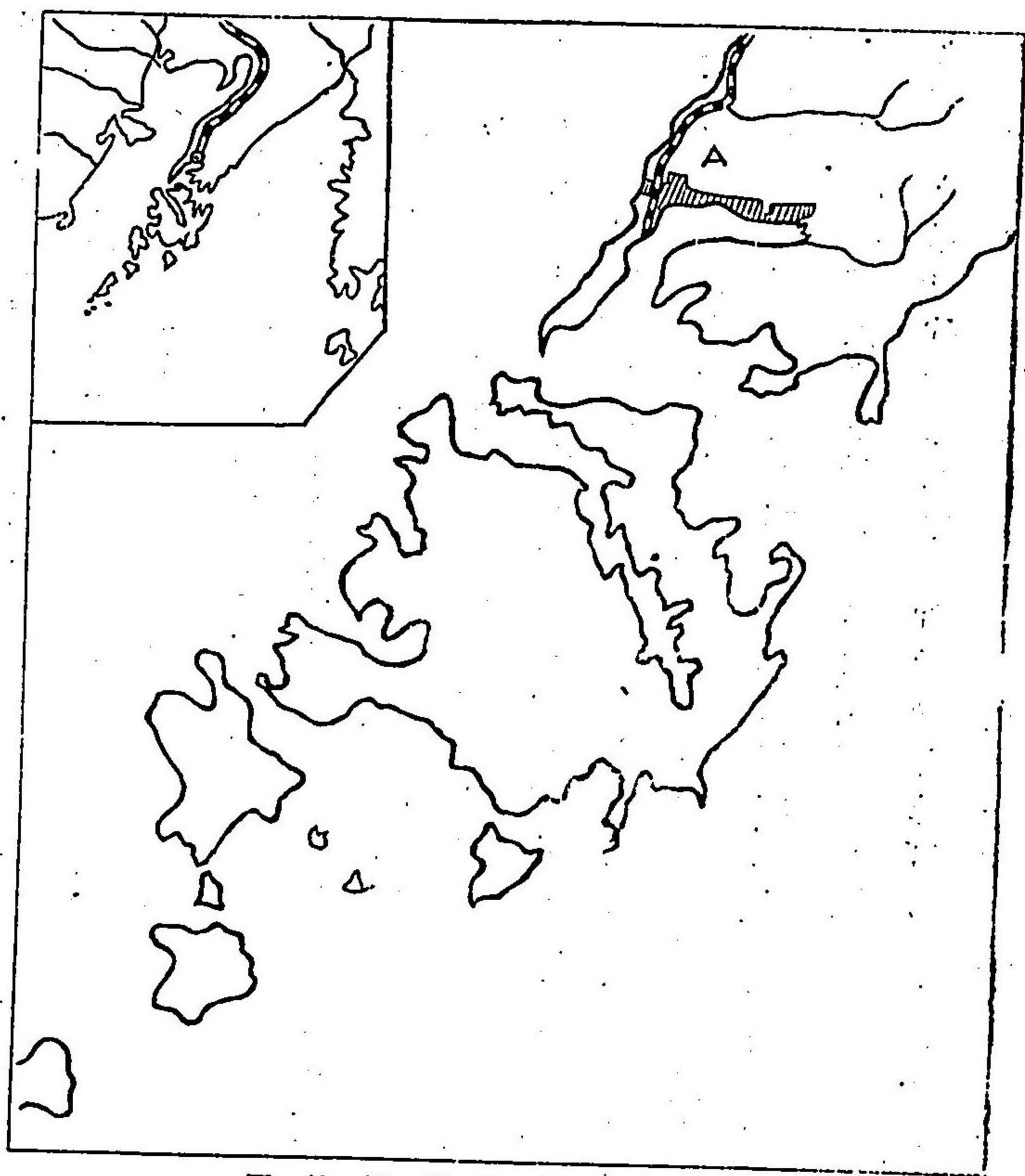
其二 日本艦隊の浦鹽威嚇砲撃

已に總論第十節に於て詳説したるが如く、浦鹽艦隊は日本の海上權に、其の右翼面に危害を加ふるの威迫力を有することは、讀者の了知する所なるべく、是に於てか三月六日浦鹽威嚇砲撃の舉ありしならん。朝鮮海岸を北に、又北せば、氷山屹として、時ち朔風凜として怒るの邊、七隻より成る我艦隊は、一低地殻を擧し、一昂天柱を擧るの怒濤を凌ぎ、氷塊を突破し、霧進しつゝありし際、淺間艦のバイブは氷結す、勇敢なる濱崎二等機關兵曹は、舷索に縋り、逆巻氷潮に洗はれつゝ、碎器一振又一振、氷塊散じてバイブ常に復するの一刹那、急濤舷側に雪を噴き、憐むべし勇敢なる兵曹は、其跡を止めず、此の壯烈なる一事態は、全艦の士氣を振勵するもの尠なからず、翌六日我艦隊は浦鹽の東口に達したり、上村第二艦隊司令官の報告を見るに、「豫定の如く六日朝結氷せる海を航し、浦鹽斯德東口に達せり、敵艦港外に見えず、バサルキン岬半島、及びボスホル海峽砲臺の射界を避けたる位置より、北東陸岸砲臺の下に接近し、午後一時四十分より、約四十分間、間接射撃を以て、港内に向ひ威嚇砲撃

せし後、引上げたり。此の砲撃は相應の
効果ありしと信ず、陸上砲臺には陸兵を
見しも、更に應戦せず、午後五時頃東口方
面に當り、黒煙の揚がるを見る、或は敵艦
の出で來りしが如くなりしも、煙は次第
に消滅し判明ならず、七日朝アメリカ灣
スッレローク灣を偵察せしも異状なし

正午再び浦鹽斯德東口に迫りたるも、敵艦見えず、砲臺發砲せず、夫れより轉じてボ
シエット灣を偵察せしも敵艦なし」と。露國側の報導に依れば、日本艦隊は戰闘艦
一隻、甲裝巡洋艦四隻、無甲裝巡洋二隻より成り、ウスリー灣より浦鹽に接近し、ボス
ホオラス東南面に航走し、午後一時二十五分其五隻より、スヴァアロフ、リニヅキツチ
砲臺に向て砲撃を開始し、又オビアツスコエ河平原より市街港内に亘り、其砲撃を
行ふと五十分時にして停止し、南方に航去したり。此時驅逐艦二隻はアネコルド島
附近、マイデル岬要塞を距る約三十里附近より、ウスリー灣東南方に亘れる間を搜索

アレキシーフ總督の報告に曰く三月六日附浦鹽要塞司令官の
報告に曰く同日午前八時四十五分敵艦七隻アネコルド島の南
方に現はれ正午浦鹽港とアネコルド島との中間を航りて海濱
よりの砲力遠ざざる距離を以て方向を烏蘇里灣に轉じ午後一
時三十分砲火を開きたり此時に當りて該艦隊中出雲及八雲は
之を認むることを得たるも他艦の名は之を知ることを得ざりし
と又曰く浦鹽の砲臺は砲臺に向て損害を與へず且つ死傷をも
生ぜざりし唯市街に於て婦女一名死し水夫の負傷するもの數
名ありしに過ぎず而して昨日も敵艦を見る暫時なりと



浦鹽要港及附近地圖

り翌七日正午頃此
等の艦隊は再び前日
の地點に接近したる
まゝ航走し去れり」と。
浦鹽港の地形たるや、
海上より攻撃する頗
る難く、アムール灣の
挟きこと幅員僅に二
海里半にして、深く陸
地に轉入し、三分の二
の地點より遠かに曲
折しありと雖も、日本
海軍は極めて精細な
る海圖を有し、浦鹽要

第二編 本紀 第三章 本紀—日本勢發展 海上戰—制海權把握 B—浦鹽方面に於ける日露海軍の行動 其二—日本艦隊の浦鹽威嚇砲撃

塞面に於ける防備に精通しあるは勿論なるが故に砲撃を距離五海里に於てせりと云はゞ何等損害を被むらしめざるの理なく、現に之を旅順砲射の實驗に徴するに其彈程は更に遠大なるにも係らず其損害を與えたることも又大なるものあり。故に獨り浦鹽要塞のみ無損害なる理由なき也。又浦鹽要塞が其敵たる日本艦隊の砲撃に對し一發の應射を爲さざりしは何等の理由に基くものなりしや其備砲の巨大なるべきは言を俟たざるのみならず、又其高き位置よりする發射は敵の艦隊よりするよりも一層猛烈ならざる可からず、或は敵の砲撃にして激甚ならざる限り我砲をして其所在を知らざらしむるも、又不可ならずと雖も、永久砲臺に於ては此の秘密を要すべきにあらず、其的確なる砲射は必ず敵艦隊に非常なる損害を與へざる可からず、二百發の砲射を爲せりと云ふ以上、これに一發の應射を爲さざりしが如き、眞個絶無の事に屬す、偶々戰術の淺劣を證明するに過ぎざるなり。露國の辯疏する所を見るに、敵をして砲臺の位置を知悉せしめざるに在りしと云へり、己れ他をして之を知悉せしめざらんと欲するも、他の之を知悉しある以上は、拙策たるの外なからんとす、縱令一步を譲りて、之を正理なりとするも、焉んぞ

知らん、此の思慮を廻らすの間に於て、敵艦を撃沈するの利あるに如かざるを清國戰略家が此策を取らば、或ば正當なるべきも、強大なる武力を保有し其強大を以て自ら處る、露國砲兵が其所在の敵に知悉せられんを畏れ、一發の應砲を爲さざるは、予輩其大戰略家たるに驚かずんばならず。又日本海軍の砲彈が大部分は爆發せざりしと稱する露國の公報は、信ずるに足らず。爆發の最劇なるもの、パルスチンクセラチンとなすと雖も、未だ之を砲彈に使用せざるが故に、今日特種なる下瀬火藥の威力を以て、最となさざる可からず、而るに其小部分の外は爆發を見ずと云ふは、恐らくは虚報なるべし。タイムスは是の砲撃を批評して曰く、日本艦隊が浦鹽を砲撃したるは、其目的那邊に在りしか。パトロクラス灣は有効なる砲撃を市街及び港内に施し得可き地點ならざるのみならず、其砲撃の効果を兩端に亘りて、完全ならしめんと欲せば、兩面又は黒龍灣よりせざる可からず、其然らざるより見れば、其目的偵察にありしや明かなりと云へり。

其三 其後に於ける浦鹽及び上村兩艦隊の運動

第二編 本紀 第三章 本紀—日本攻勢展開 B—浦鹽方面に於ける日露海軍の行動 四三一
海上戰—海軍權把握 其三—其後に於ける浦鹽及び上村兩艦隊の運動

日本の上村第二艦隊は、四月二十三日を以て、元山津を出航し、間もなく濃霧に會し、之を冒して航進せり。北上するに從ひ、霧は益々濃厚となり、二十四日午後四時、推測に依れば東經百三十二度十分、北緯四十二度二十分附近に達したるも、四面濃霧に覆はれ、何等行動を爲す能はざるを以て、午後四時三十分正西に轉針し、二十五日午前六時東經百三十五度二十分、北緯四十度五十分附近に到達せしも、霧は依然濃厚にして、再び引返すも、到底浦鹽斯德に接近行動し得るの見込みなきを依て一時元山津に歸航するに決し、針路を更定し、二十六日朝に至り、霧漸く晴る。此間約三晝夜全く濃霧に閉塞せられ、時に艦の一部を望見し得ることありしが、多くは後續艦すら見るを得ざりし状態なりしも、幸にして一艦艇をも見失ふ事なく、艦艇全部辛じて午後元山港に歸着するを得たり。入港するや直に、大木領事來艦して報じて曰く、二十五日正午頃、敵の水雷艇二隻、元山津に進入し、我商船五洋丸を撃沈して退却せり。此時港口には、ロシヤ、グロンポイ、リュリックと認る敵艦三隻あり、午後二時頃北東に向て退却せり、又二十五日午前六時、頃金州丸は陸軍守備一箇中隊を乗せ第十一艇隊と共に利源縣方面に向ひ北航せりと。依て右船艇は敵艦隊に會せ

しやの疑あるを以て、第二艦隊主力驅逐隊を率ひ、出港敵艦隊を追尾せんと欲し、出港準備整ひたる時、第十一艇隊のみ歸航せり。其報ずる所に依れば、十一艇隊は二十五日午前六時、陸兵を載せたる金州丸と共に元山津を發し、利源縣に向ひ、午後二時同地に着して、陸兵の上陸を援助し、午後六時に至り、其陸兵を收容したる金州丸と共に、抜錨歸途に上らんとしたるが、正午過ぎより降下を始めたる晴雨計は、益々急降し、天氣險惡の兆ありしを以て、艇隊は遮湖浦に止まり、翌朝出發新浦を経て、元山に歸るべきとを金州丸に告げ、即ち假泊す。金州丸は單獨歸航せり、艇隊は二十六日午前七時出航せしも、濃霧に遭ひ、同日午後三時辛じて元山津に入港し、我艦隊に合し、始めて金州丸の未だ歸着せざるを知り、上村司令長官の命に依り、直に金州丸搜索の爲めに、出港し、元山津より遮湖浦に至る沿岸一帯を搜索せる後、此夜は遮湖浦に假泊し、二十七日出港、搜索中、泰盛丸に會合し、金州丸沈没の事實を聞き、猶避難者在るべきを思ひ、二十八日午前八時まで遮湖浦附近に至る海面を搜索し、元山津に歸着せり。金州丸に陸軍兵の搭乗したるは、敵兵約二百五十、吉州より北青に向て出發すとの情報に接し、一中隊を利源に送り、威嚇運動を行はんと希望を有し

第二編 本紀 第三章

本紀 日本攻勢展開
海上戦 制海權把握B 浦鹽方面に於ける日露海軍の行動
其三 其後、に於ける浦鹽及び上行
兩艦隊の運動

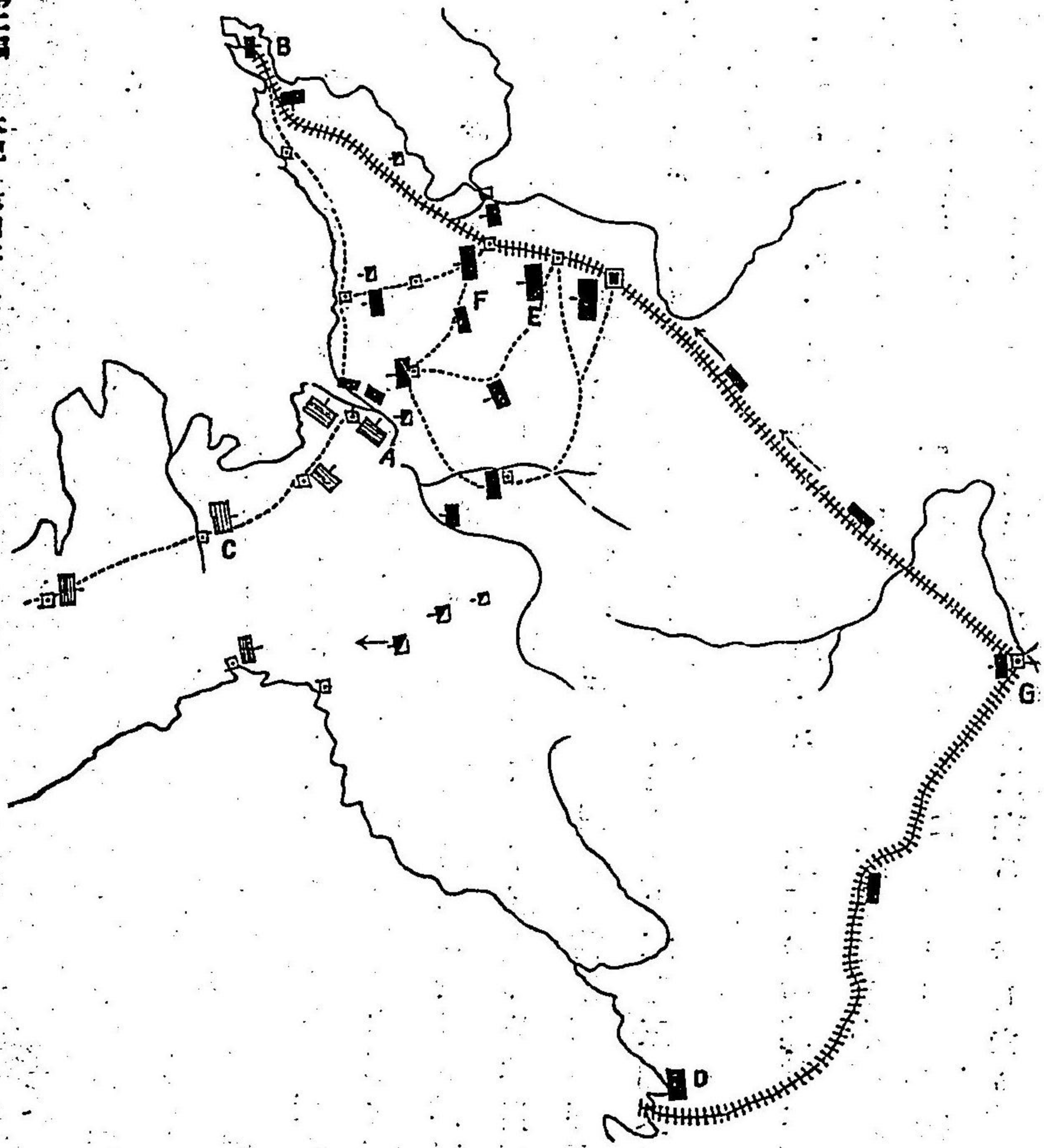
たる元山守備隊長の協議に應じたる者なりと。金州丸は歸航せず、是れ敵艦隊に會せし爲めなるや、又は濃霧の爲なるや不明なるを以て、再び元山津以北の沿岸海面を搜索すべきを命じて、千早を新浦以北の沿岸海面を搜索の爲め先航せしめ、本艦隊は新浦沖合に向へり、遮湖浦沖にて一轉馬船漂流せるを認め、霞をして之を檢せしめ、其遺留品より推究せば、最早金州丸は敵に遭遇せしものなることは疑ふの餘地なきも、或は猶以北の沿岸に遁走乗上げ避難せしやの疑あるを以て、千早にはブルアット岬以南の沿岸を尙搜索したるの後、元山津に歸航し、其結果を大本營に報告すべきを命じ、之を分派せり、千早艦長の報告に曰く、「二十七日浦鹽に向ひ、艦隊航行中、東經百二十八度五十四分北緯四十度五分の位置に於て、鼠色轉馬船の漂流し在るを發見す、船中に三十五年式海軍銃劍帶一、海軍靴一、士官用らしき靴一あり之を採取せり、血の跡らしきものを見ず、依て金州丸は敵艦を發見するや、北方に避け海岸に乗り上げ、艇を棄てたるものならんかとの想像を以て、本官は司令長官の命に依り、艦隊と分離して夜の明るを待ち、城津の北東二十五海里なるブルアット岬より南下しつゝ、沿岸殘す所なく遮湖浦まで搜索したれども、其影を認めず、遮湖

浦以南は、昨二十七日水雷艇隊搜索を爲したる等なるを以て、本官は其搜索を止め、只今元山に歸着せしに、金州丸沈没の事並に新浦に在る遭難者收容の爲め、救助船を派遣せること等を聞きたり、本官は今夜更に出航して新浦に向はんとす」と。金州丸は正に撃沈せられたり、敵は我乗員の一部を收容して後、之を轟沈したり、當時の公報未だ盡さざる所ありと雖も、要するに敵艦隊か我交通路を横行し、上村艦隊の索敵行動の空間に乘じ、危害を加へたるに歸すべきのみ。浦鹽艦隊が巧に日本艦隊との會戦を避け、私船若しくは運送船に危害を加えたる、と此の如しと雖も、上村艦隊の索敵行動の續行する以上、唯彼か日本海を横行するは、日本の交通に幾分危険とする所にして、朝鮮海峡以南に其効力を及ぼす能はざるなり、今や一方には旅順口第三次閉塞を决行し、一方には上村艦隊が日本海方面に行動す、日本が陸上に於ける活動果して如何なる狀況に在るべきや、是正に陸上戦を叙するの時機に達したるものなり。

第四章 第一目標方面戰

第一節 鴨綠江に於ける日露兩軍の作戰

露國は一方は旅順口^Bに、他方は鴨綠江^Aに、其軍隊を密集しあるか故に、日本の目標は第一に於て、之に對するものたるは勿論なり。而して海上權は已に日本の手中に歸し、其軍隊輸送に危險の虞なきに至りたるを以て、其上陸點より目標點に向ひ、其距離を短縮するを得、強大なる前進部隊は已に京城、仁川間の交通線を占領し、同時に他の諸港灣に上陸し、諸陣地を占領し得べき状況に移り、主力の集中に容易なるを得たり。露國側に在ては、此日本軍の兵力を、六万と推算せり。二月廿三日ロンドン、タイムスは、威海衛よりの電報を掲げ、仁川に上陸したる日本軍團は、三個師團より成り、其前進目的地點は平壤にありと推定せり。日本軍の活動、此の如くなる一方に於て、露軍は元來海陸聯合の上に立策せられたりし作戰も、二月八日の一撃、全く其計畫を破壊せられ、今や主として、陸上作戰に偏重せざるを得ざるを見るに至れり。其作戰の焦點は、今は全く鴨綠江岸^Aに在り、鴨綠江に於ける露軍は、他の部隊と



第三編 本紀 第四章 第一目標方面戰 第一節 鴨綠江に於ける日露兩軍の作戰 四三七

相隔離すること遠く、日本軍は海陸共同の利便を有し、茲に接觸するの利は、自ら日本に在るか如し。鴨綠江に對する、前進根據地として、鎮南浦の撰定せらるべきは自然にして其解氷期に達するや、大兵團の茲に上陸すべきや疑を容れず。二月廿八日に於て露軍の斥候は已に退却し、其偵察の結果、如何に日本軍の狀況を判斷せしや、クロバトキン將軍及び其參謀官は、韓半島に上陸したる日本軍を、其數四万と推算し、平壤に於ける兵力は、其目的は韓國を掩護し、鴨綠江に於ける露軍を牽制するに過ぎず、主力は尙ほ日本國に在りて、旅順艦隊の存狀の爲め、其出發を見合はせ居れりと推定せり。然るに定州に於ける、三月廿四日の前衛戰の勝利に依り、日本軍の鴨綠江に向へる前進を見るに至り、露國公報は日本軍を三個又は四個師團より成れりと報ぜり。

日本第一軍の任務は、明白に鴨綠江西北山系に於ける、露軍の諸陣地に存し、其先づ蹴破すべき鴨綠江の露軍に對し、集中し、江岸に於ける頻々たる小衝突は、敵の第十二東部西比利亞狙撃兵旅團の部隊なることを明かにし、尙ほ哥索後衛以外の兵力の存在しありて、偶露軍の作戰は、江岸に據守するに在るを示したり。元來、こゝに

據守するの有利なるや否やは、地形上の疑問なり、鴨綠江の水深に依て考ふるに、下流より溯航せば、海を距る五十哩、楚山に達し、こゝに急湍となりて、航行障くと雖も、其上流よりも、又海上よりも、其江岸を包圍するを得るのみならず、露軍根據地たる遼陽を距ること百二十哩、加ふるに道路至險にして不良なるか故に、鴨綠江に於ける露軍は、殆んど其體軀を無人境の莽上に横へたるの觀あり。此の如き前進陣地の危険は、露軍將帥の之を知得せざる筈なきも、其推算の疎漏を償ふの熟練方策を有し之に頼るの心、深大ならざるべからず。此頃、に於ける露軍の配置を見るに、浦鹽附近^D、ニコリヌク、寧古塔方面に於て、一個軍團の兵力を置き、奉天以南鴨綠江に對し、第二^E第三^F軍團を置き、哈留賓に新たに編成せられたる第四^G軍團ありしものゝ如し。敵帥の心中、未だ以て日本軍の攻撃點を推知する能はざるに方り、右に牛莊を暴露し、後に遼陽を虚ふして、鴨綠江に向ひ攻勢を取り、更に兵を韓境内に進むるの策を取る能はさりしなり、之れをクロバトキン將軍の報告に徴するに、日本軍展開線の延長は、其の兩翼を包圍するの狀況に移りたるを知りありしを見るべく、而して彼は更に日本軍が下流に於いて渡河せんとするの狀況を報したるに依れば、其の

危険なる状態は所謂彼れの兩脚を拘束したるに齊しかりしなり。タイムス記者は凱切なる批評を下して曰へり、「鴨綠江に於ける日本軍の展開韓國面よりせんとする大攻撃の迫害此兩者は露軍をして其交通線路と平行して其前衛を組織せざるべからしめ斯の如き位置の不便は接觸の行はるゝまで蓋し免かる能はざる所ならん」と。(タイムス四月廿八日批 評森氏譯一九六參照)要するに露軍の鴨綠江に據守せるは其危険なる前進陣地に據るものたるものに過ぎず日本軍は海陸共同働作に依りて其兩翼を包み之に痛撃を加ふるに在りたるが如し露軍の爲めには鴨綠江を捨て、其兵を遼陽に集結するか又は旅順の守備兵を合せ日本軍を逆撃するに在りしなり。いでやこれより之れが戦況を叙せん。

其一 鴨綠江に於ける露軍に對し日本軍の前進運動

讀者は當さに一たび其頭を回らして二月八日に於ける日本海軍の活動を想起せざるべからず。其第四戦隊は瓜生司令官指揮の下に敵艦を睥睨して仁川に上陸

したるとを記するならん。其二十四日小泉大尉は平壤に於ける兵站司令部守備の命を帯びて平壤に到着したり。是より先き二月十一日平壤に在る新莊領事は、義勇隊組織を發議し四十一名より成れる義勇隊を編成しありしが小泉隊の到着と共に之を解散せしも前面の警急に應ぜんが爲め更に之を召集し警戒を嚴にし、防備を勉め、牒者を放ち前面に於ける敵狀を偵察し敵騎八十三已に平壤を距ると一里半の地點に停止しあることを知り小泉大尉は萬壽臺に在りて命令を發し後藤少尉指揮の下に四名を附し將校斥候として義州街道に沿ひ敵の前進を偵察せしむ。天正に嚴冬峭風刀の如く馬鬣將に凍らんとするの時午前八時三十分並硯の鞍部に至り敵騎約二十騎の前進し來るに會し我は其任務上之と對戦するの不可なるを以て漸次退却せり。敵は驀然一鞭、勢疾風の如く其主力は後方に停止し、三騎は本道を二騎は右翼乾田を並躡電馳し來り相距ること僅かに二百米突時に一小哨は平壤を守備して七星門に在り此狀を望見し一令の下敵騎の頭上に一齊射撃を加ふ敵乍ち潰敗退却し我長驅して安州を占領せり。敵已に七星門外に敗れたり三月八日丸尾中尉偵察の任務を帯び三騎を從へ漸次

第二編 本紀 第四章 第一目標方面戰 第一節 鴨綠江に於ける日露兩軍の作戦 其一 鴨綠江に於ける露軍に對し 日本軍の前進運動 四四一

北向して博川附近に達す、乍ら敵三十騎の前進し来るに會し、寡兵奮闘、殺傷過當、敵遂に敗れ、北くるを追ふて博川を涉り、今や正に蹄を回へしつゝ、酒津に及ぶ頃、敵騎約四十、昌城方面より颯到し、側面より急撃を加ふ、今若し前きの敗兵之に合せば、其終に免るに途なきを察し、背進せしも、敵彈益急に、少尉以下僅かに身を以て脱かるを得しも、獨り田所一等卒、遂に後れて敵刃に斃るゝ。

斯くて安州を占領したる、日本軍前衛一部隊は、漸次鴨綠江に向ひ前進せんとし、敵前衛の一部は、已に前面に在るものゝ如く、其定州に在るべきは、殆んど地理上の示す所なり、義州と安州とは、其中間に定州の要區を置き、日本軍の一部隊の前進一目標として、之に達すると同時に、敵も亦こゝに在らざるべからず、當時後貝加爾哥索チ、ンスキー第一聯隊は、バツ

クロベトキン將軍の報告に曰く二十八日の衝突に於て將校五名重傷を、コサック騎兵三名は戦死し十二名は負傷せり、ミステンコ將軍は戦に臨み又三月二十八日附ミステンコ將軍よりクロベトキン將軍に電報せられたる戦報は露都に轉電せられたり、其の要領は定州附近に戦闘開始せられ露軍は遂に郭山に退却せりとあり、又日本の歩騎兵は勇敢なる抵抗を爲したる旨を述べ日本の損失は著大なりと信ずと記載しあり、露國側の死傷はアンドリエンコ中佐ステパノフ大尉バアシレット少尉ニコフ騎兵中隊長以下負傷者十二名死者三名なり又三月三十日午後二時二十分奉天發電デシノ一將軍の戦報に曰く三月二十八日朝日本騎兵に向ひ挑戰したるも其効なく依てミステンコ將軍はコサック六箇小隊を率ゐ定州に接近したり同處には日本兵一中隊及び一小隊あり執

ロン大佐指揮の下に、定州に在り、義州に至るまでの遞騎哨は、アルグンスキー聯隊、第一及第五中隊を以てし、日本軍の一部隊たる近衛聯隊の將校、斥候の南川附近に來るを見るや、之を射撃したり、我騎兵は之を北方に避け、其主力と合し、極力奮闘し頗る苦戦に陥りたるも、午後一時に至る迄、其位置を固持し、一時十五分騎

れも馬を下り附近の高處に陣を據へ居れりコサックは十字火を以て敵兵を家屋内に逼逐するの止むを得ざるに至らしめ日本兵三箇小隊は應援の爲め到着したるも、我砲火の掃蕩する所となれり右三箇小隊の一隊は潰散し且つ順序を亂して露山方面へ退却せざる可からざるに至り他の二箇小隊は僅かに血路を開き市内に遁走せり少時の後援兵として日本歩兵四箇中隊到着し我コサックは秩序整然退却せり日本軍の損傷は莫大なり多數の騎兵及び馬匹の我砲火に罹りて斃るゝを見たり露軍負傷將校四、ユサック十二、戦死三なり此デシノ一將軍の報告は其敵たる日本軍に關する露斷ありて自己の損傷を過少に對手の損傷を過大に報じたるものなり以後同將軍の報告は概れ此弊を免れず讀むもの心せざるべからず

兵二箇中隊、急を聞て、遼到し、東北二千米突に達し、猛烈なる射撃を加へて敵を壓迫したり、敵終に其支ふ可からざるに至るや、廓山方面に敗退し、我が歩騎兵の一部は之を追撃せり。此役戦死する者騎兵將校二、下士以下三、負傷將校二、下士以下十、歩兵隊には一の損傷し、敵の遺棄せし屍體、及遺棄物に徴すれば、少なくとも、我れと同等の損害を生ぜしや明かなり、露軍の戦報に依れば、負傷將校四、コサック十二、戦死三なりとせり。

日本軍は此役に於ける敵兵力を戦闘員八百九十人非戦闘員五十五、輜重車五十一なり。と測定し。露軍は始め日本兵一中隊及一小隊なりしも、三個小隊、應援の爲めに來會し後續兵としては、歩兵四個中隊來援したりと爲せり。

タイムスは此役に於ける、参加兵數に付き批評を下して、曰く、露軍の兵力中にアルグンスク聯隊兵後貝加爾州哥索にして貝加爾の南東地方に屬するものなり、此地方の聯隊は、第一、第二、第三の稱號なく各個特殊の隊號を有す、之に参加したるもの如く、一方に於て、ミスチエンコ將軍は六個中隊より成れるを云ひ、他方に於て大隊は下馬せしことを云ふも、アルグンスク聯隊は六個大隊より成るものにして、之が戰時編成は、將校下士卒を通じて九百を有するものなり。日本軍の所報に依れば、此隊を推算して六百と爲せり、日本軍の之を推算するが如きことなきか故に、編制上より其數を缺くこと三分の一なるを知るに足るべし。蓋し單に此隊を不備なりとの理由を以て、他の聯隊の兵數も亦編制未了なりと推定するは過早なるべきも、他の事實に徴して、其實數の存在に注意すべきなり、日本軍参加兵數は、露軍斥候が偵察したる算定、即ち一個大隊の馬匹百九十頭より成れることを見たり。

凡そ他國軍の戰時編制を知るは至難の業にして、其至難なる所以は後備に編入せらるゝ將校の數暈を得る方法即ち服役年限を短縮し豫備に編入せらるゝ數暈に依り、單に公表せられたる編制表に幾何の増加を見るべきや測り知るべからざるにあり。例せば、編制表に、依れば、一聯隊の兵力は二個大隊各一千人より成るより成ると明記するも、其國が已に訓練したる豫備將校下士卒を有する以上に、之に加ふるに員數に餘す所の現役將校を以てせば、實に一個の野戰聯隊を増員して、三個又は四個大隊と爲すことを得るのみならず、大隊の兵員を増加するを得べきなり。騎兵の馬匹大隊砲兵の砲門の如きも、此事例に従ふべきものなり。予輩は此一役に於て、三個の注意すべき要點あるを見る、其一は日本兵は、未だ曾て歐洲の陸兵と干戈を接せしことなきが故に割引を加へざるべからずと云へる論者が、幾分か算數を滿したることこれなり。其二は、鴨綠江前進の地歩を爲したることこれなり。其三は、第一戰の勝利は、國民の精神的要素の發現たるこれなり。

定州城外の小戦闘は是れ普佛戰役に於ける第一小戰に同じく、戰爭批評家は、之を以て後來大會戰に於ける最初の優劣判断材料の一なりとせり、既に予輩が武力測

定の節中に於て論ぜしが如く、コサツクの實力の豫想の如くならざるの一端を證明するものなり。

其二 鴨綠江に於ける日露兩軍の運動

日本軍の海陸共同働作——一般の戦況

日本軍の前進一部隊は、已に定州を占領し、追撃長驅して義州に達し、主力は二方面より義州に集中し、其兵力は三個師團(近衛第二、第十二師團)より成り、黒木將軍之が軍司令官たり。又細谷艦隊より分遣したる宇治、摩耶の二砲艦、二水雷艇、二武装汽船は、中川海軍中佐指揮の下に、龍巖浦に入り海陸共同的攻撃準備全く成れり。二十六日黎明、近衛師團の一部を以て九里島の敵を撃退し、之を占領し、第二師團の一部を以て黔定島を占領し、敵は悉く九連城方面に背退したり。九連城後方高地に於ける敵砲八門は、西湖洞附近を射撃し、又虎山高地に機關砲二門を現はしたり、元化洞高地に於ける我砲兵一中隊は、虎山高地に現はれたる敵の高等司令部の如きものに對し、三回の齊射を行へり。又九連城に於ける敵砲兵は、義州附近を砲撃し、

翌二十七日敵は時々砲撃を行ひしも、我は之に應射せず、二十八日近衛歩兵第四聯隊の二中隊は、偵察の爲め虎山に到り、一小隊を栗子園に派遣し、敵約三十其南端を防禦するを認め、之を撃退す、此時敵は楡樹溝東南端高地の砲臺より砲撃を行ひしも、何等の損害を加ふる能はず、九連城附近の敵の砲兵は、時々大角度の射撃を行ひ、其彈丸は九里島、義州、西湖洞、弘化洞、西方附近に落下し、攻撃準備作業を妨害し、夜間と雖も時に砲撃を行へり、而れども其砲力微弱にして何等の損害を我に加ふることなし、廿九日も亦時々砲撃を行ふも、其効力の微弱なること前日に異ならず、此日午後二時を以て右翼第十二師團は、水口鎮に於ける敵を撃退し、架橋を開始し、翌三十日午前三時之を完成し、直ちに渡河して午後六時漸く豫定の陣地に着き、野戰砲兵第二聯隊及重砲兵聯隊は、豫定陣地に到着したり。九連城北方及東方高地に於ける敵の砲兵は、午前十時四十八分、黔定島より中江臺に向へる、我歩兵斥候に對し、射撃を開始したるを以て、砲戰猛烈となり、十一時十五分に至り、敵砲兵終に沈黙せり、又馬溝東方高地に於ける、敵砲約八門は、九里島西方架橋點に向ひ、射撃を續行しつゝありしも、我砲撃に依りて、少からざる損害を受けたり、本流の架橋は、午後八時

を以て完成し、諸隊は續々虎山北方の高地に前進せり、一方に在て其分遣艇隊は、安東縣の下流に於て戰鬪に參與し、就中裝砲艇隊は、敵の砲兵及歩騎兵と激戦を交へ、敵約四百を撃退せり。

其三 鴨綠江岸に於ける敵陣地の奪取

九連城占領——蛤蟆塘の戰鬪

日本軍は直に鴨綠江岸に於ける攻撃準備を實行し、今や總攻撃を開始し、敵を撃攘するの場となれり。五月一日黎明、砲聲曉霧を破り、午前七時五分、楡樹溝西方高地に於ける露軍砲兵は沈黙し、同三十分日本軍各師團は攻撃前進に移り、展開約二里の延長に及び、猛進して緩河を徒渉し、頑強なる抵抗を撃破し、午前八時五分に至り、壘を陥るゝもの七鹵獲する所の砲八門に及び、尙ほ追撃を續行し、即ち八時十五分より九時に亘るの間に於て、九連城より馬溝楡樹溝北方に亘る高地點を占領せり。是に於て露軍は、九連城西北高地に於て、再び抵抗を試み、午後一時五十分より退却を始め、右翼隊(第十二師團)は十樓房に、中央隊(近衛師團)は蛤蟆塘に、左翼隊(第二

師團)は安東縣に向ひ、又總豫備隊は遼陽街道を前進し、午後六時には、安東縣より老古溝を経て、楡樹溝に亘る線を占領し、一方に於て午前十時、摩耶艦隊は安東縣下流に至り、敵の砲兵と激戦約三十五分の後、之を敗退せしめたり。是に於て蛤蟆塘附近に三面より敵を包圍し、砲二十門、其他鹵獲無數、捕虜將校三十、下士以下五百に及び、其軍團長ザスリツヂ師團長カウルパウルス將軍は負傷し、其他損害多數なり。クロバトキン將軍の公報に據れば、將校七十、下士以下二千三百二十四人なりと爲せり。右損害の大なるもの蓋し第十一、第十二聯隊にして、彼れの公報の一段、明かに其苦戦を證す、曰く、「是より先き速射砲を有せる一中隊を後衛より拔來り、同隊長はモラウスキー中佐の率ゆる、一隊の位置危きを認め、自ら其陣地を作りたり、而も其部下の半ばと馬匹の全部を失ひ、日本兵の十字砲火の下に、徒手大砲を他處に移さざるを得ざるに至れり、此時露國速射砲は、三万五千發を放ちたり、此の如き苦戦の間に、第十二聯隊は血路を開き、軍旗を全ふするを得たり」と云ひ、又「十一聯隊は大なる死傷を負ひ乍ら、更に二時間其陣地を保つことを得、激鬪の後、軍旗を携へて、峽谷を超ゆるを得たり、大佐一名戦死し、外に士官四十、下士以下二千を失ふ」と云へ

り。蓋し其砲兵の如きも、一日午後には於ける抵抗力の頑強なりしは、日本公報の一部之を證す。昨一日午後敵は私の追撃に對し頗る勇敢に抵抗を爲し、爲めに我軍の死傷は更に三百を加へたり。又此敵は最終の時機に至るまで奮戦し、其砲兵約二中队は人馬の大半を失ひ、遂に閉鎖機の要部を破壊し、白旗を掲げて降服せり。捕虜將校の確言によれば蛤蟆塘附近の戦場に於て、師團長カシタリンスキ、及狙撃歩兵第十一、第十三聯隊長、狙撃砲兵大隊長は戦死し、其他高級將校に死傷多し、敵は數回の打撃に依て、全く潰亂して退却せしもの、如しとあるを見る可し。日本軍の戦死將校五、下士卒二百十八、負傷將校三十三、下士卒七百八十三、總數一千三十九を算す此役敵の参加せし兵力は、日本公報に據るときは、狙撃歩兵第三師團の全部、同第六師團の第二十二、第二十四聯隊とミスチエニコ騎兵旅團砲約四十門、機關砲八門なりとし、露の公報に據るときは、其兵力明確を缺き且つ其數著しく少數なり、蓋し敵軍が其兵力を報告するの實量は、恐くは真正にあらざる。ロンドン、タイムスは、本戦参加の露軍兵數を論じて曰く、五

クロバトキン將軍の報告に曰く

五月一日戦場に關する本日附のザスリツア將軍の報告に依れば該戦場の經過左の如し第十二、第二十二聯隊及第六砲兵旅團の第二、第三中隊は戦場に參與せり同戦場は夜州に於ける

月一日の戦場に參加したる露軍の實數は歩兵十六個大隊、野砲四十門、機關砲八門なるが如し、勿論、軍司令官ザスリツア將軍司令下に屬する軍隊にして、附近に存在せしものあり、日本は海軍の佯攻を假りて、海岸よりミスチエニコのヨサツクを牽制したるものならん。日本公報に示す所の東部西北利歩兵第二十三聯隊、及第二十七聯隊は上陸地點、又は交通線路を所持し居たるものにして、參加せざりしが如し、要するに參加兵力は各三個大隊より成る、東部西北利歩兵第九第十、第十一、第十二、第二十二、第二十四聯隊の一個大隊、野砲砲兵五個中隊各砲八門

第二編 本紀 第三章 第一日標方面戰 第一節

鴨綠江に於ける日露兩軍の作戦
其四鴨綠江岸に於ける敵陣地の奪取
九連城占領と蛤蟆塘の戦場

攻城砲及遠距離より野砲砲の我右翼に對する猛烈なる砲撃を以て開始せられたり暫時沈靜の後戦場は再始せられ九連城に於ける我が主力陣地の左翼及ボチエンスキに於ける我陣地に對し激烈なる攻撃を加へ又鴨河の對岸に於ても少數の日本軍は銃砲隊を開始せり防禦軍の地位は漸次不利に趨きたり正面及兩側面より砲撃を受けたるボチエンスキに於ては特に然りとす日本軍の巨砲三十門ボチエンスキに於ける我が砲兵隊に向つて砲撃せり同陣地の砲兵隊は敵の山砲を沈黙せしめたる後其砲火を轉じて日本軍の歩兵を攻撃せり而して我が歩兵の打撃より退却せるが爲め砲兵隊も亦陣地を變更するの止を得ざるに至りし迄は我損害少かりしなり日本軍は我が砲火を冒し我が軍隊に向つて經えず銃砲攻撃をなし日本兵の死傷河の淺瀬に累々たりボチエンスキの攻撃と同時に九連城の我が左翼も攻撃せられ露軍艦隊は日本軍の縱射を被り之を棄棄せざるべからざるに至れり我が豫備隊は能く第一戦線に加りて長時間に渉り陣地を維持することを得せしめたり最後に於て應援隊の全部は砲撃線内に入れり然れども其主力豫備隊との距離大なりしが爲め機に及んで其前進部隊に送ること能はず而して我軍は九連城後方の主力陣地を退却せり日本軍は之に向つて砲火を集中し其占領したる高地を下りて以て我砲兵隊の砲火を冒して前進することを欲せざりき日本軍は新に艦隊を擁り我陣地に向て猛烈なる砲火を加

機關砲兵一個中隊砲八門工兵一個大隊兵力不詳の哥索枝隊ありしものにして其實力二万なりと測算すべきが如し。若し三月廿八日定州に於て日本兵と衝突し襲撃計畫其効を奏せず義州を経て鴨綠江に退却したるミスチエニコ將軍のゴサツク及其餘の聯隊にして参加したりとせば其數三万を算すべく黒木將軍の報告と一致し即ちザスリッヂ將軍の指揮の下に在る全兵力を指示するものなり。と

又日本軍の運動と陣地との關係を評して曰く日本軍の運動は、一は京城より他は鎮南浦より容易ならざる行軍を以て

へ以て我左翼をしてテネゴウの方向に轉せしめたり主力備隊に屬する第十一聯隊の二個大隊及び第三砲兵旅團の第三中隊がウフンホーに向つて砲撃線有する陣地を占領し以て我が非常困難せる前線及び負傷兵をして退却することを得せしめたり

第十一聯隊の一個大隊は敵の爲め數次其左右翼を砲撃せられたるが該大隊は銃鎗を著け進路を開く始め喇叭手の先導にて前進せり然れども日本軍は接戦を避けて退却せり該聯隊の先頭に於て十字架を佩せる僧官は銃彈二個を受けたり第廿聯隊の退却することを得たるは偏へに鎗銃突撃を日本軍に加へたるに由るものなり

第十聯隊の到着するに至りて全軍は總て退却することを得たり第十一及第十二聯隊の損害は多大なり然れども詳細は未だ詳ならず第十一聯隊に於てはウミンク大佐ドメツチ中佐及ライウスキー中佐戦死し第十二聯隊に於ては中隊長のみにて九名死傷者を出せり第六旅團の第二及第三砲兵中隊は人馬を失ひたるを以て先づ其砲を破壊したる上之れを放棄するの止むを得ざるに至り同一の理由に依り右の外別に砲六門及片面砲八個は之を運ぶこと能はざりしを以て砲を收容すること能はざりしなり今日に至り將校十四名以下八百の負傷者は不取放風風城病院に收容せられたり追て彼等を他所へ移すべき手續を定めたり日本騎兵隊は風城の東南に現はれたる砲二門を

江岸に達し交通路の諸地點に於て其展開面を以て敵に對し露軍に逼りたるものゝ如し。之を露國側の所報に徴するに敵日本軍は遠距離上陸地點に行動するものゝ如しと云ひ又敵日本の海軍一枝隊は江口及海岸の諸地點に行動すと云ひ露は一地點に其防勢を布き敵の行動に注意するの專一なるを得ず即ち上流に於ける日本軍の行動に其注意を傾倒する能はずクロバトキン將軍は勿論是等の情報を接手したるべく予警は直接將軍の意見を叩き之を之を聴取すること能はずと雖も日本軍の運動の遲緩なるを以て其己の兵力の持久するを得

有する二個中隊の之を遊撃せるを以て致て我に接近し來らざる支那苦力をして負傷兵を風城に輸送すること難事に屬せり但し騎兵隊の借り入れたる兩車輪の荷車及荷馬も亦此輸送に用られたり然れども負傷者は多くは皆徒歩し戰友の援助を得て廿四時間内に風城に達せり

又師團長の報告に曰く余は余の指揮せる軍隊が五月一日優勢なる日本軍隊と苦戦したる事情を報告するを以て余の義務なりと思考す四月三十日早朝日本軍は我が左側より攻撃を開始したり敵は其の前夜を以て虎山の高地を占領したるを以て余は同地を防禦せる第廿二聯隊に渡りボチエンスキーの陣地に退却することを命じたり同日の朝九連城の我が戦線全部に對し義州より非常な猛烈なる且長時間の砲撃開始せられたり余は日本軍が砲撃の後進撃を試むべきを豫知したり此砲撃に於て日本軍は二千發の彈丸を放射したり余はザスリッヂ中將より敵に應戦してボチエンスキーの陣地を維持すべき旨の命令を受けたり我が左側は第廿二聯隊の二箇大隊の第三中隊によりて防禦せられたり日本軍は午前五時進撃を開始し少くとも一師團の兵を行進せしめ此の歩兵は砲隊を以て行進し大なる損害を受けたるも渡海場を通過し三十六門の野砲及び攻城砲に暴露せられたる我が陣地を攻撃し遂に之を占領したり正午頃に至り余は日本軍がテネゴウに陣せる第廿二聯隊の大隊を撃破し我が左側に轉じつゝあるを確か

鴨綠江に於ける日露兩軍の作戦
其四鴨綠江岸に於ける敵陣地の形
取一九連城占領し給嶺塘の戰闘

るものなることを感し、又側面轉回の容易なるを見、優勢なる敵軍に對し、危險なる陣地に暴露するは、策の得たるものにあらざることは、其胸臆に往來したるべく、將軍は必らず可及的長く、日本軍の進攻を妨害せんことを欲し、ザスリツデ將軍の指揮下に於ける、三萬の精銳は能くするところあるべく、萬一鴨綠江守る能はざる場合には、其退却は之を全ふし得るを信したるならん、是に至りて二個の決定を生ず、曰く敵を摩天嶺に阻止すべし、曰く若し然る能はざるときは、遼河平原に於て守持すべき諸陣地を擧て之を抛棄せざるべからず、而して敵師が目算

めたり午後一時に至り我が左翼には第十一聯隊の二箇大隊及びモラウスキー中佐の指揮する砲兵中隊増援せり此の諸隊はザスリツデ中將の有せる豫備隊より派遣せられたるものにして第九第十の兩聯隊がサコツザを出發するまで陣地を固守すべき命令を受けたり余は兩面より敵を射撃する爲め後方に在る高地を占領すべきことを第一聯隊に命じたり余はモラウスキー中佐の砲兵中隊を豫備とし第十二聯隊砲兵第三中隊及び連射砲隊に第十一聯隊掩護の下に退却すべきを命じたり余が參謀長は後衛を率ゐて其の陣地に退せり午後一時日本兵は第十一聯隊の陣地に近づき我が砲兵第三中隊は敵の十字砲火に堪えず日本兵より遠からざる所に陣を張り砲撃の終る迄同所に留まりたり時に同隊長モラウスキー中佐戦死す之より先き連射砲を有せる一中隊を後衛より援來り同隊長はモラウスキー中佐の率ゆる一隊の位置危きを認め自ら其陣地を作りたり而も其部下の半ばと馬匹の全部を失ひ日本兵の十字砲火の下に徒手大砲を他處に移さざるを得ざるに至れり此時露國連射砲は三萬五千發を放ちたり此苦戰の間に第十二聯隊は血路を開き軍旗を全ふするを得たり第六旅團の第二中隊は別路を取り豫備隊に合せんと試みんとせし馬匹の半ば山路を登る能はず遂に元位置に歸り敵の攻撃を受けたり又第十一聯隊は大なる死傷を負ひ更に二時間其陣地を保つことを得渡關の後軍旗を携へて峽谷を超ゆるを得たり大佐一名戦死し外に士官四十下士以下二千を失ふ（露紙并に公報集（新橋堂出版）參照）

にし依ればず將軍此の如き場合に會するも其諸陣地の保持を以て困難なりとせざりしか如し、一方日本軍は、戰前の一週内に、已に其兵力を義州城附近東南地點に集中し、敵情偵察に勉めたりしや明かなり。試みに露軍の陣地を、最も正確なる地圖に依て通關せんに九連城を以て中心とし、南に娘々城、安東縣北は馬溝、榆樹溝に及び延長二十哩に達す、中央陣地たる九連城は標高約百八十呎にして、鴨綠江の對岸韓國方面を瞰制し、鑿河支流は、此地點に於て本流に合し、是に於て江幅四千乃至七千米突に達す、中央の洲嶼に依て、本流は三分す、其中流は舟を行るべく、左右は徒渉するを得、水深の度僅かに腹部に至る、恰も本戰開始の時期に於ては、鑿河は徒渉するを得べき狀況に在りて、而かも其地點少からず、虎山の高地は、右岸合流の地點にありて、露軍の地點は、其高地より瞰制を受くるの不利の爲め、不安の狀態に在り即ち北方栗子園、馬溝、榆樹溝に至る露軍の左翼は、此高地よりする瞰制に脅威せられざるべからず、此高地面に於ける露軍第二十二聯隊の一部は、カッシンダリンスキ、將軍の指揮下に在りて、此地點を占領し、其右翼面は安東縣附近より、其南方に至る地點の第十一聯隊を豫備とし、砲兵二個中隊を有する、第九第十兩聯隊之を保

持し其初期に當りては、廣く其前面に砲兵を配置したるもの、如し、而るに日本近衛師團は四月二十七日より廿八日に亘りて、九里島を占領し、第二師團は露兵を驅攘して中江臺に涉り、露國の中央陣地及左翼は此兩島よりする日本軍の銃火を被ひり、注意は専ら之に傾けられざるを得ざるに至れり。一方に於ては、安東縣附近及下流に於て、日本小艇隊の攻撃を受け、其砲兵は沈黙するに至れり。露軍は其前面に於て、脅威を受け、巧妙なる牽制に依りて、日本軍攻撃の意圖果して那邊に在るやを知る能はざる状況に在りたり。五月一日の戦に先つと數日の夜間に於て、日本軍義州の西南方、江の左岸に於て、巧に其存在を隠蔽したる砲門の据付を準備せり。此等の地點及洲上には、近衛第二師團の野砲廿四門以上、重砲榴彈砲若干門を包含せる砲兵大部隊を置き、以て露軍の中央及左翼を猛射するに備ふ。第十二師團は四月廿九日を以て、架橋を水口鎮に施し、翌朝に至りて之を完成し、此日に渡河し、午前十時義州附近に於ける砲兵は發火を開始し、午後五時に至り、九連城に於ける中央陣地を砲撃し、其牽制力を遙ふし、危険なる第十二師團の運動の爲めに妨害を受けること僅少なを得たり。且つ第十二師團の前進に依り、第二十二聯隊

を率ゆるカッシンヌスキー將軍は、右岸に退却するに至れり、又其地點に架橋せる近衛師團は渡河して、露軍左翼の吃緊地點たる虎山に達したり。又海軍艇隊は江の下流に在りて、其牽制を續行し、又近衛師團に續て前進せる第二師團は、其強大なる枝隊を洲上に存置したり。此日の夜間に於て、日本軍の大部は露軍左翼に痛撃を加ふべき適當の位置に就き、強大なる砲兵威力を準備したり、露軍に於てカッシンヌスキー將軍は、作戦上正當なる見解を把持し、陣地保持の命令を受領し居りたるや明かなり、第二十二聯隊の三個大隊を以て徒涉地點を防ぎ、砲兵第六旅團に屬する第二、三中隊及機關砲若干は之を掩護し、以て日本軍を防止せんとす。後方丘陵には、第十二聯隊を置き、五月一日黎明、日本軍第十二師團は、其砲兵及義州に於ける砲兵の砲火に掩護せられ、四哩を展開して徒涉地點に蔭進し、其徒涉上の必要に依り、展開面を收縮し、縱隊と爲りて徒涉したり。其損害を顧慮せず、右翼端は二十二聯隊の左翼を撃破したり。露軍の側面は、日本軍の轉回を受け、危険の状況となり、苦戦すること七時間に亘り、正午頃カッシンヌスキー將軍は、第十一聯隊の二個大隊及砲兵第三旅團の第三中隊をして赴援せしめ、尙ほ安東縣の南部

より第九第十兩聯隊をして之に合せしめ得るまで其陣地を失はざらんことを欲したり。第十一聯隊及ムーラウスキイ中佐の率ゆる砲兵部隊は能く第二陣地を支持し以て第十二及第二十二聯隊の退却を全からしめたり。是より先き第十二師團の左方より渡河したる近衛師團と第十二師團とは相合して第十一聯隊ムーラウスキイの砲兵部隊を包圍し第十一聯隊は多大なる損害を被れり午後二時に至るまで苦戦を繼續し第十聯隊の第一大隊の來援に依りて退却するを得たり。又砲兵部隊の勇戦は大に稱すべく馬匹の如き殆んど全滅したるが故に其砲門を喪失したるは必しも愧つべきにあらず近衛師團の後方に於て渡河し安東に向て進軍したる第二師團は目標として陣地に據れる強大なる部隊ありと推定したるものなるべし第二師團にして更に右翼に行動し敵の左翼に其力を用ひしならば敵の損害は一層甚大なりしならん。之を要するに本戦を批評するに當り露軍高等司令部に於ける指揮官其宜きを得ざる一事の外は兩軍の對手的行動は相匹儔し得たるものなり。此敗戦の災害は其責任の主としてクロバトキン將軍に歸せざるべからざるは必然なり同時に鴨綠江軍に於ける諸將も亦其責任を有せざるべ

からず三十日夜間に於ける日本軍の側面轉回を行へること之に對するカッシユタリンスキイ將軍の左翼砲兵力は僅かに六個中隊なると日本の大部隊の漸次徒渉し得べき地點に接近し來れること左翼の敗戦に全線の敗因を來たし潰敗を免るゝ能はざる危険あること等は已にザスリツデ將軍の知りあらざるべからざる所なり。而かも其危険なる状態に對し何等の行動を取らざりしは何ぞや砲兵二個中隊若干の機關砲歩兵六個大隊を有する其部隊をして後方に二個師團及強大なる砲兵部隊を有し十二個大隊より成る第十二師團に對し七時間の苦戦を敢行せしめ有効なる援助を與ふる能はざりしにあらずや第十二師團の攻撃力の強大なるは勿論なりと雖も歐洲に於て二個師團の日本の精銳に對し之と相接し之に耐たる如き六個大隊の兵更にこれなかるべしとは正當の評言なり何となれば是れ不可能に屬する事態にして至大難事を行ひ其効を得ざりしと云ふの故を以て之を難論すること能はざればなり。日本軍已に其左翼側面に轉回せり勝敗の數已に定まり而かも其保持すべき位置に立ちて第十一聯隊及砲兵中隊の防戦に力めたるは假令其終に近衛師團の威力に壓迫せられたりと雖も人力を以て爲し得

べき限りは、已に能く之を盡くし、能く其更に加はるべき災害を滅却したるものなり。唯露軍高等司令部の能力は、實に予望をして寒心に堪えざらしむるものあり。露國將帥をして敗戦を免るべからざる位地に其兵力を配置するの愚を再せざる限り、兵力假令同數なるも勝算なきものたり。又假令、更に強大なる兵力を得るとすも、未だ勝利たるべき理由を發見すべからざるなり。日本軍將帥の材幹指揮組織等皆批評以上に超出す、其軍事上の機關秩序よく敏轉する猶ほ時辰機の如し。砲兵の優勢砲威力の優大とに依り、砲術は單に批判すべからずと雖も、歩兵と砲兵の行動の連絡上、其材能は躍然として活動するを見るなり。又其架橋作業の巧妙なるや、英人をして、チユゲラ深溪に於ける戰術に顧みて、颯然たるなき能はざらしむと。

尙ほ終りに鴨綠江渡河に就て一言せざる可からず、戰術上河川防禦は、河川に沿ふて監視兵を置き、後方の兵の主力を集め置き、敵軍の半ば渡るを待つて攻撃するを以て原則とす。又河川攻撃は、架橋點を秘し置き、一部隊を攻撃せしめ、以て敵を牽制し、巧に渡河するを以て原則とす。日本軍の動作は、能く之が原則に符合して遺

憾なき者なり。即ち第二師團をして牽制の任に當らしめ、巧みに左岸より漸次渡河し終れり。攻撃に付て、今日如き小銃の精銳なる場合には、是非共砲兵をして陣頭に立たしめざるべからず、故に彼我砲兵の優劣に依りて、勝敗は茲に分るゝ者とす。露國の速射砲は佛國の夫れに酷似し居り、佛國は目下世界にて第一優物なりと稱せらる、佛國は中隊四門編制なるも、露國は六門編制となり、一門一分間に二十發を發射することを得ば、中隊にて一分間に百二十發の割合なり。故に如何に之れが抵抗力の大なるやを知るべきなり。然れども佛國の速射砲は、少しく重きに過ぐるの缺點あるを免れず。日本軍右翼隊は敵の鎖約地たる最も高地に在る楡樹溝の方面の敵を沈黙せしめ、續いて歩兵は九連城に向て攻撃を爲したるものなり、此の鎖約地なるものは、其附近に於ける最高地にして、兵力の集めある所なるを以て、此地を落さるゝときは、其附近は防禦に堪へざるに至るべし。日本軍は此鎖約地を陥れたるを以て、露軍退却部隊を收容する爲め最後の抵抗線に引上げたり、故に日本軍は強烈に之を追撃し、蛤蟆塘附近にて三面より之を攻撃し、終に敵は退却するの間なく敗退し、援護の任にある收容隊も之を支ふる能はずして退却した

り、故に其結果安東縣より老古溝を経て梨樹溝に至る線を占領したるなり。

第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標)：旅順包圍

圖豫備戰：(即固定性目標及浮動性目標)

第一節 其一般經過

五月一日を以て、日本軍の一大部隊たる黒木軍は其第一目標たる鴨綠江に於ける露軍を撃破し、一方海軍に於ては、旅順殘存の艦隊の手足を拘束せん爲め、第三次閉塞は實行せられ、第二軍は五月五日を以て第三艦隊掩護の下に遼東半島に上陸し、恰も黒木軍が鳳凰城を占領するの日、即其翌六日を以て普蘭店を占領し、敵の旅順連絡を斷ち、翌七日には三十里堡に進出し、鐵道を破壊し、此日を以て黒木軍の一部は寬甸縣を占領し、十一日を以て第一軍第二軍の連絡成り、第二軍は十三日を以て普蘭店東北鐵道を破壊し、十六日十三里台を占領し、十九日大和尚山西麓肯金山に戦ひ、此日野津軍は大孤山に上陸したり。是より先き第三艦隊が第二軍の上陸を掩護しつつあるや、大密口の掃海を強行し、宮古艦及水雷艇一隻の沈没の厄を見、又敵艦監視中戦艦初瀬及八島は機械水雷に罹り、巡洋艦吉野は春日と衝突して沈没

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標)：(即固定性目標) 第一節 其一般經過 四六三
及浮動性目標

するの厄を生じたり。然れども海軍の牽制動作は其功を奏し、蓋州角砲撃の如き、間接に野津軍の上陸に資する所少からざりしを見るなり。五月二十一日黒木軍の一部は、寬甸東北約三里に戦ひ、二十六日第二軍は南山を陥れ、旅順包圍豫備戦を遂げ、轉じて李家屯に戦ひ、六月七日黒木軍の一部、賽馬集を占領し、其の一部は七日大孤山上陸軍と連繫を保ち、岫巖を占領したり。五月二十三日封鎖宣言を發したるまての時期に於て、日本の三軍團は已に並頭行進の状況に在り。其所謂南山攻撃は、即ち旅順攻撃の豫備戦たることは前にも述べたるが如く、南山攻撃以前に於ける海軍は、主として其分遣隊を以て黒木軍の左翼を援け、同時に奥野津兩軍の上陸を便せん爲め掃海封鎖に勉めたるや明なり。即ち對旅順海陸共同行動以前の行動は、博く三個軍の安固を計るが爲めなり、故に予輩は此一時機を限りたる海軍の行動即ち齊しく三軍の頭上に係りたる海軍の行動を、一紀事として掲げざる可からず。而して金州戦後に於ける、海面状況は凡て之を旅順包圍戦内に細記することなし、こゝには南山戦後三軍の攻進を記せざる可からず。就中奥軍は十五日得利寺に大に敵を破り、二十二日熊岳城を占領し、黒木軍の一部は七月二日敵の逆襲を

撃退し、城廠を占領し、八日野津軍は仙家峪を襲ひ、三道河北方高地を占領し、分水嶺に戦ひ、黒木軍は摩天嶺に敵の猛烈なる逆襲を撃退し、奥軍は蓋平を占領し、野津軍は仙家峪を占領し、中旬に亘り、黒木軍は二たび摩天嶺の逆襲を撃退し、奥軍は大平嶺の陣地に夜襲して之を奪ひ、右に大石橋、左に營口を占領し、野津軍は盤嶺を攻め進んで柞木城を占領せり。八月上旬黒木軍は榆樹林子様子嶺の險に激戦し、敵軍團長ケルレルを斃し、遼陽方面に前進し、奥軍は海城及び牛莊一帯を占領し、野津軍は拆木城より遼陽方面に前進し、三道並進、漸次遼陽に薄る、八月二十五日を以て攻撃を開始し、九月四日全く遼陽を占領したり。蓋し遼陽は敵が哈爾濱より南下し來り、全滿洲の露軍を指揮する、策戦根據地として、日本の移動的主目標となりしものなり。

第二節 第二時期に於ける日本海軍の運動

予輩は今や日本軍の遼陽方面に前進する所の状況を叙説せざる可からず、之れが順序として、此の時期に於ける海軍の行動を概述せざる可からざるを見るなり、何

第三編 本紀 第五章 遼陽方面前進戦(即移動性目標)…… 第二節 第二時期に於ける日本海軍の運動 四六五

旅順包圍豫備戦……(即固定性目標)及浮動性目標

となれば、此の時期に於ける海軍の行動は、主として上陸軍の掩護に任じたればなり。日本海軍の第三艦隊は、九月四日其集合地を發し、五日午前四時三十分遼東半島の前進根據地に到達し、第二軍の上陸を掩護せり。陸上には敵の監視兵らしき者數名、沿岸丘上に居るを認めたるを以て、少時之を砲撃したる後、野元海軍大佐の率ゆる陸戰隊の上陸を命じたるに、時恰も干潮に會し、端舟陸岸に達する能はざる爲め、皆身を躍らして海中に入り、水深臍に達する所を、約千米突の間を徒涉し、午前七時前二十二分陸に上り、直に前進し、遂に一彈を發せずして高地一帯の線を占領し、日章旗を其絶頂に樹立せり。是と同時に、赤城、大島、及鳥海諸艦の上陸點側方の陸岸に接近し、牽制行動を探り、赤城は百餘名の敵兵を發見し、直に之を撃攘して、其三を斃したる者の如し、陸軍輸送船隊第一梯團は、午前八時五分日章旗の高地に翻るを見て、直に揚陸を開始したり。五月十二日午前七時四十二分各艦大密口沖に達し、列に就き、嚴島、日進、宮古は陸上の威嚇砲撃を行ひ、第二、第六、第二十、第二十一の水雷艇四隻の艇隊は、海面の掃海を開始せり。第十二水雷艇隊は十一日夜、旅順口封鎖に従事し、十二日午前八時三十分、大密口外に來り會し、直に測量に従事しあり。

しが乍ち陸上に敵の歩兵約一中隊騎兵約五十あるを發見し、之を砲撃々退し、敵は二三の監視哨を止め、動作を候ふ者、如く敢て發砲せず、第四十七、第四十四の兩水雷艇は、大密口内西岸に沿ふて敵狀を偵察しつゝ、掃海を行へり。然るに大沽山半島、八三〇呎山の北北西山麓を通過する電線を發見したるを以て、砲撃掩護の下に、海軍少尉堀田文雄は下士卒四名を率ひ、艇用端舟にて上陸し、電柱五本を破壊し、其電線を奪ひ歸れり。土民に就き大沽山の麓に九十五徐家山方面に一百(？)尙ほ其内方に一千の敵あることを聞知し、煤密の東方約二千五百米突に進航して、陸岸を砲撃せしに、徐家山と五五〇呎山との中間より敵の歩兵約二百現はれ、前進し來るを以て、其近接を待ち、砲撃せんとせしに、敵は海岸を距る數百米突の地物に據り、敢て前進せず、暫時にして敵の騎兵十一、煤密の南西方約二千米突に現はれたるを以て、之を砲撃遁走せしめたり、我に死傷損害なし。宮古は深灣に進入し、ロビンソン角の北西八〇〇呎山に敵の哨所あるを發見し、之を砲撃破壊したり、敵は、其後方に約十小隊伏在し居りたるも、共に狼狽遁走せり。第四十八號、第四十九號の兩水雷艇は、大密口東岸に沿ふて掃海中、午前八時、黒嘴子の南々西二分一西約八鏈の地に於

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第二節 第二期に於ける日本海軍の運動

旅順包圍戰(即固定性目標) 及浮動性目標

第二節 第二期に於ける日本海軍の運動

四六七

て敵の機械水雷を發見し、百方之が爆沈を勉めしも其効なきを以て、艇を後退せしめ更に爆沈を試みんとして作業中、正午過二十七分、該水雷俄然猛烈なる爆發を爲し、爲めに第四十八號艇は兩斷し約七分時にして沈没の不幸を見るに至れり。各艦は直ちに救助艇を出し、附近にありし水雷艇と共に、其救助に盡力せしも終に十四名の死傷者を出すに至れり。艦隊は午後六時一旦作業を中止して、集合地に歸航せり。第五戰隊及第二水雷艇隊(第四十五號艇を缺く)は、五月十四日早朝大窰口沖に至り、我艦隊掩護砲火の下に、聯合掃海艇隊を放ちて掃海を續行す。敵は十二日ロビンソン角九〇〇呎の高地に在りたる監視哨を撤退したる如くならずしも、大沽山北東六三〇呎山の北東測に新に假設砲臺を急造して野砲約六門を備へ、又同山の東側に掩堡を設け、歩兵約一中隊を配備する等、應急防備を努めたるもの、如く、終日頑強なる抵抗をなせり。此日掃海艇隊は、終日敵の機械水雷敷設面内に在て、敵の砲火を冒し能く其任務を遂行し、水雷五個内三個を撃沈し他の二個を爆沈すを破壊し、又我艦隊の砲火は、陸上の敵に多少の損害を被らしめたり。然るに午後四時三十五分、作業を中止し掃海艇を收容せんとするに當り、敵の機械水雷宮古の左舷

艦尾に觸れ、轟然爆發して船體に大破を被らしめ、死傷者廿四名(内戰死下士卒二)を出し、船體も亦廿三分時の後沈没するに至れり。(宮古は通報艦にして排水千八百噸、速力二十ノット、大砲十二門、水雷發射管二門を有し、明治三十年吳にて進水し、艦長は中佐柄内會次郎なり)第五戰隊並に第六水雷艇隊(第五十六號艇を缺く)は十五日大窰口に至り、掩護射撃の下に掃海を決行せり、陸上に於ける陸軍の防備は、野砲二三門を増加したる外、前日と大差なく、屢ば野砲及小銃の一齊射撃を以て作業に妨害を加へしも、一の損害死傷なし、本作業中敵の機械水雷八個を發見し、之を破壊す内五個を爆發したり、發見せし水雷の位置より判斷すれば、露軍はロビンソン角と沙碇との結線上に不規則に三線の水雷を敷設せしもの、如し。此日午後一時四十分頃、第三戰隊は旅順口封鎖の任務より歸航中、山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ、春日は吉野の左舷艦尾に衝突し、浸水甚だしく吉野は終に沈没せり、又初瀬、敷島、八島、笠置、龍田は此日午前十一時頃旅順口沖にて敵を監視中、初瀬は露軍の水雷に罹り、先づ舵機を破られ、更に第二の水雷に罹り、終に沈没せり。敷島、八島、笠置、龍田等にて梨羽中將中尾大佐以下三百名を救助收容せり。已にして八島又大爆聲

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標)…… 第一節 第二期に於ける日本海軍の運動
 旅順方面前進戰(即移動性目標)…… (即固定性目標) 四六九

の下に同じく水雷に罹れり、敵の驅逐艦十六隻旅順口内より出來り、日本艦隊を追尾せしが會々其地に來し明石、千代田、秋津洲、大島、赤城、宇治及高砂は各艦と協力して之を撃退し、初瀬生存者の收容を果すとを得たり。八島は未だ沈没せざるを以て、三笠之を曳き行きしも、二時間の後遂に沈没せり。夕刻に至り日本艦隊は旅順口沖を去り豫定行動に移り、渤海灣に侵入し、十六日正午東塔山附近に近づき、蓋州角附近一帯の沿岸を偵察し、陸上多少の露兵あるを認め、之を砲撃す、露兵は直ちに遁走せり、十七日午後日本艦隊の一部は掃海を行ひ、砲艦は灣頭に進み、鐵道架砲橋を砲撃し、恰かも此時通過せんとする軍用列車、其他露の建設物を砲撃す、五月十九日細谷第三艦隊司令官は、扶桑、平達、筑紫、濟遠等を率ひ、陸軍輸送船隊を護衛し、午前六時新上陸地點に達す。先づ軍艦營城をして、陸岸の搜索砲撃を爲さしめ、續て武光海軍大尉の率ゆる陸戰隊をして上陸せしめ、敵の抵抗を受ることなく、午前八時目的地點の占領を遂げ、國旗を其高丘に樹立し、直ちに陸兵の揚陸を開始したり。五月廿日午前一時、砲艦の一隊、及驅逐艦水雷艇の數隊は、旅順口に迫り、要塞の猛烈なる十字砲火を冒し、強行偵察を試み、其目的を達し、天明に至り引揚げたり。砲艦

隊に多少の被彈ありしも、著しき損害なく又死傷なし。

以上此時期に於ける日本海軍の行動は、一方は遼陽に向ひ、他方は旅順を包圍すべき攻勢作戰の進捗を立證する者にして之を第二期の海軍の行動と爲す。唯行動中讀者の攻究すべき重要なものは、初瀬、八島の沈没なり。明治二十七八年役に於ける、快速巡洋艦として黃海に其雄威を揮ひたる、吉野の沈没惜むべしと雖も、初瀬、八島は僅に惜むべきの單一問題ならず。實に公海に於ける水雷問題と、他方に封鎖任務に關する船艦用法問題とを有するか故に、特に茲に一言するの必要あり。而かも其必要は、外間の

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標)…… 第二節 第二期に於ける日本海軍の運動

初瀬艦は東郷司令官より旅順港外の強行封鎖を行ふべき命令を受け五月十四日午後某地點を出發し、數島、八島、笠置、龍田の四隻を率ひ高砂亦他の特別任務を帯び同航して翌日其目的地たる旅順港沖に達し、港頭より十連の沖合に於て最初一回行進し更に引返して二回の行進を爲さんとせしに天氣快晴にして更に雲影を認めざれども風力強く潮流急にして機軸自由ならずりしも猶進んで航行中午前十時五十分頃なりき同艦にては敵前に在るとなれば總ての機関用意を爲し當直員は悉く上甲板に在り其他は一同各部室に在りしが突然甚しき激動を感じ中甲板士官室に在る者は少しばかりヒンと持上げられたり是に於て一同始めて機械水雷に罹りたるを覺り室外に飛出し副長有森中佐は中、下甲板總員を指揮し防水に從事し孔穴を堵塞し海水を止めたり艦長航海長とは直に艦橋に至りて先電報を以て機關部の模様を問ひたるに機關室には故障なきも左舷の機關は動かさず航機室には海水侵入して航機の使用困難なる旨の答あり因て航海長は梨羽司令官に報告したり此時恰も笠置艦は鮮生角の南東に龍田は老鐵山の南に在り司令官は笠置に來れと信號したれば笠置は全速力を以て進航し來れり折りしも左舷の器械は二回程掛けられしも潮流の急なる爲め充分廻らず艦體は東に向ひ居りて左舷より南風強く吹きて運轉全

謬見を斥破するに在り。モーニング、ボストンハ以爲なく、開戦以來日本海軍の幸運は、實に偉大なる効績を收めたりと雖も、凡そ事には必ずしも幸運のみに限られたるにあらず、日本海軍も素より此點に就ては豫期する所なるべし。敵の海上權力は破壊せられ、其海上武力は大半破壊損傷を被むりたる場合に方り、始めて日本艦隊の不幸を見たるは如何なる理由に依るか、海上權力其手中に在りて、優越なる海上武力を有するも、本來敷設水雷は其沿海防禦の爲めに用ひられたる敷設水雷の爲めに、其己れの艦艇を損失するとあるを免れざるのみならず、其

く出来ずなりぬ故に曳船をして右舷の器械にて避けんと欲し、殘部の僅なる人員を便役して左舷に傾斜せるを以て右舷の大艇を叩いて先づ艦隊の均衡を保たしめんとしたり水雷長は第一に「ヒンネース」(端舟)第二ランテ、第三小蒸氣と云ふ順序を以て救助船を叩き、しし準備に取掛り依て「ヒンネース」を叩きランテを叩き小蒸氣を叩きんとする時笠置來りたれば左舷の第二カッターを叩きし之に曳網を結び左舷の左手より引網を笠置に渡し右舷の網を母かんとする刹那又も第二回の器械水雷に撞れり時に午後〇時三十分なりき此時の艦體の位置は恰もランテが水面に透したるまでにて其少しく以前に有森副長は中甲板以下の模様を報告せんとて上甲板に來るの途中に於て中尾艦長と合し防水は充分の見込付けり御安心あれと報告し尙ほ航海長に告げんとして艦橋近く來り千坂航海長に其旨を告げ直に引返して中甲板以下の防水工事場に到れり既に副長の下甲板に透せし頃ならんと思はるゝ頃第二回の災厄に罹り轟然たる響は万雷の一時に落下する如くなりき此時全員の過半はボンパ其他の器械使用の爲め下甲板に送り上甲板には港内より進み來る敵の驅逐四隻と交戦するに足るや否や氣遣ふほど人員を減じ居り若し第一回の災厄に罹りし時直に退却したらんには或は第二回の災厄を避け得たらんやも知る可からざれども唯専ら防水を爲し其任務を遂行せんとのみ欲し進むを知るも退くの意なき軍人の常として其位置を退かさざり

之に接近せしめざるを要する状態を見るべきとあるを唯茲に疑問とすべし一事は、當時の状況に於て觸發水雷の敷設せられたる海面に、一切の艦艇をして危惧に堪へざらしむる場所に向て、艦初瀬の如き巨艦を行使する必要ありしや否やの問題是れなり。此疑問を決定せんには、勢ひ當時の現勢及東郷提督の意圖計畫如何を精悉したる後なるを要するは勿論なれども、今茲に一般の想定を根據として立論すれば、『當時日本軍は海陸兩方面より、一齊一時に、要塞攻撃を決定するの計畫若しくは之に似たる計畫ありて、此の如き有力艦艇の活動

第二編 本紀 第五章

遼陽方面前進戰(即移動性目標)……及浮動性目標

第二節 第二期に於ける日本海軍の運動

しが故に艦中何物をも残さず沈没の不幸に遭へり而して第二回の災厄は同艦隊の方なるマストの下にある火藥庫の所に中りたれば遂に爆發し激烈なる音響と共に煙筒よりも艦よりも各砲門よりも機關室のスカイライより盛に火を吹き出し船々たる火災は天を焦さん計り又アツキ其他の木片空中に飛散すること宛がら千島の一時に飛び舞ふが如し然のみならず左舷の方に立上る黒煙はさしに廣き海原を鎖して何れを何れと見分け難きに至り次第に煙筒とは前方に傾き見ると艦體は中央より折れかかりたり航海長はコンパス室より急ぎ足にて來り前部右舷の艦橋に赴きつゝ顧みて「ボート叩せ」と命じ艦橋に送せしに煙の艦橋は既に海中に入り艦は最早直立の姿となりラム(衝角)を高く空中に見るに至れり此時衝角頭より海中に向け將に飛込まんとする者あれば危険なりとて制止する途端航海長自身も全く海上に落され水中の人となれり其間眞に一分二十秒にて何をする暇にあらざりき

五月十五日封鎖監視の爲め第三根據地を出てたるは第一第三兩艦隊にして旭灣より勝海方面を監視遊弋し午前十時老鐵山の南約廿哩の地點に至りし頃初瀬先爆沈し我艦隊の少く混亂するを見て敵の驅逐艦十八隻ノクキツクを先にし港外に突進し來り是に於て我第一艦隊は沈没艦の乗員救助に着手し第三艦隊をして敵の驅逐艦に當らしめ東砲西走する中時は午前十時過ぎると十五分戰艦八隻は大爆聲と共に煤煙に包まれ

を要せしものなるべし」と謂ふを得可し若し然らずとせば、「日本軍は旅順港内若しくは老鐵山頭の要塞に向ひ巨弾を擲射せんか爲め艦隊中の最優艦をして危地に入らしめたるものなり」と謂ふを得可く若し然りとせば此計畫と行動とは輕舉妄動なりとの結論に歸せざる可からず更に一步を進めて日本海軍が布設水雷偵察の爲めに是等の巨艦を用したりとせば一層甚しき失策なりと謂はざるべからず是等の行動を要するが爲めには砲艦又は驅逐艦あるを以てなり唯未だ情勢の詳かならざるに方り狼りに東郷提督の行動に妄評を試むる

たり即ち八島は九百有餘名の健兒を乗せたる倭敵の機械水雷に晒れたるなり敵の大驅逐隊は此機に乗じて愈々我に迫らんとす形勢危殆なる知るべきなり而して八島の最後如何と見れば煤烟散じたる跡には艦隊の猶依然として浮べるを見る其艦頭には曳船頼むとの信號醜れり三笠は幸急せんに向ひ曳船の準備を整え遊離地點を跡にし南西の方面に航行せんとせり此時に至りて敵は既に港外に送し艦に砲門を開き機あらば迫りて襲撃をなさんとせり是に於て敷島をして急を第三地點にある我驅逐隊に告げしむることしたり時に第三地點にある我驅逐隊は既に無線電信を以て敵の驅逐隊の出動を知りたれば主力を擧げて出動し途中敷島が船首に潮水を浴びつゝ全速疾驅し來るに會せり敷島は驅逐隊を見るや信號を以て「初瀬吉野沈没し八島も亦敵の機械水雷にかゝり將に沈没せんとせしを三笠曳船して歸航の途にあり」第三艦隊は敵の驅逐隊と交戦中なり速に至りて之に協力せよ」と飛躍くこと甚しく而かも危機一髮を容れざる時なれば全速力旅順沖に至れば三笠より信號あり「戦艦八島は遊離の時より二時間曳船し老鐵山を去る南西約二十哩の地點にて遂に沈没せり」と即ち驅逐隊疾驅して港口に迫れば敵の驅逐隊は我攻撃に堪へ兼ねて港内に遁入したり

は、早計なる可しと雖も、此の悲しむべき災厄に依り、日本人が自己の軍艦は堅牢抜くべからざるものなりと過信するの過誤を正すことを得ば足れり」と日本人たる予輩も素より皆悉く同じく人の運用に係る浮動物が、絶対に損傷せざるものなりと妄信するが如き愚者にあらざ一の正當なる事山なくして、好んで其堅艦を犠牲に投ずるの愚者にもあらず、敵が公海に水雷を敷設するの不法を豫知するの鬼神にもあらず、東郷提督の行動は、毫も非難すべきの理由なく亦非難すべからざる正當の事由に基きたるものなり。モーニングポスト記者の論の取るに足らざる以上に、尙ほ一段の謬見あるものあり、即ちニューヨルク、ヘラルド新聞

損害は實に巨大にして各廠の防水扉は浸水の爲めに將に破れんとす航行を始めしより約二時間を経過し老鐵山の西南約二十海里の地點に達せる頃に至りては既に浸水到底防ぐ可からず漸次沈没し來るを以て艦長坂本大佐は聖彰を他艦に移し奉り軍艦旗其の他重要書類を他に移すべきを命じ味方の各艦に向て救助を乞ひホートを仰じ全員を移乗せしめたり其軍艦旗を仰すに當りては全員服裝を改め上甲板に整列して君が代を唱え天皇陛下及日本海軍の萬歳を連呼し無念の涙禁じ難きも遂に全員笠置に移り四顧するに忍びず無限の感慨を以て之れを凝視する間僅に三分にして全く沈没し去れり越えて二十日我封鎖艦が旅順港内より出でたる一ツヤンクを檢せしに敵將より本國宛の報告書あり其一節に左の記事ありたりと近來日本艦隊の旅順沖を遊弋するを見るに常に其の航路の一定せるもの、如し是を以て我艦隊にては十四日夜一六時指揮せる一驅逐隊をして日本艦隊の航路に機械水雷敷設せしめたるに果して十五日初瀬吉野富士型の三艦之に觸れ沈没せり蓋し敵は我艦隊の航路を知りて水雷を布設せしものなるべし

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標)及浮動性目標 第二節 第二期に於ける日本海軍の運動 四七五

の如きこれなり。彼れ曰く「日本艦隊司令官が存続艦隊の監視しあるにも關せず、狼りに無益の砲撃を行ひしは妄動なりと謂ふべし、強襲を敢行する此の如き場合は、當に非常ならざる可からず、非常の場合を除くの外は、兵學上避くべきこととす、要するに初瀬の没沈は、奇禍たるに相違なしと雖も、連勝氣驕り、注意自から缺陷を生じたるに由らずんばならず、日本人は敵を侮りたり、敵を侮るは殃禍の因を爲す精敏なる批評家は言へり、日本人は其膽略智能巧妙を極めたりと雖も、其抑制力即ち滿を制し容易に之を放たざるの力に乏しきものなり。」と、ヘラルド記者の論は、日本軍の作戰情態を知らず、皮を知て肉を知らず、日本人に抑制力乏しとの批評を以て、精細なる觀察となす、豈に値へせずや。之を日露外交の經過に見よ、遠くは日清外交の經過に見よ、日本人の特性は寧ろ滿を持して放たざるに偏す、已に一たび之を放つ、勇往果敢、其爲さんとする必要に對しては、斷々乎として其危険を踏むに長ず、而かも是れ此の場合には、記者の知り能はざる正當の事由ありて、此行動を生じたるものなり、况んや公海に水雷を敷設するの不法は、艦隊の知り得べき限りにあらず、自由なる公海上の行動に對し、其抑制力の如何を議せんとするは、恐も

亦甚しと謂ふ可し。

以上の所論は、皆其當を得ざるのみならず、何れも當時の情勢を詳にせざるものなり。予輩は其自ら信する所の斷定を言明するの時機に達せず、其一面觀として、眼光一頭地を抜ける、ロンドンタイムスの批評の一節を擧げんと欲す。同軍事記者は曰く、「封鎖されたる近距離の地に目下の場合、戦闘艦隊を存置するの必要ありたるや、如何、目下の旅順口の如き、海面要塞の前面に於ては、海軍の行動は、絶えず其状態を變ずるを以て可なりとせざりしやに至りては、自ら疑なき能はず、大戦闘艦は主として海上に於て其同等艦と戦はしめんが爲めに建造せられたるものなり、之をして海岸任務に當らしめんことを欲するものにあらず、要塞砲兵の武器又は沈置水雷と戦はんことは其適する所にあらざるなり、此の如き状態の下に、一戦闘艦を損傷せしめ又は破壊せしめ、以て何等の償ふべき利益を有せず、徒に海軍力を暴殄せしむるは、即ち海上權力なるものゝ意義を至當に解せざるものなるやの疑を人に抱かしむるの嫌なき能はず、一たび要塞の防禦力を潜伏せしめたる後は、海軍武庫の近傍に於ては、決して一等戦闘艦を用ふべきものにあらず、一個百万、磅を

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前線戰(即移動性目標)…… 第二節 第二期に於ける日本海軍の運動
旅順包圍戰(即固定性目標)及浮動性目標

費す砲座を用ひざるまでも、要塞の海上表面に對して十二斤砲を据ゑ、且つ使用するの法他に存せざるにあらず、制海權獲得後に取るべき行動に關しては、實際海軍の學門上、之に重きを置かざりしの状態あり。(此一句の引用は時事新報)と云ひ、又其場合に艦隊の必要ありし理由に解釋を試みて曰く「旅順口附近に軍艦の現存し居たる所以は當時進行中なりし作戰計畫の性質に徴すれば之を窺ふとを得ん一方に於ては包圍軍の各隊は益々旅順口に逼近し、其方面に於ける有力なる海軍の助力を要すると共に、他方に於て野戰本部隊は日本より増發隊の來着するを待ち、之に對する迫害の之よりして生じ得可き場所に、海軍の絶えず出現し以て之を援護せんことを欲したるならん、要するに初瀬は嚴密に云ふ海軍的任務を遂行すとの問題に於てよりは、陸軍戰略の必要の爲めに其犠牲と爲りたるものなり」と云へり。

第三節 第二軍の前進運動

予輩今や陸上戰を叙するに當り、便宜上第二軍より其記事を進めんと欲す、第二軍は其始めに於て二個の作用を有す、即ち一方に於ては旅順包圍の豫備戰を行ひ、他

方に於ては遼陽攻撃の左翼と爲りて、渤海灣海岸線に沿うて前進するにあり。旅順包圍の豫備戰としては、南山攻撃を以て一線を畫し、こゝに右面して得利寺に露軍を破り、熊岳城、蓋平、大石橋、牛莊、海城に攻進せしものなり、故に上陸の初期、南山戰に至るまでは、主として關東半島と大陸との切斷するの位置に立ち、其主なる目標は南山に於ける敵を撃破するに在りたり、

A 南山攻撃豫備戰

五月六日、海軍援護の下に上陸を爲したる第二軍は、先づ露軍の交通通信機關を破壊せんとし、一枝隊を派遣し、翌六日午前八時、普蘭店南方の高地に於ける、露騎七名、歩兵若干を撃退し、普蘭店停車場附近に騎兵約一個中隊、歩兵約三百あるを發見し、之れを攻撃せしに、露軍は、巧みに停車場の營造物を利用し、防戰甚だ力む、午前九時に至る頃、煤烟一抹乍ち其響を伴ひ、馳走し來れる一列車あり、蓋し旅順方面より來れるものなり。露兵は車窓より射撃を行ふを以て、之に應戰するや、突如として赤十字旗を掲揚せり、是に於て之を檢せんとし、砲撃を中止し、其引返して命じたる

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(移動性目標) 第三節 第二軍の前進運動 四七九
 旅順包圍豫備戰(即固定性目標) A 南山攻撃豫備戰

も之に應ぜず、蕩然急速力を以て遼陽方向に馳走し去れり。停車場附近の露軍は戦闘一時間の後敗退せり。此時日本工兵の一隊は、停車場南方に於て、電線を切斷し、鐵道を破壊し、旅順の後方連絡を絶ちたり。此戦闘に於て、枝隊の損傷は、兵卒一名戦死し、重傷四名ありしのみ、敵の死傷は詳ならずと雖も、其歩兵一名を捕獲したり、魏子窩に向へる一隊は、何等の抵抗を受くることなく、電線を切斷したり、又金州北方約五里三十里堡に於ける電線破壊の命を受けたる一隊は、八日午前八時目的地點に達し、三十里堡の東北方約一里半龍口附近に於ける露兵百名を撃退し、鐵道破壊の目的を達し、電線約二キロメートルを切斷したり。此戦闘に於て、戦死將校一名下士二名傷兵九名を出だせり。十二日敵狀搜索と交通遮斷の爲め、普蘭店瓦房店普蘭店を北に距る約六里半方面に差遣したる一枝隊は、報告して曰く、普蘭店附近に於ける敵兵は歩兵約三百騎兵約五十にして、其他處々に二十名内外の監視兵ありと。枝隊は普蘭店の東北に於て、破壊切斷の目的を達したり。又七名より成れる騎兵斥候は、五十里堡龍口の約半里に於て露兵數十名を襲撃し、大尉一名下士卒數名を斃し、其七名を捕獲せり、又若干の歩騎兵より成れる一部隊は、蘇家屯

三十里堡の東北約半里に於て北行する軍用列車と戦ひ、之を南方に撃退し、同時に龍口蘇家屯間に於て、鐵道電線の小破壊を行へり。又十三里臺附近を攻撃せんとする一隊は、五月十六日午前八時師團司令部と共に、金州附近に前進し、又敵情偵察の目的を以て、砲兵一部隊の陳家屯に向ひたり、本隊の行進路は、非常に險惡なるが故に、午前十一時を以て漸く窰口に達したり。是に於て、左右兩翼中央の三隊は、金州東北に連亘せる一帯の高地を占領せんとして運動を起したり。中央隊は砲戦を開始し、戦況猛烈を極めしも、左翼隊は高地に在りて、其攻撃の機會を待ちしに、露軍は相距ること七百米突なる老虎山附近の好陣地を占め、甚だ優勢なり、右翼隊は露軍の猛射を冒して前進し、二個の陣地を奪取し、更に第三陣地に突入せんとす、時に午後二時なり。彼は三面より之に當り、戦況猛烈と爲り、左翼は更に一高地に突進し、敵前に肉薄し、終に露軍をし

五月廿日アレキシーフ總督の報告に曰く、優勢なる日本軍三十里堡附近に現はれたるを以て露軍の一枝隊同地に派遣せられ五月十六日之と交戦したるに日本軍は二個師團及び四個砲兵中隊より成れるとを發見したり。日本軍が前進を中止したるを以て之を視れば其の損害甚だ大なりしなるべし、露國の死傷は約百五十に達し、ナゲエー將軍は輕傷を負ひ、一士官は戦死せり(ロイテルの露報報告に日本軍二千人を斃して之を撃退したりとありと雖も日本軍損害の實際は一四〇に過ぎざるなり)

屯に向ひたり、本隊の行進路は、非常に險惡なるが故に、午前十一時を以て漸く窰口に達したり。是に於て、左右兩翼中央の三隊は、金州東北に連亘せる一帯の高地を占領せんとして運動を起したり。中央隊は砲戦を開始し、戦況猛烈を極めしも、左翼隊は高地に在りて、其攻撃の機會を待ちしに、露軍は相距ること七百米突なる老虎山附近の好陣地を占め、甚だ優勢なり、右翼隊は露軍の猛射を冒して前進し、二個の陣地を奪取し、更に第三陣地に突入せんとす、時に午後二時なり。彼は三面より之に當り、戦況猛烈と爲り、左翼は更に一高地に突進し、敵前に肉薄し、終に露軍をし

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第三節 第二軍の前進 四八二
 及動性目標
 助 南山攻撃準備戰

て正面の高地を捨て、退却せしめたり、右翼は之を追撃せんとする際、露軍は退却掩護の目的を以て砲六門より爲る砲兵一個中隊を以て猛火を注ぎたり、されども其砲弾は皆後方背囊集積日本兵背囊を卸して前進すの所在に落下し損害を加ふること能はず、中央隊進んで全く露軍の陣地を占領す、時に午後四時なり。是に於て、九里庄、金州の東北約一里半、北方高地より陳家屯、金州の東方約一里半に亘る高地を占領せり。死傷將校以下百四十名、露軍の損害七百を下らず、其兵力は少なくとも狙撃歩兵第五、第十四、第十六聯隊の各四部より成り、速射砲八門を有せり。露軍は日本軍の兵力を推算して、二個師團及二個の砲兵中隊より成れりとし、其自軍の死傷を百五十なりと公言するも、實際は其數更に大なりしに相違なく、其一將軍の負傷せしことを承認せり。

B 南山攻撃戦…上

十三里臺の一戦、日本軍は以て金州を俯瞰す、今や一蹴して金州城を陥れ、南山の堅壘を奪ひ、半島の咽喉を制握せざるべからず。前面の敵狀如何は之を攻撃軍司令

官の報告に徴するに、廿一日の報告要領に依れば、金州附近の敵は、緩慢なる射撃を行ひ、我を誘致せんとする者、如し、目撃する所によれば、金州南山には、十珊以上の榴弾砲四門、九乃至十五珊舊式加農十門、十二珊速射砲二門なり、尙ほ大なる野戰砲臺あるも、備砲不明なり、山上には少なくも十個の砲臺、或は堡壘あり、其首線は、北方及び東北方に向ひ、鐵條網及び地雷は北麓及び東麓にあり、前記砲の種類數は、露軍の射撃に依り偵知せしものなり。又、彈片により判ずるに、十珊五及び八珊五の舊砲あり、十珊五の彈丸は、八千五百米突に達せり」と云ひ、又廿三日報告要領に據れば、「敵の右翼和尙島には、約八門の重砲海に面しあり、砲種不明、其内若干門は東北馬家屯方向を射撃する事を得、柳樹屯附近には、大なる倉庫あり、南關嶺の東方高地線には、短少なる敵の散兵濠の如きものを見る、七里庄南方後營、左營、洋砲營には探照燈あり、時々我陣地を照射し、今日まで敵の發射せる砲彈の破片によれば、二十珊砲十五珊短加農、十珊半加農、八珊六加農、七珊六速射砲等なり。又本日偵察將校に向ひ、徐家山砲臺に向て射撃せし砲彈は、曲射砲にして其口徑九珊位なり。南山東側閣家屯の附近より、山麓を経て西北山に繞る、劉家店の東北約千米突までは、一面に

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前線戰(即移動性目標)… 第三節 第二軍の前進 四八三
旅順包圍戰(即固定性目標)及浮動性目標 B 南山攻撃戦 上

鐵條網あり之より左翼には防禦工事を見ず、金州には依然少許の砲兵あり。」と云へり。攻撃行動を起し、一旦陳家屯、九里庄、養子河の後方に集合したる日本軍は、右の如き偵察の結果を總合し、砲兵陣地及び進入路の選擇を定め、部署已に定まり、海軍の共同すべき通報を手にし、其攻撃第一線を龍王廟、三里庄、陳家店、王家屯の線に進め、二十六日午前五時三十分を以て、金州攻撃を開始し、南山の敵砲も之に應射し、砲戦九時に亘り、時々交砲して夜間に至れり。此の戦闘に共同すべき海軍艦隊は、天候の爲めに來り會する能はず。時に枚を呷める一部隊は、夜暗を縫ふて進みしか乍ち狗吠の爲めに露軍の發見する所となり、白電暗を破り、砲火は南山の壘上より迸射し來れり。時恰も俄然として抹雲四塞乍ちにして激雷乍ちにして猛雨、天柱爲めに折れ、地軸爲めに壞んと欲す、強猛無比の防禦軍も、此の天候の激變に、其の膽を奪はれたり、此機に乗じ、膽勇無比なる日本工兵一大隊は、雨を衝て猛進し、城外八百米突に達し、掩堡を築き、午前五時三十分に至り、南門へは第一師團の工兵中より、東門へは第四師團工兵中より、七八名の決死中の決死者を選抜し、爆薬を以て城門破壊に向はしめ、又他の工兵をして鐵條網の破壊に當らしめたり、午前八時一方

は遂に其目的を達し、二大門は蕪然たる響を殘して破了せり、是に於て第一、第四師團の歩兵部隊は、急潮の如く進入して之を占領せり。

C 南山攻撃戦…下

今や南山攻撃の本舞臺となれり、半永久の築城其の築造方法、其の最新なる備砲武器に向て戦はざるべからず、今先づ予輩は其猛烈なる戦況を叙するに先だち之が總説として讀者の日本公報を細讀するを要求す。其の公報の一には、敵の占領せる南山の陣地は、峻峻なる高地線に半永久築城を施し、大小砲約七十門、機關砲八門を備へ、連續圍繞せる數層の堡壘線に、銃眼を穿ちたる掩蔽部を作り、其

デッソ少將の報告に曰く日本軍は三個師團大砲百二十門を以て廿六日金州を攻撃し別に砲四隻水雷艇六隻之れに協力せり午後五時戦を開き我が砲艦多く破壊せられたり敵の歩兵は徒渉して海を渡り我が左翼に迫り其勢ひ猛烈なりしを以て我々は午後八時退却せり我が負傷將校三十兵卒八百なりステッセル將軍の報告に曰く二日間激烈なる戦闘後五月二十六日夜金州を撤退すべき命令發せられたり敵は三個師團以上砲百二十門を有せり敵砲隊に其の砲艦及驅逐艇よりの砲火は我が砲艦に多大の損害を與へたり日本軍は第五師團砲隊及露國砲艦よりの砲撃の爲めに大損害を被りたるもの、如く我損害は死傷將校三十兵士八百に上れり露國軍砲にして戰場に遺棄せられたるものは皆破壊せられたるものなり砲撃の重砲は是れを取外すにも三日を要する程なれば運搬し能はざりき又其別報に曰く日本軍砲火猛烈を極め砲艦及び水雷艇の砲火は金州に於ける露の砲兵は壓殺せり而して南山退却前、將軍は

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戦(即移動性目標)… 旅順包圍戦(即固定性目標) 及浮動性目標… 第三節 第二軍の前進 四八五 C 南山攻撃戦…下

前方には數多の地雷、及び鐵條網を設け、且つ此の間隔を補ふに多數の機關砲を以てせり之に對する我砲兵は全力を擧て之が破壊に努力し、又屢ば陣地を交換して敵に近接し、以て歩兵の前進に勢力を與へたるも、敵歩兵の抵抗は頗る頑強なりしを以て、午後五時に至る、此時我歩兵の爲め未だ突撃の進路を開くに「至ず」と云ひ、一の公報の冒頭によれば「然るに該高地の防禦工事は半永久にして其備砲の如きは大小口徑約五十門の外、速射砲二中隊を有し、歩兵を二團若しくは三團に、銃眼と掩蓋を有する散兵濠に配備し、其の要點には、機關砲を備へ、頗る頑強なる抵抗を爲せり」と云へり。其如何に、南山の防禦力の強大なりしかを知らざるべからず。其

戰況としては、我軍は之に對して、全野砲を配列し、先づ敵の砲臺に向て、射撃を開きしに、午前十一時頃、敵の重なる砲臺は沈黙せり、但し速射砲は早く南關嶺の高地に退き夜に至る迄我を射撃せり。我砲兵は、敵の散兵濠に向て全力を集中し、我歩兵は小銃射程内に入りて猛烈なる射撃を行ひ、敵前四百乃至五百米突の線にまで接近せり、然るに前面には、鐵條網地雷及び壘濠あり、且敵の歩兵射撃、殊に機關砲の射

大砲破壊を命じられたるも迅速退却の必要ありし爲め其命令は一部のみに行はせられたりと

撃は少しも萎靡せず、更に約二百米突に接近し、障礙物の間隔に向て數回行ひし突進も、將校以下皆敵前二三十米突の間に斃れ、敵線に達するを得ず、更に砲兵を以て準備射撃を行ひ續て夕刻に及び、最も猛烈なる砲火を施し、之と同時に最後の突撃を行ひたるに辛ふじて一方を破り、之より全線高地により、終に敵を撃退して、陣地の主となるを得たり。此日我砲艦四艘は大連灣より我に協力して、砲臺を砲撃し、敵の砲艦一艘は大連灣にありて我左翼を砲撃せり。此攻撃中、最も幸なりしは南山の東麓にある地雷の電線を発見し、之を切斷し、爆發するを得ざらしめたるにあり。又我左翼にある第三師團は、敵の包圍を受くるのみならず、敵は漸次其歩兵を左側前に増加し、且つ南關嶺にある敵砲二中隊は、此の砲撃を援助し、益々師團の左側に迫らんとす。而して我携行砲兵彈藥は將に盡きんとし、戰闘を永く繼續する能はざるに至れり、依て止むを得ず、歩兵をして損害を顧みず、強襲を行はしめ、砲兵は補充し得る彈藥を盡して敵を猛撃せしめたり。我第一師團の歩兵は、意氣衝天の勇を鼓して、敵陣に向ひ突撃せしも、敵の猛烈なる瞰射と側射に依り、多數の死傷者を生じて、前進を繼續することを得ず、頗る苦戰に陥りしが、恰も好し此時金州

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第三節 第二平の前進 四八七
旅順包圍戰(即固定性目標) 及浮動性目標 C 南山攻撃戰 下

灣にある。我艦隊は敵線の左翼に向て、更に猛火を開き、砲兵第四聯隊に協力し、敵火の撲滅を努め、第四師團は此機に乘じ、全力を盡して敵の左翼に迫り、先づ高地線に進む。茲に於て第一及び第三師團は、之に協力し、全線を擧げて勇奮突入し、累々たる死屍を喻えて、敵壘に肉迫し、劍尖相接するに至るまで激戦して、遂に南山を攻略し、各堡壘上に國旗を翻せり、時に午後七時過ぎなり。敵は潰亂して旅順方面に退却せり、此の退却に當り、敵は大房身の火藥庫を爆發したり、軍は一部を以て敵を追撃したる後、全隊戰場に露營す。此時士氣大に振ひ、萬歳の歡呼諸方面に起り、砲兵は全力を盡して敵を追撃す、我に對せし敵の兵力は、野戰軍約一師團、野戰砲兵二中隊、要塞砲兵、海軍兵若干なり。察するに、敵は旅順及大連灣を掩護するため、爲し得る限り南山の陣地に據り、我前進を防止せんことを努めたるものにして、尙其防禦工事を増加するの計畫ありしが如し、敵の死傷は不明なるも、戰場に遺棄せし死體のみにては五百名を下らず、捕虜は將校以下若干名、又戰利品は砲六十八門、機關砲十門、發電用蒸氣機關一個、電氣燈三個、ダイナモーター一個、地雷鐵罐約五十個、其他小銃及び彈藥材料等なり。我軍死傷將校以下約三千五百名、敵は堡壘内及び最後の戰闘

に於て約四百の死者を遺棄せり、堡壘及び砲臺に備へ付けある砲は悉皆之を鹵獲せり」と。今や予輩は、此戰況に付き、細かに語らざるべからず。

此攻撃戰に於て第四師團は右翼、第一師團は中央、第三師團は左翼と爲り、砲兵の位置は第四師團は金州附近の樹林中に、第一師團は金州を距ること五百米突の畑地に在り、第三師團の砲兵は前進し、砲兵旅團は有金山の東南麓に位置し、艦隊は共同の動作を取らんが爲め、已に適當の位置に在る筈なり、午前七時砲火を開くや、劈天聖地の大修羅場を現出せんとす、請ふ其各方面より之を觀ん。

中央隊たる第一師團は、伏見宮貞愛親王之が師團長たり、午前八時三十分より行進を開始し、露軍の開鑿したる旅順の新軍道に沿ひ、先頭としては中央には第廿五聯隊、第二大隊、左翼には第二聯隊の一大隊、右翼には第一聯隊の一大隊を進め、遂に敵壘を望むに要害堅固に構えたる防禦力は嚴然として侮るべからず。壘上寂として未だ一丸を放たず、日本軍急進して八百米突に達するや、露軍は壘濠に在りて銃眼より猛火を雨注し、火力は刻一刻に猛烈の度を加え、午後三時半、砲兵掩護の下に、更に五百米突に進み、五時に至り二百米突に近接す、而るに鐵條網は前路を遮り、工

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第三節 第二軍の前進 四八九
旅順包圍戰(即固定性目標) 及移動性目標 助 南山攻撃戰下

兵之を破壊せんとするも能はず、加ふるに機關砲は猛雨の如く、銃火も亦之に劣らず、勇猛なる日本の將士は恰も烈火の爐中に浴するが如く、殊に第十五聯隊第一大隊は、其真正面に向ひたるが故に、其損害従て多く、第二大隊の如きは其三分の一以上に達せしも、毫も屈せず、露軍の抵抗亦益々頑強を極め、損害毎秒を追つて増加するの狀態に在り。是に於て小原第一聯隊長は、奮然自ら其豫備隊を指揮し、敵壘に肉薄して傷き、松村旅團長も亦其豫備兵を率ひて突撃したるも功を收むる能はず、師團長は戰狀の危険なるを看取し、其夜暗に到らば一層攻撃の困難を加ふべしとし、總突撃の令を下せり、是に於て各隊積屍を踏み、流血を涉り、猛火を冒して奮進せり。願みて左翼たる第三師團の戰況を見るに、其師團長は會て日清の役平壤船橋里に苦戦し、我れ軍旗の下に死せんのみと、敵壘を睨視して一喝し、敵彈雨注の下に、泰然たりし大島將軍なり。廿六日午前三時を以て運動を起し、歩兵第六聯隊を以て其總豫備隊と爲し、東山の後方に位置せしめたり。午前五時、軍の中央隊たる第一師團は、全線砲撃を開始せしも、其第三聯隊は尙射機を計りて後方に在り、午前九時、東山後方に位置したる第六聯隊の一部、及第三十三聯隊は開進し、其第一大隊を迂迴

せしめ、以て敵の左側に迫らんとす、此前進點は一望無遮蔽の開敞地なるが故に、各個の敵の射撃目標とならざる可からず、而かも敵の猛射は比較的損害を與ふると少なく、漸次前進して散開し、恰も敵が會て豫測せし照準度に來り、彈雨更に猛烈を極め、此に至りて一も虚發なく、一中隊の死傷百十餘名に及び、一身三彈多くは五彈に達するものあるに至る、第一中隊の如きは、小隊長一人を除き、他の將校皆死傷し、下士以下五十五名に及び之と併進したる第三中隊の如きは、八十一名の死傷を見るに至れり。右翼たる第六第三兩大隊の如き苦戰其極に達し、又第十八聯隊は午後六時に至り、彈藥缺乏を來たし、其補充を得るに至るまで、又苦戰の狀態に在り、加ふるに敵の砲艦其左側を脅威しつゝあり。

第四師團の戰況を見るに、小川將軍指揮の下に、右よりは大阪旅團、左よりは伏見旅團を進め、掩堡に依りて射撃を開始し、彼の掩蓋下に於ける敵が銃眼より猛射する機關砲は、疾風猛雨の如し、海岸を進める第八聯隊第一大隊の如きは、脚下に破浪を蹴り、頭上に銃火を浴び、奮進の狀壯烈を極めたり。恰も砲艦隊は廿五日に會戰する能はざりしも、今や來りて之に會し、金州灣上より其砲彈を猛射して之を掩護し、

第二編 本紀 第五章

遼陽方面前進戰(即移動性目標)……
旅團包圍豫備戰……(即固定性目標)
及浮動性目標

第三節 第二軍の前進 四九一

遼陽方面前進戰(即移動性目標)……
旅團包圍豫備戰……(即固定性目標)
及浮動性目標

諸隊之に力を得て猛進す、又第一大隊の第二中隊は、午前中其行進路に方り、地雷火爆發の爲め、其一小隊は土塊肉塊粉塵混騰して腥氣空を抹し、凄慘言語に絶す。今や敵前一千米突に進み、露軍亦其力を極めて防戦し、砲彈銃丸急殺の如く、全線皆正に苦戦の時、午後六時砲兵猛烈なるは砲火を散兵濠に加えたるを機とし、第八聯隊の一中隊、先登となり堅壘に突入し、日章旗を壘頭に掲ぐ。中央の第一、左翼の第三師團、之に力を得て、全線一齊に呐喊奮進し、遂に半永久の堅壘を陥れたり。右に述べたる海軍分遣隊の行動の詳細は、之を司令長官の報告に徴するに、分遣隊は二十五日正午、金州灣に達せしも、波浪高かりしを以て、蘇家屯敵壘の攻撃を見合せ、一地點に假泊して、風波を避けたり。廿六日午前五時頃より、天候漸次靜穩に復し、我陸軍は黎明より、砲戦を開始せしを以て、午前六時赤城島海及第一艇隊も干潮水淺きに拘ず、海岸に近て之と協力し、連續敵壘を砲撃せり。此戰鬪の初期敵砲島海の前甲板を擦逸し、爲めに分隊長大尉河野通雄負傷し、下士以下二名戰死、二名負傷す。午前八時海面より望見し得る敵の砲壘は、一時殆んど沈黙せしを以て、砲撃を中止し、更に第一艇隊の一部はシャオエガ附近の鐵道線路を砲撃し、他の一部は漲潮に乗

じ航路を測深しつゝ、筑紫平遠を嚮導して海岸に近づき、我陸軍右翼の一部が砲火を冒して海中を徒涉し、壯烈に前進するを掩護せり、午前十時より分遣艦隊は再び全力を以て敵壘を砲撃し、同十一時敵は殆ど退却し、我陸兵既に蘇家屯高地の下に達せる如くなりしを以て、再び砲撃を中止したり。筑紫平遠は落潮に際し吃水許さざる爲め漸次沖合に出て、赤城島海及び水雷艇隊の一部は、依然止まりて敵を監視せり。此間我艇隊は我陸軍の右翼と通信連絡するを得て、蘇家屯の敵兵は既に全く退却せしも、尙南關嶺附近にある敵の陣地を砲撃するの要あるを知り、更に赤城島海をして直に之を砲撃せしむ。此砲撃中敵砲島海の砲側に爆發し、艦長林子雄戰死し、少尉佐藤巳之吉外下士三名負傷す、但し艦隊には損害なし、其他の艦隊には一も損傷なし、午前七時三十分分遣艦隊は戰鬪を止め、艦隊集合地に向け歸航せり」と

之を軍司令官の感狀に徴するに第一師團に對しては、南山攻撃に方り、其師團攻撃の方面は、敵地最も堅固なる部分にも係はらず、勇猛邁進して最も劇烈なる敵陣の下に於て、整然として動作し、殊に最後の時期に於て、夥多の死傷あるにも拘はらず

第二編 本記 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第三節 第二軍の前進連 四九三
旅順包圍戰(即固定性目標) 及浮動目標

動南山攻撃戰一下

勇進して遂に敵陣地前の副防禦の位置に達し、苦戰數時間に涉り、數回の突撃を行ひ、遂に南山攻略を全ふしたり」と云ひ、第三師團に對しては、「南山攻撃に際し、其旅團方面は地形上敵の重砲彈の集中する所にあり、加之大連灣の内に在る敵の砲艦の爲めに、左側を脅威せられたるに拘はらず、百難を排して、彈雨の下を前進し、終に堅固に防禦工事を施したる敵兵の近傍に接近して、苦戰數時に亘り、多數の死傷者あるに拘はらず、整然其任務を保持し、且つ屢々突撃を試み、敢て敵をして他の方面に力を用ゆると能はざらしめ、以て軍の攻撃奏功を容易ならしめたり」と云ひ。第四師團に對して下したる感状は最も重要なものあるべし、何となれば南山陥落の最後の動機は、實に第四師團の突入に在ればなり。天下の弱兵として誦はれたる、大阪師團の名譽は、此一舉を以て拂拭せられたるのみならず、其勇武は更に顯揚せられたり。南山の一戰、實に日本軍攻撃力の如何に強猛にして、露軍の最新防禦武器と築壘とに奮闘し、頑強なる防禦力を破りたるかの雄蹟を記憶せざる可らざるなり。若し夫れ其の奮闘の功蹟を個々に分解し、旅團に、聯隊に、大隊に、中隊に、小隊に、分隊に、一將一兵に此傳ふべきを擧ぐれば、壯烈鬼神を泣かしむるもの、枚舉に遑

あらず、彼の海上一たび閉塞の舉あれば、死地に就かんとするもの泣て其列に入らんとを求め、今此陸上地雷の踏査を命ずれば、亦復然り、鐵條網と戦ひ地雷と戦ひ掩蓋と戦ひ銃丸と戦ひ、壘壁と戦ひ、血と肉と智と勇とを以て、凡て之に勝越したるは、已に之を形容すべき筆を有せざるなり。此役日本軍の死傷將校以下戰死七百四十九、負傷三千四百五十五なり。露軍の兵力は歩兵第三、第四、第五、第十二、第十三、第十四、第十六聯隊、關東要塞砲兵、鐵道護境兵五中隊及び若干の海兵にして、戰場に委棄したる死者七百を下らざるよりすれば、其數尠少なからざる可し、大小口徑砲約五十門は日本軍の手に歸せり。

敗兵は二十三日夜半、汽車にて旅順方面に退却し、前革鎮堡以東に一兵を留めず、日本軍已に南山を攻陥するの翌廿七日午前十時三十分、歩兵砲兵及工兵より成る一枝隊は中村少將指揮の下に進んで南關嶺を占領し、又柳樹屯を占領し、火砲四門、彈藥鐵道貨車四十六輛等を鹵獲せり。日本軍が青泥窪を占領するの必要は、此の不凍港に依りて、冬季間に於ける其行動の自由を得るにあり、牛莊安東の如きは、到底此利便を享有する能はず、此の日本軍の爲めに必要なる青泥窪は、五月三十日何等

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第三節 第二軍の前進 四九五
旅順包圍戰(即固定性目標) 及浮動性目標 B 南山攻撃戰 下

の抵抗を見ることなくして、日本軍に歸し、貨車二十九輛は其鹵獲する所となりたり。此に依て日本軍が其戰鬪行動の上に利便を得べきは勿論なり。若し此の占領にして此の如く速かなるを得ざらんか、其不便より生ずる行動上の澁滞は必然なりしならん。若し旅順口攻撃の爲めに其行動に對する策源地として用ふる利便甚大なるべしと雖も、而かも尙ほ不安なるを免かれざる一事あり、即ち旅順口の艦隊にして尙ほ其浮動力を殘存する限り、未だ全く其利便を完用すること能はざればなり。唯此占領に就き、露軍が多數の貨物車輛を遺棄したるに徴し、南山の陥落は其豫期せざりし所なるを證するを見るなり。

南山戰は一方に於ては旅順包圍の序幕たり、他方に於て日本軍の移動目標に對する攻撃展開の左翼前進の準備戰たり、其成功は右翼に於ける鴨綠江戰と相待て重なり。タイムス戰評の要旨に曰く、第二軍は第一、二、三の三師團より成り(第一、二、三師團なり)、其大部分の上陸は貔子窩に於て行はれ、二十一日を以て攻撃の準備を爲せり。金州の地頭は、關東半島攻畧の吃緊地點にして、金州城南方に於て最も狭窄し、丘陵起伏して自然の防禦地形を爲す、其最高なる者を南山と爲す。此地

頭にして敵の據る處たる以上、陸上より半島に侵入すること決して能はざる所なり、而れども他の方針に従へば、此方面よりするを撰まざるも侵入の途なきにあらざり、日本の之を取らざりしは過誤に非ず、其計畫を見るに、其上陸地點は抵抗を受けざるべき場所を選擇したるなり。強大なる兵力の旅順口に存在し、海岸水深の遠淺なるに省慮せば、自ら其の陸上面よりせる理山を伺ふことを得べし。元來地頭の西南には、他の丘阜重疊起伏し、連亘して一は柳樹屯、他は殆んど金州灣に連り、延て六哩に達す、其の延長の度と露軍が旅順口守備隊中より派遣し得る兵力とに對照するに、此線を防守するは南山を防守するよりも難く、尙ほ之を一九〇一年發布の露國操典に徴するに、一個師團の涉り得る戰線延長は、一哩四分の一に過ぎざるが故に、此の制規の下に教練せられたるものをして、此の地頭の如き狭窄面に處せしむれば、勢ひ密集の傾きを生ぜざる可からず、即ち彼は六哩延長線を有する廣濶なる防禦線よりは、狭窄せる防禦線を執りたるものにして、而かも尙ほ後方に於ける掩護陣地として供用せられたる地點あり、柳樹屯、岬角に於ける重砲八門、第二陣地に於ける一二の砲臺の如き之を證するものなり。想定に従へば露軍の指揮權

第二編 本紀 第五章

遼陽方面前進戰(即移動性目標)……(即固定性目標)……(即固定性目標)……(即固定性目標)……

第三節 第二軍の前進 四九七
B 南山攻撃戰 下

は、ステッセルの手中に在り、日本の公報に依れば十六日の戦闘に於ける其軍隊はフオーク將軍の統率せる東部西比利狙撃兵第四師團なるが如く、専ら金州防禦の任務を帯びて、ステッセル將軍に屬せられたるものゝ如し。露軍にして此地頭を失はざれば、日本軍の進路を塞ぎ得るのみならず、尙ほ數多の利便あり、第一には必ずしも北方よりの援軍の望む可からずとするも、若し援軍南下し來りたる場合には之に共同すべき働作として、突撃の門戸として、之を用ふるを得べきなり、第二には地形に比して、防禦軍の密集其度に過ぎたるが如きのみならず、南山の防禦力は尙ほ數ふべき利便あるなり。過去少なからざる時日に於て築城工事を整へ、十個の永久性砲壘を備え、備砲の口徑射程亦必らず日本軍に優越なるべく、最近式の大要塞として、具備すべき數段より成れる堡壘、塹壕、散兵壕、地雷、鐵條網等を設け、是等は皆凡そ必要の地點に配列せられ、又探照燈の光力に依れる利便を具へ、嚴然たる武裝は、毫も彼等をして陥落の悲況を夢想せしめず、かゝる防守力は、最終に達すべきものとせるに相違なきなり。地頭の南側面を見るに、陣地の右側面たる柳樹屯岬角に於ける重砲の威力は、日本砲艦をして紅灘套より、東南海岸に接近する能はざら

しめ同時に露國砲艦はこゝに在りて、有力なる助力を其防禦軍に與ふるを得たり。左側面たる金州灣に在りては、日本海軍の爲すがまゝに放置せられたりと雖も、海底深く、小砲艦にあらざれば、其有効射距離に達する能はざるのみならず、是等の小艦の接近は、一方砲臺の瞰制する所となり、其重砲は是をして其目的を得せしめざるは勿論なり。而るに南山陣地の一の不利なる點は、東方四哩にして海拔二千二百尺を有する高地ありて、露軍陣地を瞰制するが故に、敵は時日を與ふれば山腹に砲臺を築造し、露軍砲壘を威伏するに足るべきなり、此方面の地點に於ける日本軍の野砲は、露軍の野砲位置を瞰制するの利便を有し、軍司令官其指揮の發原點を、ここに撰定したるは正當なりと謂ふ可し。露軍の不利は此一點のみ、其陣地の狹窄堡壘の強大、側面の安全、守備隊の防守力の過剩等一として、其防守の優勝を示さざるはなし。此強大なる防禦力、其兵力を見れば、一個師團八千乃至一萬二千の兵員攻城砲を有すること五十門、又は五十門以上、速射砲を有すること十六門の武力を以てし、歩兵の正面攻撃のみの外、攻撃の手段なき平原に於ける歩兵が、三千米突に亘れる強大なる築壘に向て、行へる突撃に抗すること能はずとせば、予輩は露國の

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第三節 第二軍の前進 四九九
旅順包圍戰(即固定性目標) 及浮動性目標) B 南山攻撃戰一下

成功は如何なる陣地を適當とするものなるやを知る能はず。日本軍此大難關前に行進し、直に之を攻撃するは其兵を危険に陥るゝものなることを知れり、其偵察に數日を費やしたるは至當なるのみならず、其方法は戰術上大に研究するの價値あり。日本軍は徐々其敵に向て接近し、尙金山より南山に向へる崖路に凹地を求め、こゝに其威力を伏せ、猛然一搏の時機を待てり。其理由は未だ詳ならざれども、露軍は居然として金州城に據りたり、其第一行動は二十五日南山陣地よりの砲兵の牽制に藉り、守持の必要な地より退走したることこれなり。金州を失ふも、露軍の不安を來たすの虞なく、唯僅かに日本軍の一步を進めたるに過ぎざるなり。此上は尙ほ本戦に移らざるべからず、本戦に移るには其決斷を要する事情あり、若し重砲の到着を待て、本戦を開くとせんか、之に要する時日を待たざるべからずと雖も、天正に夏季に近く、雨季の來る五六週に逼れり、是軍司令官の決斷を要する事情なり。試みに思へ、若し其攻撃に敗るゝならば、戰略上の滯滞を見る同一なるのみならず、其損害は更に大ならざるべからず、重大なる其責任に考へ到れば、其全軍の運命を一時に決すべきは、正常なる決斷なりと謂ふべし。攻撃計畫に基き、砲艦

隊は筑紫平遠赤城鳥海、及水雷艇を合して金州灣に入れり。是等の艦艇の砲力は、六吋砲一門、七吋砲五門、八吋三門、十吋クルップ砲二門、四十斤砲四門、合計十五門にして、是を以て露軍の攻城砲五十門に對抗せんとす。二十六日黎明より開始せられたる攻撃に於て、是等の砲艦は灣内に進入し、其優越せる可動力を利用し、蘇家屯及後方の砲壘を猛射し、赤城鳥海、二小艦は海岸に接近して猛撃し、總進軍の側面、及其正面を掩護せり。陸軍は午前二時三十五分を以て戰鬪を開き、金州城を陥れたるは五時二十分なり、更に地形上の拒まざる限り、其廣正面を以て前進を繼續せり、此前進を掩護したるは即ち砲艦の砲撃及尙金山腹よりする野砲の威力に依れり。中央より第一師團右翼より、第四師團を進め、午前十一時砲戦は明に日本砲兵威力の勝利を示し、露軍砲火は沈黙し、日本軍は砲壘に突撃せり。而れども掩堡内に於ける露軍は尙ほ死守して退かず、銃眼より猛射し、且つ諸障礙物は容易に日本軍に途を與へず、紅涯套に於ける露國砲艦亦左側より砲撃を行ひ、歩兵攻撃に少なからざる防害を與へたり。此場合に至り、日本軍は再び砲火集中の必要を生じ、砲撃天に震ひ、其威力は終に露軍の退却を促かし、激戦十六時間を経て、終に日本軍第四師

團蔭然砲壘に突撃して之を奪取し、他の師團亦續て他の砲壘を領するに至り、半永
 久の堅壘は全く日本軍の手中に歸し、諸口徑砲六十八門、機關砲十八門皆擧て之に
 歸し、以て防守の頑強なりしを立證せり。成功の大、此の如きを得んと欲せば、勢其
 犠牲も亦多大ならざるを得ず、三千五百を算する日本の損害決して訝るに足らず、
 五百以上の露軍の戦死より推算すれば、其損害は二千に上るや明白なり。日本軍
 は此長時間の激戦を終るや、尙ほ追撃を續行し、翌二十七日の拂曉を以て南關嶺を
 其手に收めたり。露の敗兵は南關嶺より更に南三十里堡を越え、旅順口方面に驅
 逐せられたり。南山は素より南山なり、旅順口にあらざると雖も、日本軍が此の如く
 其攻撃の林幹勇耐を現表したるは明白にして、露人たるもの此種の能力が、旅順口
 要塞の上に加はるべきものとせば、當に慄然たるべきなり。想ふに其強大にして
 堅固近くべからざる堡壘を以てし、守るに其優大にして而かも精銳なる軍隊を以
 てし、一切の状況皆其己れに利にして、加ふるに砲力の優越を以てし、而かも一日を
 待たずして、日本軍の掃蕩する所と爲る、露西亞大帝國の威武聲名の震撼、此の如き
 こと未だ曾てこれあらざるなり。予輩は露軍の其然りし所以を見ると同時に、日

本軍が鴨綠江に於けると同じく、遺憾なく陸海共同の働作を遂行したるは、史上無
 比の例を示したることを斷言することを憚らず。此一勝に依りて、旅順口に進軍を
 續行し、之を封緘するを得、猛烈果敢なる攻撃は直に演出せらるべし。唯茲に注意
 すべきは、日本軍が單に旅順口を封緘するを以て目的とし、陸而より之を決行せん
 とせば、南山戦を行ふの必要なかるべく、常に宵金山及金州を圍繞し、半島露軍をし
 て多大なる犠牲を供するにあらざる限り、脱出する能はざらしむべきなり。南山
 の一戦は、日本軍の目的、單にこれに止まらざるを證すると同時に、旅順口の爲めに
 戦慄すべき前兆なりと謂はざるべからず。南山の一敗は、クロバトキン將軍の計
 畫に對し、如何なる關係を及ぼす可きや、其準備の程度より推測せば、こゝに戦ふべ
 き意志に之を測り知らざりし所以の理、山を發見すべからず、クロバトキン將軍をし
 て戦はざるに先たち、其數字上の威力を以て、之を提て進出せしめたらんには、或は
 有利の位置に立つを得たりしなるべく、而かも今は已に敗戦二回二個の孤立より
 生じたる敗戦に依り、砲門を失ふ一百六、兵を損する三個師團の精銳部隊、五千の死
 傷を以てし、旅順口は、其生命を決すべき場合に陥れり。將軍が退却を行ふには、尙

ほ餘地を有すべしと雖も、最早文字と並行する能はざるを見るなり。今は已に災害にあらず、正に其敗跡なるを示せり。露京は正に其元首の即位記念日なり、此日を以て敗報を手にし、之を耳にし、滿都悒々たり、是れ寧ろ驚くに足らず、惡戰争を行はしむるものは惡政策なり、汚れたる酒盃は、政策が其用に供へたる所なり、杯底の滓も、之を盡さざる可からざるべし」と。又戰術上正面攻撃の可否に對する評論としては、「戰報に依りて考ふるに、露國陣地は、初報よりは西南方に位置せられたるが如く、ステツセル將軍は其簡單なる戰報に於て、其指揮退却の命令に對して其責任を明にし、敵の砲兵威力、及金州灣に於ける日本砲艦の砲火を以て、其退却の原因と爲したり。此一戰は長へに一模範として後來に傳へらるべきものなり。日本軍が其智勇果斷は如何なる陸軍を以てするも、其奏功に困難なるべきものに奏功したるは、日本軍隊就中將官に歸せざるべからず、クロイツァイングは這般の問題に於ける、獨逸の學說の正理なるを主張するも、是れ已に南亞の實蹟に於て終決したるものなりと云へり。

D 得利寺遭遇戦……上……偵察戦

第二軍は已に南山を陥れ、南關嶺柳樹屯青泥窪を占領し、敵を旅順方面に壓迫し、包圍軍としては乃木將軍の軍之に代れり。奥將軍の率ゆる第二軍は、北向して敵の移動性主力に向て前進せざるべからず。此頃に於ける敵情を見るに、クロバトキオン將軍は旅順を救援せんとして、スタケルベルグ將軍指揮の下に、強大なる兵力を附與し、漸次南下し來り、今や得利寺附近に在り。

第二軍騎兵隊の一部は、五月三十日正午山家屯に於て、露軍の騎兵得利寺に在るを偵知し、之を撃破せん爲め、騎兵一部隊をして先づ田家屯に在る騎兵約三中隊あるを攻撃し、其の退却するに乘じ、跟随して之を追撃し、張家屯に至り、更に新に騎兵二中隊を破り、龍王廟に出でたる時、歩兵五六中隊(歸還將校の談として五月十六日時事新報紙上に在るものは三個中隊と爲しあれども)予盟は公報を取る騎砲兵一中隊の陣地を占むるに會し、騎兵隊は再び之を攻撃し、午後六時之を得利寺方面に撃退せり。此夜騎兵隊は觸接を保ちて得利寺附近に停止したり。又騎兵隊の一

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戦(即移動性目標)…… 第三節 第二軍の前進 五〇五

旅順包圍環備戦……(即固定性目標) D 得利寺遭遇戦 上 偵察戦

し、午後三時頃より日没に至るまで砲戦を繼續せり。日本軍は得利寺附近の露軍を攻撃せんが爲め、左縦隊をして賈家屯より温家屯北方高地に亘る線を固守せしめ、中央縦隊をして夜間を利用し、賈家屯附近より大陽溝西方高地に前進せしむ。此朝濃霧冥濛たり、午前五時三十分砲火を開始し、砲戦漸次激烈となり、つゝある間に中央縦隊の復州河以北の地區は、漸次苦戦に陥りたるも、其攻撃前進は着々進捗し、加ふるに此日黎明復州方面より急行せる歩兵及砲兵より成る一隊は、午前九時三十分王家屯西方高地に達し、中央縦隊と協力し、午前十一時大房身附近の敵兵を驅逐するを得たり。然れども龍潭山山嘴及び龍王廟高地に在りし露軍の歩兵は、猛烈に此方面を射撃し、中央縦隊及び復州方面より來りし一隊、此猛火を冒し、險岸峻坂を攀登して前進せるも、右縦隊の右翼隊方面の露軍は、依然優勢を以て之に當り、數ば攻勢に轉せんとせり。因て日本軍の總豫備隊たる歩兵を前後二回此方面に増加す、之より先き、右縦隊の右翼隊の方面危急を告ぐるに至り、騎兵部隊は又右縦隊の右翼に到着し、之に連繫して猛烈に露軍の左側背を脅威せしめたり。是に於て露軍は全く包圍中に陥りしも、頑強にして屈せず、しかも敵の後縦隊戰場に

第二編 本紀 第五卷 遼陽方面の進軍(即ち移動性目標) 第三節 第二軍の前進 五〇七
及野砲隊目標) (即ち固定目標) 聖得利寺附近 下

部は曲家屯に位置して、敵情偵察中、午後零時三十分より、漸次露軍歩兵の壓迫を受くるに至りしより、急に各隊を警急集合して、陣地に就き、午後五時半頃に至るまで歩兵二千騎兵若干砲兵一中隊より成る露軍を拒止して、終に之を得利寺方面に撃退せり。日本軍の損害僅少なり、下士卒即死四員、傷四員、前面の敵情を見るに得利寺附近の露軍の兵力は約二個師團にして、大房身より城子山に亘る陣地を占領し居れり。

E 得利寺遭遇戦…下

六月十三日日本軍は普蘭店大沙河の線を出發し、右縦隊を大沙河に沿ひ、中央縦隊を鐵道に沿ひ、左縦隊を吳家屯復州街道上、四川溝を大河崖に通ずる道路に沿ひ、騎兵部隊を皮子窩熊岳街道を前進せしめ、各縦隊は其進路上の少數の敵兵を驅逐しつゝ前進せり。十四日左縦隊は、那家嶺附近に達す、右縦隊及び中央縦隊は、相連繫して得利寺南方約十二吉羅の趙家屯より太平溝の線に達す、露軍は大房身より北部龍王廟に亘る線を占領するを知り、更に進んで王家屯、龍家屯、虞家屯の線を占領

し、午後三時頃より日没に至るまで砲戦を繼續せり。日日本軍は得利寺附近の露軍を攻撃せんが爲め、左縦隊をして賈家屯より溫家屯北方高地に亘る線を固守せしめ、中央縦隊をして夜間を利用し、虞家屯附近より大陽溝西方高地に前進せしむ、此朝濃霧冥濛たり、午前五時三十分、砲火を開始し、砲戦漸次激烈となりつゝある間に、中央縦隊の復州河北の地區は、漸次苦戦に陥りたるも、其攻撃前進は着々進捗し、加ふるに此日黎明復州方面より急行せる歩兵及砲兵より成る一隊は、午前九時三十分王家屯西方高地に達し、中央縦隊と協力し、午前十一時大房身附近の敵兵を驅逐するを得たり。然れども龍潭山山嘴及び龍王廟高地に在りし露軍の歩兵は、猛烈に此方面を射撃し、中央縦隊及び復州方面より來りし一隊此猛火を冒し、險岸峻坂を攀登して前進せるも、右縦隊の右翼隊方面の露軍は、依然優勢を以て之に當り、數ば攻勢に轉ぜんとせり。因て日本軍の總豫備隊たる歩兵を前後二回此方面に増加す、之より先き、右縦隊の右翼隊の方面危急を告ぐるに至り、騎兵部隊は又右縦隊の右翼に到着し、之に連繫して猛烈に露軍の左側背を脅威せしめたり。是に於て露軍は全く、包圍中に陥りしも、頑強にして屈せず、しかも敵の後續隊戰場に

第二編 本紀 第五章

遼陽方面前進戦(即移動性目標)……
旅順包圍戰(即固定性目標)……
及浮動性目標)

第三節 第二軍の前進 五〇七

E 得利寺遭遇戦…下

到着したるが如く、數々逆襲を以て戦況を挽回せんとせしも、遂に日本軍の攻撃力に抵抗すること能はず、午前三時頃より退却を始め、追撃射撃に依り潰亂せり、然れども日本軍は地形上、猛烈なる追撃を行ふを得ず、此夜戦場に依り潰亂せり。此日左縦隊の主力は、高家屯附近に於て、北方に對し陣地を占領し、軍の左側を掩護しありしが、午前十時五十分、露軍の歩兵約七八百、高家房身より西龍口を経て、吳家屯方向に退却するを知り、歩兵二中隊砲兵一中隊を吳家屯東方高地上に差遣して、之を待てり。午後一時後に至り露兵豫想の如く龍口後以西に退却し來るを以て之を猛撃し大に損害を與へたり。此日戦鬪に參與せし露軍の兵力にして、初より陣地に在りしものは、歩兵二十五大隊騎兵十七中隊、砲九十八門なりしも、戦鬪

クロバトキン將軍の報告の要領に曰く、戦鬪は六月十四日早曉より開始せらるる午前六時半頃スタケルベルク將軍は日本軍の右翼に迫り午前十時に至り騎兵の數部隊を撃退せらるるスタケルベルク將軍は敵の行動を防止せんとし豫備隊を前進せしめたり六月十六日の朝日本軍は著しく増援せられたり露軍に於てはクヴァストンノフ大佐戦死、ゲルンケロス少將負傷將校の死傷約三十名、下士卒の死傷三百十一名あり
スタケルベルク中將の六月十四日附露帝へ電奏の要領に曰く本日正午日本軍は五房店の南四哩半なる露軍陣地を攻撃して兩軍の會戦となり敵は我左側を攻取せんとして數次突撃し來り露軍は攻撃軍を撃退して陣地を維持せり我左側を守れる第一聯隊は大損害を受け聯隊長クマストーノフ大佐及副官ドラゴスラフ、ノドチンスキ中尉は共に戦死しゲルンケロス少將は下顎骨の右側に榴霰弾片を受けて傷甚しし留つて戦場より退かさざりし

間更に後方より増加せし部隊あり、其死傷詳ならざるも、戰場遺棄の死屍は右縦隊方面のみにて約六百にして、軍旗及速射砲十四門等を鹵獲し、捕虜は第四聯隊長以下將校六、下士卒三百なり。此役日本死傷將校以下千六百六十三、露軍の第一師團長ゲルンケロス將軍負傷し、狙撃歩兵第一聯隊長戦死し。其他死傷頗る多し。

(スタケルベルク將軍の報告に依れば、死傷三千四百十三人なりと記すれども、實は向ほ多數なり)敵は日本軍の兵力を以て三萬五千、内騎兵八千ありと測算せり。露軍の南下運動は、此の如くにして已に失敗せり、之に關する軍事批評家の所論を見るに、少なくとも五個師團より成り、中に第五第十一師團を包含せる日本軍は五月十九日(第二軍の上陸開始は五月五日にして)金州攻撃の爲め露軍の前面に兵力を集中せしは五月十六日なり)より六月一日に至りて、第一軍後方及左方上陸したりとの報導は、インワリッド新聞に依りて傳へられたり、同新聞の所報は、露國參謀本部

又クロバトキン大將の十六日附電奏要領に曰く六月十六日午前一時二十分スタケルベルク中將ヨリ左の報告を接せり
昨(十五日)敵の右側を攻撃せん意圖を以て我軍隊を部署し將に敵の右側を繞圍せんとするに當り日本軍は却て優勢の兵を以て我右側を攻撃し來りたり已むを得ず三道北方に退却せり我軍の損傷重大なるも未だ其の數を詳かにせず戦鬪中砲兵一旅團の第三第四兩大隊は日本軍の砲彈の爲め全く撃破せられ大砲十六門中十三門は全く用をなさざるまでに破壊して戰場に遺棄したり

の見る所として信を措くに足れり。六月一日付クロバトキン將軍の報告に徴すれば、日本軍の所在は秀巖を距ると九里の地點なり、又五月三十一日を以て一旦賽馬集を占領し、尋て之を撤退したるに徴するに、是れ新聞所報との一致を示す所に於て、若し二個又は二個以上の軍團が八個師團より成り、鳳凰城附近に在りとせば、之に對する露軍の勝利は期待すべからざる所なるのみならず、其南下は露軍の危険を増すの外なかるべきなり。而かも南下線に於て、露軍の存在せしは五月三十日の戰報之を證する者なり。露國公報は瓦房溝なりと主張し、我が接手したる情報に更に南方なる李家屯なりと報告せり。又露國第一の公報は、此役日本軍の参加兵力は歩兵八個中隊機關砲四門より成り、露軍はコサック兵境界守備隊砲兵約一個中隊なりと云ひ、第二の公報には日本軍は三個大隊の豫備隊を有じたりと爲せり。露軍の兵力中、ウスリー哥索騎歩兵旅團の存在し、ネルチンスク第一聯隊哥索聯隊を含みありしや明なり、何となれば露軍よりの報告は、枝隊司令官としては之れが旅團長として知られたる、サムンノッフ少將なりと云へるを以てなり。此隊に附するに、境界守備隊及騎歩兵若干を以てしたるならん。日本軍の兵力中に、一獨立

旅團の存在したるは、其報告中に騎兵第十三聯隊の語のあるに徴して知るを得べく、歩兵は二個聯隊の存在せるは明あれども、全兵力は明白ならず、一門の野砲を參加したることなかりしが如し。戰團の目的として、日本軍の計畫を推考するに、第二軍が金州に於ける行動を容易ならしめ、露軍をして之に妨害を爲さしめざらんとするに在りしものにして、與軍の後衛としての行動を遂行したるものなり。露軍の南下運動は殆ど無謀なりと謂はざるべからず、金州に於ける戰團の結果未だ明ならざるに當り、サムンノッフ將軍の南下したるに對し、適當なる評辭なきのみならず、更に將軍に次ぎて露軍の大部隊の南下を見る如き報導は、露國將帥の發狂に出づるの外、殆ど信ずべからざる無謀の暴舉なりと謂ふべきのみ。再言す半島への南下運動は、無算の甚しきものなり、此の無算を冒したるの結果としては、得利寺に大敗せざるを得ざるに至れり。其責任は何人に歸すべきや、クロバトキン將軍にして其責任にあらずとの證明を示すに至らざる限り、將軍其責に任ぜざるべからず、或は司令官が一切の機會を逸せざらん爲め、之を把握することを其軍隊に附與せしならんは、其敗必ず汚辱にあらずとするも、遠く孤立して其後方と離隔せ

しめたる以上、假令其成功を見ることあるも、尙ほ且つ之を其得る所見るに足らざる地點に放置し、強大なる敵軍の犠牲に供用するは、万一だも其勝利を期すべからざるなり。加ふるに此戦闘に關する報導殊にクロバトキン將軍の報告が、電報の斷片を接合し、人をして其要領を得るに苦しましむるものあるに徴し、事實の錯雜せる報導を取てするは、是れ必竟露京に於ける官僚の筆削を下したるに依るものなるべし。日露兩國の報導中、予輩に知らしむる程度に於て、之を批判せんに、第一の場合に於て露軍は運動遲緩にして終始防勢に立ち、僅に試みたるものは其望みなき逆襲のみ、日本軍は其猛烈なる攻勢を以て兩側面に於て敵を包撃せんとしたるものなり。同軍の參加兵力は正確なる報告を得る能はずと雖も、露軍スタケルベルグ將軍の率ひたる部隊は、東部西比利亞狙撃兵第一第二師團及びウスリー高索旅團の一部なるが如く、日本軍の兵力は露國側の報告を假に正確なりと見て、第五、七十一の三師團なりしならんか、日本側の報告に依り之を考ふるに、スタケルベルグ將軍が歩兵約二万五千人、外に他兵種部隊を手中に收めたるものにして、即ち露軍の兵力二個師團又は二個師團以上ありたりと見ざるべからず。而して日本

軍自身優勢なりと信ずるが如く、實際其戦闘の狀況より見るも、三個師團の兵力を有せしや明なり唯露軍が二個師團、若しくは二個師團以上の兵力を有したるに比例し、僅に五百の死傷を以て其軍の精神たる軍旗を棄て其精銳の武器たる速射砲を遺棄したるは、偶々其損害に依りて退却するに至りたるにあらずして、日本の兩側面に於ける包擁運動は、遮斷を生ずるを恐れ、倉皇狼狽陣地より逃退したるに原因したるを知るに足れり。十五日午後十時より、般々たる砲聲は牛莊の南方に響き、宵を徹して其の音響を聞けりとは、是れ牛莊より傳へられたる情報なり、又他の情報に依るに、蓋州及州東十八里の一點點には露軍約三万五千の兵力存在すとあるに徴すれば、南瓦房溝戰の砲響を傳へて牛莊に聞へたるに限らざれども、其根據はスタケルベルグ將軍の率ふる聯隊の行動に孕みたるものなるべし。秀巖に於ける日本軍にして、將軍の退路を遮斷せしならんには、其敗餘に受けたる損害、更に甚大なるものありしならん、今や假令クロバトキン將軍の責任にあらずとするも、其受くべき非難は免かるべからず、是れ一敗一戰の問題にあらずして、將軍が大軍隊の統率指揮に堪ふるや否やの問題なり、將軍が其之れ堪えざるの證明は、鴨綠江

の一敗已に之を示すと雖も、是れ尙ほ副將の過失に歸し得べからざるにあらざれども、其敗後に於ける黒木軍前面の其軍隊は、何の爲す所もなく自由に敵をして其陣地を鞏固にし、後方を豊かにし、偶々爲したる逆襲は無謀なる小企畫に成り、常に敗退の不結果を見加ふるに、金州の敗戦、旅順半島の精銳三万を空しく敵の檻中に委し、更に加ふるに南下運動に依りて其失敗を重ね、不幸にも予輩の斷言を事實にし、立證するに至れり。予輩はクロバトキン將軍の位置の如何なるものなるかを知らざるにあらず、其位置の困難は知る所なりと雖も、其重ねたる失敗は、指揮材幹の不足を示すものなるを如何せん。今夫れ兩軍の戰術的能力は、六月十五日の戰鬪に於て明かに表示せられたり。其一般の結果に就き斷定を下せば、露軍の兵力は歩兵卅二個大隊砲兵一個師團、及三個師團の所屬砲兵の砲九十六門、總參加兵數三万五千となすは正確なりとすべし。日本軍の兵力は、歩兵三個師團、騎兵一個旅團を有し、其砲兵に就ては露國側に於ては、露軍砲兵の倍數を有したりと爲せり、然れども日本軍が果して此の如き砲兵部隊を戰場に有せしや否や明確ならず。スタケルベルグ將軍は彼の操典に於て、軍團の取り得べき、前面の狹縮面を取り、古代

兵法を以て對戦したるものにして、彼の其信を最精兵器の力に重きを置き、其理想と訓練に於きたる日本軍が展開面の兩翼は、露軍の兩翼を包擁せんとし、其中央部隊は性質以上の活動を現したり。スタケルベルグ將軍の部下軍隊は、其經驗に依れる必勝を信すべき訓練に依り、敵前面及右翼に對し、攻撃運動を起し、其進行中に方り、日本軍は其背面を攻撃して、哥索兵及龍騎兵を驅攘し、露軍の右翼は危險に陥りたり。スタケルベルグ將軍の其豫備隊を赴援せしめる結果は、中央部隊の補充を缺き、中央部隊其補充を缺きたる結果は、攻撃運動を轉じて退却の止むなきに至り、退却部隊は敵の急迫を受けて大損害を生じ、日本軍の加ふる側面の攻撃益猛烈なるに際し、狹縮陣地は火力の集中點となり、第二のセダンたるを見んとするに至りたり。此の如きの狀況をして繼續數時間に及ばしめば、露軍は其隻兵も網中より洩るゝとを得ざりしならん。退却命令の下りたるは、殆んど其最終の場合にて、一少部隊たりとも、其武器を失はずして退却し得たるは、クロバトキン將軍正に其大幸を祝すべきなり。露軍は此の退却運動を回護せんとして、頻りに日本砲火の威力激甚なりしを稱す、而れもスタケルベルグ將軍の陣地に在ては、古代砲銃の力

尙ほ同一の損害を興ふるに足れるものにして、日本軍の砲銃をして速射砲ならざらしむるも露軍は尙且つ之を防守する能はざりしや明なり、何となれば兩側面は包擁され、背後に於て敵の射程は、皆共に有効適當なる場合に在りて、自己の陣地軍隊は敵前に裸曝す、此の状況に在る軍隊は人間以上にあらざる限りは、齊しく此の運命に會せざるを得ず。此の如き場合を生ぜしめざるは、即ち是れ將帥の責務なり、其損害の數は實際三千二百に上り、敗餘の軍隊は午後三時より夜間に亘りて遁走二十二哩に及び、其翌尙ほ遁走を繼續し、隊伍錯雜衰憊して漸く蓋平に達したるが如し。岫巖よりせる日本軍が露軍の退路を絶たんとするの時機、己に後れたるの觀ありと雖も、此軍隊の性質、及行動の方針は未だ明知する能はざるものあり。又得利寺に於ける日本軍が露の敗軍を追撃すると能はざりし一事は、稍々非難なき能はざれども、學理上言ひ易くして實際に行ひ難きは追撃なり。當時日本軍は且つ戦ひ且つ進み強行軍を行ふと四日に亘り、其第五日に於て得利寺の會戦を見る、其損害亦尠少なからざるのみならず、展開したる軍隊は、稍紛錯の状なき能はざりしなり。組織立ちたる軍隊を以て、倉皇狼狽唯奔竄をこれ事とする軍隊に、追及

し得べきや否やは保證すへき限りにあらず。又援軍其敗兵に合し、更に逆襲し來るやも計るべからざるが故に、日本軍司令官が其兵を給養し、凡ての補給を充すに勉めたるは、寧ろ至當の所置なりと言ふ可し。

F 蓋平占領戰

第二軍は已に、十五日大に露軍を得利寺に破り、二十五日午後其の一部を以て、進んで熊岳城を占領せり。蓋平を距ること己に八里程に在り、我が軍勇を養ひ漸次其準備を整頓し、七月六日午前九時其一部隊を以て、四方臺東北方約一里の山頸、及四方臺北方約一里の山頸を守備せし、歩兵約千六百名を驅逐して、其山頸線に止まれり。此地に在りし露軍は北方に敗走す。奥軍の主力は、其進路上に在りし敵騎を驅逐しつゝ、前進し金家勾より小藍旗を經て二道河の線に達し、左翼の一部は崔家屯の高地を占領せり。尙ほ砂崗臺附近に在りし露兵を驅逐して、正午頃營子溝より大望海寨東方の高地に亘る線に達せり、露軍の歩騎砲兵の若干部隊は奥軍進路上に在る險隘に於て逐次に抵抗を試みつつ北方に退却せり。此時に於ける敵狀

は其主力は蓋平附近に約二萬、海山塞に約二千同地附近に約一万の兵力ありて蓋平北方高地及西臺附近の高地には砲兵を備え、又大石橋附近には依然敵兵駐屯しありて、漸次増加する者、如く、其占領域は海山塞附近より蓋平附近に渡る間、及西臺北方高地附近に至り、八日午後一時頃より鐵道列車を以て、海山塞附近に軍隊を下車せしめつゝあり、又湯地南方約二里の花紅溝附近にも敵兵あるもの、如し、日本軍之を攻撃するの目的を以て、軍を四隊に分ち前進せり。露軍は沙崗臺、北嶺、鳳山等の高地線に據り、主力は山地に在りて之に對抗す、我が中央隊は鳳凰山に、右翼隊は北嶺に、左翼隊は沙崗臺に向ひ攻進し、午後六時中央隊は鳳凰山線を占領し、右翼は徐家屯及老爺廟より鳳凰山に進み、左翼は沙崗臺の高地線を占領し、其夜占領線に露營し、八日更に敵情を偵察し、九日午前一時を以て運動を起し、黎明蓋平河附近に達す。露軍對峙の状況を見る露軍は蓋平北方の東西双頂山及其右方大平屯高地、細河屯高地に據り、第二軍は

日本軍は我軍に追越し彼我砲火を交換したり日本軍は蓋平南方八哩の地點に至りて停止し街道上の戰團は劇烈なりしも我損傷は少數なり蓋平附近には五日以來屢小衝突あり且つ陣地を擁護せんとするもの、如し五日我二個大隊の兵は東方の丘上に於て日本の六箇大隊の爲めに包圍せられ退ひて蓋平に入り六日の朝我兵は強大なる日本軍が南東丘上に於て陣地を占據しつゝあるを報告したり七日エウハルトの大

左翼は太細二高地に對し、其背後に豫備隊を置き、中央隊は東西双頂山に面し、右翼は本道右後方に機命の到るを待てり露軍は其據るに險要と防禦の堅固とを以てし、地利は其の占むる所なり、故に正面より之を攻撃するは策の得たるものにあらざるのみならず、右翼方面山地線は錯綜交又する爲め、兩軍接近の度を過ぎ、若し露軍の左翼にして日末軍の右翼側背に回轉せば、其不利云ふべからざるものあり、是を以て強力なる一隊を右翼に附加したり。曉光正に地平線上に動けり、砲兵の各部隊は陣地各側の位置より砲火を猛射せしも、露軍之に應射せ

胆なる偵察を熊岳城まで進みて爲したる結果二箇師團の日本軍が二縱隊となり並行して我左側に向ひ進軍中なること及び其本隊は花紅溝にあることを見たり八日早朝蓋平の南方及東方の小丘に於て撤退せられたり然れども日本軍が今や突出し来る可きを知り居たり是れより先き我既に蓋平以河の鐵橋破壊し河堤に沿ひ強固なる壘を築き作れり此朝日本軍は露路より進軍を起し其砲は樹林を用いて巧に之を掩蔽せり敵が我歩兵と猛射を交換しつゝ、約二百ヤード前進しつゝありし間に別箇の縱隊あり谷地を廻りて我左側を包圍せんとし我前哨と衝突し次で停車場の背後にありし我砲兵は射撃を開始し同方面に於ける敵の前進は拒止せられたり我軍は河の對岸に騎兵一箇中隊、歩兵一箇大隊を有し日本縱隊と激戦の後遂に之を敗走せしめたり此時一箇の日本騎兵部隊西方より海山を迂回せんとし我砲兵の爲めに擊退せられ正午に至りては敵の前進凡ての方面に於て拒止せられたり而しては敵は漸次兵數を増加して丘上に集め砲兵亦時々射撃を爲せり此夜兩軍は各自其陣地を守持して夜を徹せり敵の準備隊は急速に到着し來り翌朝攻撃の目的を以て集中を爲し居たりも我は出來得る限り靜に撤退の準備を爲せり日本軍の前進は未明を以て開始せられ三十五箇大隊の歩兵は猛烈として河を突過せり彼等は其抵抗無く火を放ちたる倉庫の之に燃せし一事に驚きたるなり我砲兵は敵進軍に先ち既に退却し北方に陣地を占め我退却

ず、蓋し砲兵は已に退却したるが如し。
(露軍公報参照)我軍猛然蓋平河を涉り、其中央隊は蓋平の北方に於て敵と接觸して之を撃退す。右翼隊は東部高官屯の露軍を撃攘して前面の高地に洩り、左翼隊も亦前進して海山寨の敵を撃攘しつゝ、西双頂山高地線に洩り、全線正に戰酣なり。

を迫撃んとしたる敵に對し榴散彈を猛射せり敵の前衛は街道の兩側にある平原并に東方なる小丘間の隘路を占めしが其前進は速射砲、機關砲の爲めに阻止せられたり。銃戦は殆ど無く我木隊は既に北方に進みつゝありて少數のロシア兵砲兵を掩護せんが爲め後衛にありしのみ正午日本砲兵到着しロシア騎砲兵を攻撃したるも我は強ひて陣地を固守せんとすること無く新陣地に退けりペンツアンに残りて歩兵の退却を掩護し居たる我砲兵の全部は日本軍の前進を待受け之を射撃しスタケルベルク將軍は最終の時期まで居残り居たるものゝ如し。

午前十時に至り、東西双頂山に據り、頑強に抵抗せし露軍も、漸次大石橋方向に退却し、日本軍北るを逐ふて、全く敵陣地を占領したり、小泉少將此役に傷く、追撃軍に對し、露軍の砲兵は紅旗廠、腰嶺子、石佛等の高地に在りて砲火を送り、其退却を援護せり。日本軍死傷百五十三名を算す。此役小泉少將の率ゆる兵團は、上陸以來の初陣にして、其戰闘は特に此役に重大なる功蹟を顯はしたるものなり、其參謀某少佐の手記の一節に云へるあり。『其攻撃前日に於ける兵團前面の敵狀を見るに、敵は海山寨附近より、蓋平城北方を経て、蔡家屯附近の高地に渡る線を占領し、尙

西臺北方高地にも敵兵あり、又地形としては我前面一帯の畑地は、高粱の生長すること五十珊乃至一米突に達するも、甚だしく諸兵の動作を妨害するに至らず、放列の如きは反て半遮蔽の利益あり、而して地圖上の道路は諸兵の通過に自在にして、且蓋州川は東邵家屯附近を除き、該地點より上下流域約三千米突の間は、歩騎兵の徒渉を許すのみならず、若干の作業を施せば砲兵も亦通過し得ることを偵知したり。此時兵團は軍の諸兵團と共に、前面の敵を攻撃するの目的を以て、先づ可頭寨、古家子李家庄に亘るの線を占領せんが爲めに、左翼隊たる小泉少將は、同夜其歩兵先頭を以て、東二臺子の東端を出發し、尙河寨北側を経て小米寨に在る師團の右翼と連繫し、又右翼隊なる飯田少將は、同時刻迄に東二臺子の南端、復州街道の東側に集合し、左翼隊に續て出發し、尙河寨花園坑を経て北部可頭寨より古家子に向て前進し、砲兵部隊も亦午前四時迄に、古家子東側及西側に於て、主として東西雙頂山を射撃せんとし、司令部は諸兵及砲兵の後方に續行して、花園坑に至らんとす。此夜諸隊は豫定の如く行動を開始せしに、十二時頃に至り、李家庄、古家子附近にありし敵の歩兵部隊は、俄然射撃をなして、我が運動を妨害せし爲め、砲兵の行進には一時

大なる支障を生ぜんとせしも、我が第一線は未だ其陣地に就くに至らず、爰に於て花園坑に集合中なりし、太田聯隊の一中隊を以て砲兵援護隊に増加し、進んで此敵兵を驅逐せしむ。時に九日午前二時十分、缺月光暗くして夜色寂寥、砲兵陣地の進入は以上の状況なりしを以て、四時半に至り漸く終了するを得たるも、第一線に於ける歩兵部隊は、全く豫定の時刻を以て、其陣地に就くとを得たり。此時兵團の攻撃命令は、繆家屯附近より蓋平南端に渡る線に向ひ敵を攻撃せんとす、砲兵は天明と共に砲戦を開始し、兵團の攻撃を準備すべし、右翼隊は砲撃の成果を得ず、繆家屯馬園子附近の敵を驅逐し、東雙頂山に向ひ攻撃を行ふべし、左翼隊は右翼隊と連繫し、吳家營及蓋平南端の敵を驅逐して、其主力は蓋平城東側の地區より西雙頂山に向ひ攻撃を行ふべきに在り。五時十五分天初めて白し、先づ我砲列は東西雙頂山に向て、一齊に砲火を集中するや、續て友團の兵も亦同じく之が砲撃を開始したり。然れども敵兵よりは尙一發の應砲すら爲すことなく、僅に蓋平川右岸の村端に於て若干の抵抗を試みたるまゝ、次第に北方に退却するのみ、依て友團の第一線は、蓋平川を渡り、我兵團の第一線も亦右翼より逐次渡渉して、蓋平東方の地區に向て

前進す、砲兵部隊は此狀を見て、大隊の梯進を以て第二陣地を蓋平川左岸に沿ひ、東邵家屯東方を占領せり。六時四十分に至り、我歩兵の第一線は、踊躍して丁家屯吳家營附近に進むや、敵の歩兵約三大隊は、東西雙頂山南麓に施せる其の工事に據り、砲兵と共に頑なる抵抗を始めしかば、我砲兵は直に之に向て猛烈なる砲火を開くと同時に、砲兵掩護の歩兵は先づ古家子西側なる東邵家屯に前進を起し、敵砲火の漸く衰へるを待受け、我砲隊は渡河して逸早く天臺の東北畑地に放列を布くや、東西雙頂山にありし敵兵は、我銃砲火の激甚なるに避易して、終に退却を始めた。此に於て我は東西雙頂山に肉薄して、全く之を占領し、續て潰走せる敵を追撃して倍々突進を決行せり。七時廿分敵の砲兵約一中隊は、青石關石門の高地に現出して、猛烈なる射撃を爲し、其歩兵の一部は頭臺子及葡萄溝附近に停止して、我歩兵の前進を扼し、以て其友軍の退却を掩護するものゝ如く、此時小泉少將は大腿部に貫通銃創を蒙れり。八時二十分大久保將軍は、太田聯隊をして西雙頂山方面の左翼隊に増加せしむるの折柄、或事情の爲めに行進を遅れ居たる一部隊は、四家屯より急行して、正に戰場に到着せしかば、我が軍の兵氣益々旺盛を極め、敵の砲兵は

天臺及西雙頂山に於ける我砲火の威力に依り、全く沈黙して歩兵と共に北方に潰亂せり。午前十時友團は其一部を以て、前面の敵を追撃し、成し得れば石門を占領すべしとの命令あり。此の追撃隊たる太田聯隊は、直に前進を決行して、正午確實に石門を占領したり。時に敵の歩兵約一中隊は、碼頭咀子東方高地に在り、再び我を瞰射し、其勢ひ甚だ猛烈なりしかば、我は其追撃行動を續行すること能はず、蓋し石門附近の地形たる、讀んで其字の如く、巖石を削鑿せる狭少なる隘路にして、其西側の高地線は樹木なき急斜面なるを以て、測定したる敵の射距離内に在り、一の地物なき高地を踰へて進出すること殆ど困難なるのみならず、又我が砲兵を布置すべき陣地すら發見し得ざるを以て、午後一時に至るも、敵は尙ほ此の險峻なる山地に據りて砲撃を續行し、我兵の進撃頗る困難に瀕するにも係はず、更に勇氣を鼓して躍一躍すれば、同二時敵は愈々敗狀を呈し、其騎兵の一部を石門の北方約一里の附近に停止せしめ、其主力は全く五臺山以北に退却せり。是れ即ち我兵團が蓋平占領の戦況にして、實に上陸以來に於ける初陣の戦鬪なりとす。此日我兵團の損害は、負傷小泉少將同岩山中尉以下死傷七十二名にして、俘虜五名戦利品十數點なり

り』とあり。(東京朝日の記事
中より抄約す)

G 大石橋攻撃戦——營口占領

第二軍は已に蓋平を占領せり、其後の露軍の状況を見るに、紅旗廠腰嶺子に在りし敵の歩騎砲兵は十日以て、太平庄附近に集合し、次て大石橋に退却し、其一部は五臺山に止まりたるもの、如し。此兵は狙撃歩兵第一第九旅團に屬する部隊及騎兵隊約二十中隊、砲兵約六中隊にして、太平山、牛心山、望馬臺、青石山に亘り、堅固なる防禦工事を施こし、大石橋、郭家堡子附近に多數の幕營あり。又其後の状況に依り、日本軍は露軍の本陣地は湯池の北方後此老溝より太平嶺、青石山南部、田家屯を経て牛心屯に亘る線に在りて堅固なる防禦工事を施し、而して其の大集團は太平嶺の西北、青石山の北及橋臺舖の西に在り、前面の兵力約五師團、砲兵十六中隊、砲百門を下らざるを知れり、露軍か何か故に、其強大なる兵力をこゝに配置し、陣地をこゝに選擇せしかに就き、一考せざるべからず。蓋し山地戦に於ける敗戦に依りて、クロバトキン將軍は勝算の山地戦に乏しきを看取したるや明なり。且つや、山砲中隊

第二編 本記 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第三節 第二軍の前進

第二軍の前進

五二五

G 大石橋攻撃戦——
營口占領

を欠ぐのみならず、其乗馬歩兵の山地に活動する能はざるが故に、其自軍の長所に戦地を選択せざるべからず、是に於て彼は大石橋を選択したるが如し。蓋し大石橋は、蓋平海城間の中點、支線鐵道の營口に通ずる連絡點なればなり。今之を地圖に依りて細檢するに、大石橋の陣地は丘陵脈端に位置するが故に、日本軍其山腹に據り露軍を瞰制し得べし、大石橋の村端は一水流の右岸に位置し、此水流は多數の支流を有す、水の流位は西北營口附近に至り、遼河に注ぐ、左岸は一望香漠たる平野なれ共、營口街道約中間に於て、其南に方り標高二〇〇呎なる太平山の高丘ありて四邊を瞰制す。露軍は其頂上に築壘し、防守力を強大にし、又河の右岸には丘阜波濤の如く起伏重疊して、河流の北方大石橋村西より起り、海城附近に亘り、其高頂は標高一千尺を有る様子山なり、其麓は延て海岸に達し、築壘の點々施されあるは勿論なり、直接大石橋村の周圍、及其東方上流に亘り若干距離に跨りて平野あり。各支流の河岸は自然に陣地の存在を教ふるものにして、奥將軍の認めたる露軍の陣地は此附近を云ふなり。大石橋村落鐵道線路連絡點の西北、及北方に峙てる他の丘阜は、此北方に於て其最頂標高九百呎を有す、是等の丘脈は起伏して、時に孤立の

形狀を爲し、彼の大石橋村西の様子山頂及他方に於ける九百以上の高點との二丘脈の外に、尙ほ標高三百乃至七百呎の高點ありて、大孤山上陸軍の經過したる山地線と相連絡するもの、如く、平原は其南西に開き、此地點に於ける砲兵陣地として太平山あるに過ぎざるの形狀なるが故に、西北方よりの攻撃を誤想せしむるを免かれず。日本軍の位置より此地點に進入すべき五條の道路あり、其四條路は北の方岫巖よりし、其一是南の方蓋平よりす、北方よりする四條路は、柘木城よりするものを最北とし更に海城に至り、又大石橋村落附近河流の水源よりするものと、河流の南方丘阜より來るものとなす、戰略上の見解に依れば、大石橋を戰場として選擇するは正當を得ざるものなりと雖も、右の地理に於ける露軍の陣地は堅固なるべく其之を攻撃するの道路は、東北及北方よりするものならんか。將た何れを取らんか日本軍今や南方道路に集合す、其戰況果して如何ん。

二十三日午前四時、第二軍は蓋平附近の陣地線を出發す、各縱隊は共に少數の敵を撃退して流家溝より花見山を徑て、五臺山附近に亘る線を占領せり、此日日本軍の左翼方面には、騎砲兵各一中隊を有する敵の歩騎兵若干部隊ありて屢々抵抗せり。

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戰(即移動性目標) 第一節 第二の軍前進

五二七

大石橋攻撃戰
營口占領

日本軍は占領したる陣地内に開進し、戦備を嚴にして明日に於ける總攻撃の準備を爲せり。二十四日未明、日本軍の右翼たる諸團隊は、相連繫して運動を起し、太平嶺及び其西方標高百八十の高地及其西方の地區に向ひ前進す、午前八時頃羊草勾北方高地より、標高百八十の高地を経て孫家屯北方高地の東側に亘る線を占領す。此時露軍の砲兵は、太平嶺邊汗溝附近の高地より、盛に射撃を行へり。日本軍砲兵は地形困難の爲め、未が充分之に應戦し得べき陣地に進入すること能はず、爰に於て歩兵は掩蔽して、陣地を占領し、暫く時機を待つに至れり。中央團隊は右翼諸團隊の攻撃進捗に伴ひ、花見山附近に在る砲兵の援助を受けつゝ、前進す、午前十時頃孫家屯北方高地を占領せしも、青石屯望馬臺間に在る多數の敵砲より、猛射を受くるを以て、之より前進を繼續せず、以て右翼團隊の前進及砲兵の近接を待つに至れり。左翼團隊は初め五臺山附近の陣地に在りしが、其右方に併列せる諸團隊の攻撃進捗を見るや、午前九時其第一線を以て、牛家屯劉白塔寺の線を占領し、其砲兵は太平庄附近に陣地を占め、盛に望馬臺附近の露軍砲兵と射撃を交換せり。露軍の砲兵陣地は、右翼牛心山附近より青石山を経て、太平嶺附近一帯の高地に亘り、連綿

せる高地に數多の防禦地區を形成し、其高地は全く攻撃地帯を瞰制し、廣濶遠大な射界を有し、敵層の散兵濠には銃眼を穿ち、掩蓋を作り、且つ所々に鹿柴鐵條網地雷を設け、野戰的防禦工事殆ど完成せり、殊に其砲兵は、巧に地形を利用し、遮蔽陣地を占め、殆ど其位置の判断に苦しましむ。之に對し日本軍の砲兵陣地は、至る所不利にして、敵眼に暴露し、而かも其進入は極めて困難なり。然れども各方面の砲兵は艱難を冒して、屢々陣地を變換し、以て歩兵の攻撃を援助するに力めたるも、地形斯の如くなるを以て、非常なる苦戦に陥り、死力を盡して奮戦するも、其効力不充分にして、露軍の砲火を沈黙せしむるに至らず。軍司令官は他くまで攻撃を遂行せんとし、右翼團隊に損害を顧みず、突撃前進すべきを命ず、團隊は猛烈なる砲火を冒して前進せしも、地形不利にして本陣地の一部をも奪取するに至らずして、日没に至れり、殊に左翼團隊の一隊の如きは、非常の勇氣を以て一たび露軍陣地に突入せしむも、其陣地頗る堅固にして、然かも優勢なる敵に逆襲せられ、再び舊位置に引退するの止むを得ざるに至れり。情況斯の如くにして、彼我の砲戦は日暮と共に自然に中止せられたり、但露軍砲兵の射撃は斷續して午後九時に至れり。右翼團隊の

司令官は、軍司令官の意圖を實行する爲め、遂に夜襲を行ふの決心を取れり、軍司令官は此處置を是認せるを以て、右翼隊の司令官は、午後十時頃より其歩兵の大部を擧げて、斷然之を決行せり。團隊の歩兵は、猛然として勇進し、太平嶺附近の堅固なる陣地に突入し、遂に第一堡壘を奪取し、多数の損害を蒙りたるに拘らず、更に勇を鼓して第二堡壘に突進して之を領せり、時に二十五日午前三時なり。右翼團隊に隣接せる諸團隊も亦之に續き、山西頭附近の高地を占領す。翌天明と共に、臥龍崗附近に在る日本砲兵は先づ當面の露軍に向ひ、砲撃を開始せり。然るに、職勢前日と異なるを以て、臥龍崗附近に在りし團隊は直に前進して、青石山を占領す、左翼團隊は右の状況を見るや、前進して牛心山橋臺舖の線を占領せり、騎兵は軍の左側に在りて行動し、騎砲兵を有する優勢なる敵騎に對して、能く側背を掩護せり。露軍の主力は大石橋街道より、一部は其東方より海城方向に退却し、其後尾は砲撃を受けつゝ、午前十一時過大石橋を通過せり。日本軍は各縦隊の先頭部隊を以て之を追撃し、次て大石橋及其附近を占領せり、此役露軍の兵力は、第一、第二、第九、第三、十五師團及び西伯利豫備師團に屬する部隊にして、其砲数は約百二十門なるが如し。

捕虜將校の言によれば、滿洲軍總司令官クオバトキン將軍も戰場に在りたりと。日本軍死傷將校五十九、下士以下一千十八、露軍の損害はサハロフ中將コンドラウキツチ少將負傷し、總數二千を下らざるが如し。露軍公報に依れば、サハロフ將軍は日本軍に追撃せらるゝとなく、秩序整然として退却したりと稱するも、日本公報に依り、露軍は追撃を受け、頗る狼狽を極めたるものにして、想ふに露軍は青石山附近の陣地を堅固に占領し、此決戦を爲さんと企てたるものゝ如く、然るに夜半に至り俄に退却を決行したるの形跡あり、其原因は右翼の強襲に依り、其左翼守を失したるが爲めなるが如し。廿六日露軍砲兵約二中隊は、尙ほ虎樟屯附近に在りて、同地東方金山嶺に顯はれ、修家溝附近を砲撃せしも、次て退却し、又蓋平海城街道の一帶の露軍は退却し、二

フルツク將軍の報告に曰く
二十四日日本軍は大石橋東方并に南東に位置せる露軍に對して再び前進を開始し、戦闘は前進隊の小衝突を以て始まり、次て砲戦となり、十二時間に及びたるが此間露軍前衛の日本砲兵を沈黙せしめたり、(我軍將軍の報告に我砲兵は地形の關係上有力なる射撃を爲す能はず云々とありし)
午後四時日本軍は露軍陣地の前線を破らん、と試みたるも、突大なる損傷を被りて、撃退せられたり、夜に入り戦闘は中止となり、軍は其陣地を維持せり、別箇の日本軍大嶺、北嶺(？)の險隘より、橋木城及び海城に向ひ進軍せること發見せられたるを以て、我司令官は其受けたる命令を遂行し、日本軍に追撃せらるゝこと無く秩序整然として北方に退却したりと

千七百温家溝附近には、約三中隊の騎兵東揚樹溝附近には、歩兵一中隊を有する騎兵部隊あるのみ、又營口附近より退却したる露兵は缸瓦寨附近に停止したるもの如し。我軍の一部隊は、營口を占領し守備隊を送りて之か警備に任じたり。

H 海城牛莊線占領

第三軍は前面の敵狀に就き露軍が北方に退却を續行しつゝあるを偵察し、八月一日午前四時大石橋附近の陣地線を發して前進す、第二縱隊は露軍の抵抗を受くることなく、午前九時頃南尖山附近の陣地を占領し、第一縱隊は午後一時當面の敵を攻撃して梁家堡子附近の高地を占領せり。第三縱隊は午前五時金山嶺附近の高地を占領し、前日來露軍の占領せる土臺子、東方高地に向ひ砲兵を以て偵察戰を試みしに、露軍は退却せるものゝ如し、依て直に前進し、午前九時半頃他山浦西北方高地附近を占領せり。此時露軍の砲兵約二中隊、葫芦峪東北の高地に現れ、第二縱隊及第三縱隊の歩兵に向ひ盛に射撃す、暫くにして第二縱隊の砲兵は温家溝附近に砲列を敷き之に應戰す、午前十二時三十分、別に露軍の砲兵二中隊下夾河南端に現

れ、第三縱隊の歩兵に向ひ射撃せしか、孰れも正午過陣地を撤し、海城方向に退却せり。第四縱隊は途中少數の歩騎兵を驅逐して、午前十時頃、第三縱隊の左翼より趙家屯に亘る線に達せり。其前面には騎砲兵約一中隊を有する露軍の騎兵五六中隊、缸瓦寨附近に在りて若干の射撃を爲せしが、正午頃海城附近に退却せり。第五縱隊は劉家堡子連三屯に在る歩騎兵を撃退して該地を占領せり。露軍の兵力は總計約一師團にして、其主力は午前十時前後に於て、虎王山西麓を経て海城方面に退却せり。日本軍は斯の如く大なる敵の抵抗を受くることなく、二日八里河の線に前進し翌三日正午頃海城より牛莊に亘る線を占領せり。此日海城より東北に向ひ退却せし露軍は約二師團なり。

今や予輩は第二軍が遼陽方面に前進し、遼陽攻撃の左翼軍として、已に其位置に就ける點迄を略記せり。必竟南山戰後に於ける奥軍は、露軍の旅順赴援の爲めに起せし南下運動を撃破し、其右翼を遼陽に壓迫するに在りて、必竟南山戰後第二軍の各戰は遼陽戰の序戰なるが故に、遠大なる攻撃前提なり。讀者は唯我第二軍が如何にして遼陽攻撃の左翼となり、其前進の經過如何なりしかを概知するを得ば足

れり。遼陽戦は即ち攻撃の主題なればなり。是に於てか進んで第一軍及第四軍の前進状況を約説せざるべからず

第四節 第四軍の前進運動

野津大將の率ゆる軍の一部は、五月十九日を以て、大孤山附近に上陸、大孤山は太平洋河口に在り、九連城を去る三十七里二十町なりしたり。野津軍は、右に黒木軍の左翼に連り、左に奥軍の右翼に繋るものなり。上陸以來、王家屯の敵を撃攘し、六月八日黒木軍の一部隊と協同して岫巖を占領し、六月二十四日、仙家砦に奇襲し、三道河北方の高地を占領し、分水嶺の嶮を奪ひ進んで盤嶺を占領し、七月三十日を以て、拆木城を抜き海城に連り、茲に遼陽總攻撃の中央軍として位置せり、今其の位置に遼する迄の経過の概要を約叙せん。

A 上陸第一の衝突—王家屯の鏖撃—斥候戦

上陸地點の附近には、後貝加爾獨立旅團のウエルフネウジンスキー聯隊の第三中

隊あり、今や上陸野津軍の一部、大孤山北方約三里半、王家屯附近に於て衝突し、軍の一部たる歩兵之を包圍し、殆ど之を鏖滅し、將校二名下士以下十名を捕虜とせり。翌二十一日午後五時頃、大石橋土城子より河里寨に通ずる道路上に派遣したる將校斥候は、高家屯、大石橋子の南方約二吉羅附近に於て、敗竄兵約十騎に遭遇して之を鏖にせり。又五道溝土城子の東南約四吉羅に派遣したる將校斥候は、張家屯、同地の南方約二吉羅に在りに於て、敵騎二名及馬七頭を捕獲せり。又六月五日朝、金州街道、上范家屯にありし一小部隊は、干家屯、大孤山西北約十吉羅に在りに於て、西比利哥索第五聯隊第二中隊に屬する騎兵約三十を掩撃し、之を西北に潰亂せしめ、兵卒二名馬四十二頭を捕獲したり。

B 第一軍と連繫運動—岫巖の占領—分水

嶺方向の前進

今や第四軍の先頭は、其前進目標の第一關を突破せざるべからず、第一軍左翼の前進側面は、岫巖に於ける露軍に脅威せらるゝの状況に在るが故に、第四軍は第一軍

第二編 本紀 第五章 遼陽方面前進戦(即移動性目標) 第四節

第四軍の前進

五三五

B 第一軍と連繫運動—
岫巖の占領—分水嶺
前進方

の左翼と連系して岫巖を攻略せざるべからず此地に於ける敵の兵力は騎兵約千五六百砲六門を有す是に於て六月八日第一軍の左翼一部隊と共に協同し岫巖附近に在りし露軍を攻撃し五時十分全く岫巖を占領したり敵の砲兵及騎兵の一部は柞木城方向に其大部は蓋平方向に退却せり日本軍の戦死卒二、負傷將校一、下士卒七に過ぎず。六月十八日夜來日本の歩騎兵連合の斥候隊は岫巖の西方約十二里七盤嶺附近其他各所に於て露軍と衝突し將校一兵卒二を捕獲し其五十餘名を斃し六月二十五日軍の一部は大石橋街道上三道勾西北約四里の仙家峪に露軍の騎兵一中隊を奇襲し之を潰亂せしめ尙ほ三道河河北方高地を占領せる敵を撃攘し午前八時三十分之を占領せり。敵は死者六十餘を残し西北方に退却し下哈噠湯見勾附近に位置せし歩砲兵に依りて收容せられたり。其兵數歩兵約二大隊砲兵約一中隊なり今や我軍は分水嶺を攻撃すべき時機に達せり。是に於て廿六日我軍は三縱隊となり淺田支隊は楊畔溝より分水嶺に鎌田支隊は大桑岐嶺より敵の右翼に丸井支隊は接官所より迂回して敵の右側背に向ふ同時に東條支隊を以て丸井支隊の背後を掩護せしめたり。東條支隊は此任務を以て

前進し上哈噠周家庄の線を占領せる敵を攻撃せしに該地の兵は歩兵約三大隊砲六門機關砲二門を以て固く陣地を占領したり。該支隊は午前五時より敵と對戦して夜に入り戰鬪隊形の儘露營せり。二十七日午前夜半より東條支隊は更に攻撃に着手し遂に之を撃退し其陣地を占領せり。然るに敵は同日午後に至り歩兵約三大隊砲十六門の増援を得て屢々同支隊の奪取せる陣地の回復を試みしも悉く之を撃退し午前七時半迄砲戦を續けたり。丸井支隊は前六日夜接官所に達し一部隊を以て下哈塔の敵東條支隊に對せし者の側背に迫らしめ首方は廿七日午前三時より分水嶺の背後に在る敵の陣地に迂回する爲め前進せり然るに二道溝附近に在りし敵の歩兵約二大隊の爲め抵抗を受け午前十一時之を撃攘して三道溝に達せり。淺田支隊は廿六日王家堡子附近を防禦せる敵の歩騎兵約二千を撃退し同夜瓦房店分水嶺東麓以南にて夜を徹し廿七日午前五時より先づ砲戦を開始せしも敵は堅固なる砲台内に於て巧に應戦し殊に既知の射距離を以て彈雨を集中せしを以て我砲兵は一時苦戦せり恰も好し廿六日夜半より敵の右翼に迂回せる鎌田支隊は弟兄山分水嶺の南腹を準備せる敵の歩兵約二中隊を撃攘し午前

七時以後、辛ふじて砲兵を同地に排列し、同く側面より分水嶺の敵を縦射し、歩兵は弟兄山中より縦々敵の側背に迂回せり。又淺田支隊より派遣せし深谷聯隊も、二十六日夜半より運動を開始し、午前七時揚畔溝西方高地に在りし約二中隊の敵を撃攘して、敵の左側背に迂回せり。此に於て敵は全く行動の自由を失し、午前七時五十分其砲兵先づ沈黙し、同八時頃より全線の動搖を始めたり。敵の正面に向ひし、淺田支隊の歩兵は、工兵の援助を以て、敵の副防禦を撃破しつゝ、前進肉迫し、午前十一時半、分水嶺山頂を占領し、砲兵を以て猛烈に敵を追撃せり。敵は松坑子に在りし、糧秣倉庫を燒棄し、潰亂して、橋木城方面に退却せり。捕虜將校六下士以下八十二、敵の遺棄せる死體は、山間豁谷に點在し、其數を判別し難きも、本道上に遺棄せしものみにても九十を下らず、橋木城街道附近に於ける日本軍戰死將校は大庭歩兵少佐にして、其他死傷下士卒以下百二十名、東條支隊には約五十名あり。分水嶺の陣地は、橋木城街道の關門として、約三ヶ月間露軍の全力を盡して、構成せし半永久築城なるを以て、砲臺、歩兵塹壕、廠舎、交通路、露營の設備等完備せり。加ふるに正面前には、鐵條網、鹿柴を以て堅固に守備し、到底正面攻撃のみにては、攻略し得ざる

ものあり。然れども淺田支隊は、正面より巧に動作し、各縱隊も漸次敵の退路に迫り、遂に此堅固なる陣地を攻略するを得たり。捕虜其他に依て知り得たる露軍の兵力は、丸井枝隊の正面に位置せしものは、エニセイスク豫備歩兵二大隊、分水嶺に位地せしものは、狙撃歩兵第二十一聯隊、イルクック豫備歩兵の二大隊、シベリヤコサック第七聯隊、ウエルフ、ネシンスク第一聯隊の半部、シベリア豫備砲兵第二大隊、コウチイ歩兵七大隊、騎兵九中隊、砲兵二中隊、東條支隊に對せしものは、二十六日以來、豫備歩兵の三大隊、マチ、ンスの騎兵第一聯隊、ウエルフ、ネデンスキ、第一聯隊の半部、サブイカル騎砲兵第一中隊、及機關砲二門にして、二十七日午後に至り歩兵三大隊、砲二中隊を増加したるものゝ如しと云ふ。

C 橋木城占領戰

其一 橋木城方面前進戰

野津軍は已に分水嶺の險を奪へり進んで、橋木城に逼らざるへからず。七月九日其一縱隊を以て、仙家峠、接官听方面より湯池方面に、又一支隊を以て分水嶺を経て、

五四〇

栃木城に向ひ前進せしめたり。接官所附近に在りし露軍は、日本軍の前進を見て谷地を西南に向ひ退却せるも、午後五時頃其の砲兵周家庄西方高地に現はれ射撃を開始せり。栃木城に向ひし一縦隊は途中敵を撃攘しつゝ、西羊、拉峪附近に在りし露軍の前進陣地を襲撃せしに、敵は非常に狼狽せしが如きも、後に至り歩兵約十大隊、砲兵一中隊、現出せしを以て、縦隊は偵察の目的を達し交戦の必要なを以て、戦闘を避け一地點に引揚げたり。栃木城以南に在る露軍は、約一師團にして其騎兵の大部は、牛心山方向に位置せるものゝ如し。接官所及仙家峪に通ずる、二道路を取りて前進せし一縦隊の一部は、九日午前九時より十一時の間に、仙家峪及芹菜峪南方高地に達せり。然るに露軍は仙家峪西方高地を占領して頑固に抵抗し、夜に至るまで退却せざりし。接官所方面に進みし同縦隊の主力は、周家庄西方高地を占領せる歩兵約二大隊、砲兵約一中隊の敵と九日夕刻まで對戦し、遂に之を撃退し、接官所附近にて戦闘隊形の儘露營せり。翌十日拂曉より前記の諸隊は、協同して仙家峪西方高地の敵を撃攘し、之を追撃して、更に秀才溝の高地を堅固に占領せる敵を諸方面より攻撃して該地を占領し、今や栃木城攻撃の時機に達せり。

其二―栃木城攻撃

露軍の栃木城に據れる地利を考ふるに、栃木城は遼陽方面より岫巖方面に至る道路及び鳳凰城方面より蓋平方面に至る道路の交叉點にして、換言すれば渤海に面する滿洲と黃海に面する滿洲と、北滿洲と南滿洲とを一點に約する要衝とす。其山地線は滿洲の西南に在りて敵の爲めには、岫巖方面より遼陽方面に進む我に對しても亦鳳凰城方面より蓋平方面に進む我に對しても、之を拒止するに唯一の場所なり。由之を圍み、四道交叉し、岐れて狹隘なる平野の間を行くと、いづれも廣きは一里狭きは三四町に過ぎず、故に其交叉點の一角を爲す山地に據り、下瞰以て望めば百萬の精兵進むを難ずるの地なり。されば露軍は早くも茲に着眼し、五月以前より幾隊の工兵を派して、要地に防禦設備を爲さしめ附近長三里、横一

ザスリツケ中將の報告に曰く

七月廿日我東正面に於ける日本軍は其主力を以て栃木城附近に於て、ダテ、ツツア、アキヤ、ランツ、方向に向け我南正面を攻撃せんとするものゝ如し、戦闘の初期は極めて有利にして、ロマスキ、中佐よりの報告に依れば中佐は負傷せるも頑強に其の陣地を支持せり、中佐は援隊を請求し來らざりしと雖も、本職は増援の爲め先づ二中隊を出し次に一大隊を派遣したり、日本軍は陣地の中央なる高地脈を攻撃すると同時に、ミシヤン、コ少將の枝隊を攻撃し又復れて我左側を攻撃したり、戦闘の初

里に渉るの間、一面に各種の防禦工事を施し、遠く之を望めば、一の長城の如き觀あり。七月三十一日及び八月一日に於ける敵の陣地は、栃木城西方三角山より同南方紅蜜嶺まで、凡そ二里半の間に跨り、三角山西北方鞍部には、約歩兵二中隊を置き、黄家子西部の北方鞍部には砲六門、同鞍部の西北方高地の丘陵には、同二門の砲を据え、又東楊樹溝東北方高地には、歩兵約二中隊、(二大隊との説あり)楊樹溝附近には一中隊、白草蜜當方高地の丘陵には、二小隊、其東南に當る梁家堡子西方高地、及考家谿には、八門の砲を据付け、後方には幾多の兵馬を備ふ。此全長凡

期は我砲兵は日本軍の砲兵に對して優勢を占め我砲臺は敵砲を沈黙せしめ陣地を轉換するに能はざらしめたるのみならず我各砲臺は一も損害を受けず午後一時ソロムスキー中佐より左の報告に接せり曰く日本軍は大損害を受けて迂回運動を中止したり本職尙頑強に防守すと此報告を接受すると同時に我枝隊は既に山脈の三項線を撤退したるを見たり然れどもソロムスキーは猶ほ留りて其の陣地を支持せり我右側は脅威を受ると無くして砲戦を繼續し日本軍は此より先き山砲及び野砲を送致したりと雖も我砲兵は依然其の火力を以て敵の砲兵を壓倒し得たり午後三時四十分本職は最右側に位置せしめたる一部隊より同隊は其山間の陣地より退却したりとの報告に接せり此れ日本軍の其の側面に迂回したるを以てなり砲六門を委棄し將校二名戦死し二名負傷し砲兵中隊長は負傷す此れより先き日本軍は其の陣地の左方に砲兵二中隊を増加し極左側の砲臺と共に我砲臺を砲撃し且つ我陣地の右側を縱射し始めたり此に由て我が砲臺破壊せられ我右側大損害を受くるに至れり此の時砲臺は破壊せられしが砲四門だけは之を運搬し去るを得他の四門は破壊して戦場を委棄したり但し運搬し去りたる砲四門中二門も馬匹無かりし爲に其の要部を破壊して委棄したりと本職は日本軍の注意を我右側より轉せしめんが爲に午後五時レホツ大佐に命令して攻撃を開始せしめたり此の攻撃運動を援護せんが爲に本職は我各砲臺に命じて日本

そ一里廿町、其第五師團全部を集めたる者の如く、栃木城南方には、紅蜜嶺北方高地及章三谿北方高地に砲兵陣地三個宛を構へ、小房身東方高地にも若干の砲門を据え置けり。戰鬪第一線は、章三谿西方高地より、ダフツイ東方の高地に亘り、其後方には重疊せる陣地を構へたり。

軍の占據したる高地線に猛火を開始せしめたり我砲火は日本軍大死傷を生ぜしめ我歩兵は此の隊次を以て迅速に主要なる山頂を横斷して前進し日本軍に向て兩側より突進したるに日本軍は此の衝力に抵抗する能はずして忽ち其の占據せる三項線を撤去したり此戰鬪の後本職はレホツ大佐に命じて前進を停止せんことを命令したり午後七時本職は海城方面に退去せよとの命令に接せり此の會戦中ダフツイ溪谷を偵察し又彈藥の補給傷者の運搬に任ぜし孫薩克聯隊長の報告に據るに日本軍の三師團はハフツ市を通過するを見たりといふ七月廿日及び七月廿一日の我死傷は只今に至るまで將校二十九名及び下士卒一千餘名の見込みなり

全長凡そ一里第卅一師團の主力及び其他の兵種を加へたるものゝ如し。之を公報に徴すれば、軍の前面に在る敵は、紅蜜嶺北方高地より章三谿を徑て、三角山東方高地に亘り、堅固なる防禦工事を成し、紅蜜嶺南方高地には砲兵肩牆を見る、又老達子附近には約三大隊の敵兵あり、軍は此敵に對し、去る七月三十日主力を以て、大房身西方高地より、下八盆溝北方高地に亘る線を左翼隊を以て、賈家堡子南方高地より、英落山西南方高地に亘る線を占領せり。翌卅一日拂曉、軍は主力を以て、三角山東方の高地の敵に向ひ、左翼隊を以て東西楊樹溝北方高地の敵に向ひ、攻撃を開

其二 栃木城攻撃

始し左翼隊は、午前八時頃東楊樹溝東北方標高三百四十五米突以西一帯の敵陣地を攻略せり。然るに二道溝方面に在りては、敵益々其兵力を増加し、其砲兵は約二十一門に増加せしも、我左翼隊は新に來着せる一枝隊と協力し、猛烈なる砲戰の後之を攻撃し、午前三時の頃、遂に之を北方に撃退せり、軍の主力は午前十時三十分の頃、太平嶺西方高地の敵陣地を攻略するを得たるも、章三峪及小房身東方高地に在る砲兵より、猛烈なる射撃を受け、前進を繼續する事能はず。其後敵は漸次新銳の兵力を増加し、午後五時半頃に至り、全線攻撃に轉じ來れり。我歩砲兵直に之を撃退し、敵に多大の損傷を與へしも、敵砲の猛射の爲め追撃する能はず、遂に近く相接して夜を徹せり。是より先、我左翼隊は、敵を撃退し、其退路に迫りしを以て、敵は夜暗を利用し、逐次其陣地を撤し、海城方向に退却せり。敵は數ヶ月を費して、築造せる堅固なる防禦陣地に據り、特に速射砲を猛射し、我砲兵を苦しめ、大に攻撃に困難を感ぜしめたり。我軍の死傷約四百名にして、敵は死體約百五十を戰場に遺して退却せり。我に對せし敵は、歩兵二師團、砲兵約七中隊なるが如く、而して中將アレキセエフ(歩兵第五師團長)之を統率せり、鹵獲品野砲六門、捕虜若干、此日炎熱酷しく、

正午室外華氏百二十度に上る」と。

此日十時三十分頃より午後に亘り中央部面に於ける戰況の如何猛烈なりしかは左の記事に徴するに之を想見するを得べきなり、『我左翼軍、即ち柝木城西より進み、各隊は比較的容易に進みたるも、中央部に在りし、各隊及び右翼の各隊は、比較的苦戰の地に在りたり。殊に章三峪西方高地及びその北方高地より進み、諸隊及び黃家堡子の砲兵を撲滅して進みたる各隊は、大に奮闘せざるを得ざる地位に立ちたり。即ち此方面の敵は、非常に猛烈なる勢を以て、再三逆襲して、我に當りたればなり。二部隊の前進路に當り、敵の二個大隊、山の背後より猛烈に逆襲し來るや、我先登に在りし一小隊、小隊長少尉矢田全男之に當り、其三分の二を失ふに至る迄射撃を繼續し、敵の近接し來るや、劍を抜いて渡り合ひ、遂に敵陣に斃れたり。雖も之が爲めに敵を喰ひ止むるを得たりと云ふ、之を初めとし、敵の諸隊多きは二個大隊、少なきも二中隊、我各方面に向て逆襲を試み、大に我軍を惱ましたるも、我勇敢なる將卒は、身を犠牲に供して、全軍の安固を保たしめたる美譚少なからず。上愈の逆襲に次て、敵の一個大隊は再び我中部隊(柝木城西より向ひし我軍)に向て逆

襲し來りたり、看守の任にありたる一中隊は力相敵せず、中隊は殆ど全滅せられんとするの勢なるより、已むを得ず退却を始め五人十人漸く中隊全部に及ばんとするの時、一兵卒あり、山頂に直立して、泰然動かず、味方には大聲疾呼して、敵の逆襲を傳へ、一方には中隊長と共に兵卒を勵まし終に我二個大隊の繼至して、敵を撃退するに至らしめたり。殊に敵の逆襲に對し、最も悲壯なる戰鬪を爲せし中隊あり、此日黃家堡子の敵の砲兵を撲滅して前進したる部隊は、更に前進して他の一部隊に連繫し、敵を追撃せんとするに當り、敵また猛烈に逆襲し來り、我先頭に在りし一中隊に突入したり、中隊血戰之に當り、中隊長藤原秀次以下將卒百七十五の死者を出すに至れり。と

野津軍は已に柘木城を抜き遼陽攻撃の中央線の位置に就かんとす、今や其右方に於ける黒木軍の前進状況を概説せざるべからず

第五節 第一軍の前進運動

日本第一軍は五月一日を以て、鴨綠江に其第一目標を撃破したる後、其六日を以て

鳳凰城を占領し、翌七日右方に寬甸縣を占領し、十一日を以て第二軍と連絡し、廿一日頭道溝に、廿六日寧河堡附近に於て敵と衝突し、之を撃退し、進んで遼陽邊門を占領し、六月七日賽馬集を占領し、翌八日大孤山上陸軍と協同して左方に岫巖を抜き、又一部隊を以て右方に懷仁を占領す。七月八日、敵一たび摩天嶺に逆襲し、十七日再び逆襲し來り、十九日橋頭附近に戰ひ、八月一日榆樹林子様子嶺に激戦して之を占領し、敵の軍團長ケルレル此役に斃る是に於て進んで遼陽本戰の右翼軍として位置せり

A 摩天嶺線逆襲戰前各方面の小戰鬪

第一軍は已に鴨綠江を蹴破し、九連城を陥れ、今や第二の運動に移らんとす。先づ騎兵斥候を各面に派遣したり、三日騎兵將校斥候、由上中尉以下十四名は湯山城と連せし時、同地南方高地に在る、敵の騎兵十五六名より砲撃を受け、直に其背後に迂回し、之を襲撃し、激烈なる格闘を交えたる後、鳳凰城方面に撃退し、尙ほ逃ぐるを追ふて高麗門東方一里涸川の線に達す。又六日騎兵斥候は、鳳凰城の東北に於て敵

の騎兵を襲撃し、二臺子、三臺子、四臺子の敵を撃退し、歩兵の一部隊を以て、鳳凰城を占領し。翌七日、軍の右翼一支隊は寛甸縣を占領せり。十一日午前六時、歩兵の一部隊は雪裡店より退却する敵騎三百餘名を攻撃し、其將校の負傷せる者一名を捕虜にす。其將校の俘に於て中尉なり及卒二名を捕虜とせり。(貝加爾高加索騎兵師團に屬せるチチン兵隊の一部なり)二十五日一部隊は大堡附近の敵を撃退し、敵は退て八道河堤附近を守る。又歩騎兵より成る一小枝隊を以て、大甸子より進み午後一時過ぎより砲撃して之を撃退し、夜半敵は鐵佛寺附近に停止せり。二十八日吉田枝隊は午前十時より豐陽邊門にある敵騎二千砲兵なしを攻撃し、同十一時半此を撃退して追撃中他の一部隊到着して之に加はり、全く該地を占領せり。露軍の主力は賽馬集方向、一部は掛牌嶺方向に退却せり。其の死傷は詳かならず、日本軍の損害は吉田枝隊に於て下士以下戦死三、負傷二十三なり、此の戦闘に參與したる他の一部隊は下士以下戦死一、負傷六なり。此日午前九時、遼陽街道上の騎兵斥候は、釜家堡子に於て、敵騎八を射撃し二を斃し、二を捕獲せり。又海城街道上の歩兵斥候は、午後一時、砂子崗北方約一里に於て、敵騎五に遭遇し、其二騎を馬と共に斃

せり。六月四日、賽馬集方向偵察の爲め派遣したる一小部隊は、午後二時頃新開嶺の西方に於て、露軍騎兵五六百に會し、之を撃破し、多大の損害を與へたり。是に於て、一部隊は賽馬集附近の敵を四方嶺方向に撃退し、午後三時、賽馬集を占領せり。露軍の兵力は歩兵二大隊砲二門にして、遺棄せし死傷二十三、捕虜將校三、卒五、其他損害少なからず。日本軍の損害は戦死九十二、負傷下士以下二百なり。通遼堡方面に向ひ、前日来派遣せられたる一部隊は、此日林家臺附近に、露軍の一部隊を破り、午後五時過ぎより戦闘二時間の後、張家石附近にありし敵の歩兵約六中隊騎兵三百を撃退せり。死傷五十、敵は七八十を下らず、翌八日、午後一部隊は大虎嶺附近の敵を撃破し、同五時二十分、大孤山上陸軍の一部と協力して、岫巖を占領せり。露軍は兩部隊の前面にありしものを合して、騎兵約四千砲六門にして、柞木城及蓋平方面に退却せり。日本軍戦死將校一、負傷將校一下士以下二十一にして、皆輕傷なり。軍の右翼部に於て、吉田枝隊の一部隊は、十一日坎椽口に於て、乘馬歩兵約一百を撃退し、翌十二日、渾江左岸四個子に於て、小部隊を驅逐し、午後三時、懷仁を占領した。二十二日、露軍の歩兵一聯隊騎兵二聯隊、砲兵一中隊は、賽馬集より前進し、豐陽

邊門に在る日本軍の一部隊を砲撃し、夜に入り新開嶺方面に退却せり、此役窪田少佐戦死す是に於て軍は其の一部隊を以て摩天嶺の嶮を奪ひ之を扼す

B 摩天嶺線の戦闘

其一 摩天嶺の逆襲戦

第一軍の右方懐仁を占領したるは、露軍の左翼に遊撃一團の兵力あり、軍の側面を脅威するの虞あるを以てならん、左方は已に大孤山上陸軍と連系して、漸次露軍を遼陽方向に壓迫しつゝあり、其中央面に於て摩天嶺の嶮を扼す、遼陽本戦右翼の形體漸次成熟し來ると同時に、露軍左翼目を追つて危険を加ふ。露軍は如何にもし之を奪回せんとす七月四日未明濃霧に乗じ、歩兵約二大隊は摩天嶺にある、日本軍の前哨に來襲し、突撃三回に及び、彼我接戦前哨は激戦の後之を撃退し、金家堡子(摩天嶺の西麓約一里半)迄追撃せり。露軍は様子嶺甜水站の西方方向に退却したり日本軍戦死十五負傷將校二下士以下二十九名なり露軍の死傷は無數にして、戦場に遺棄したるものゝみにても、死者三十傷者五十餘あり。公報を按ずるに、逆

襲の始め、午前四時頃、敵兵二三名、摩天嶺西北方約三基路米突の我が小哨を急襲し小哨長吉田少尉は直に之を其の後方に通すると同時に、漸次退却して其の本隊に合せんとするや、他の約一中隊の敵は、北方山地より現出して吾を包圍し、吉田少尉は部下の大部を、南方山地に差遣し、自ら五六の兵卒と共に止まり、格闘し敵を斬ること十數名、遂に血路を開きて退却せり、前哨部隊は銃聲を聞いて、直に陣地に赴かんとせしも、敵の一部は、已に我陣地中に進入しあり、茲に於て彼我悲惨なる格闘戦を爲せり。此際該前哨部隊の一部は、南方山地より側撃したる爲め、敵兵退却の色あり、恰も好し前哨主力の一部も、之れに増加し、遂に敵を撃退せり。茲に於て馬場大佐は、其部下の一部を率ゐて、金家堡子、摩天嶺の西方約一里半附近に至りて、塔灣西方の敵と相對せり、小高嶺西方に在りし、我が前哨部隊にも、摩天嶺方面より少しく遅れて、敵兵來襲せしが、忽ち撃退せり、敵の兵力は約二大隊なり、而して此戦闘は殆ど接戦にして、我が死傷の多くは數ヶ所の創傷を負へり。我戦死特務曹長吉場仲次以下十八名、負傷中尉河野治一(重傷)少尉小林郁四郎(輕傷)以下三十六名なり。敵の隊號は摩天嶺に向ひしものは、歩兵第十、第廿四聯隊、新開嶺に向ひしものは、歩兵